アルケイア―記録・情報・歴史―
第六号　二〇一二年三月　七七―一六一頁
南山大学史料室

近代地方商人の教養と趣味の蔵書

武田穂波

A Library of Intellectual and Graciousness by the Modern Local Merchant

TAKEDA Honami

archeia: documents, information and history
No.6 March, 2012 pp.77-161
Nanzan University Archives

近代地方商人の教養と趣味の蔵書

武田穂波

序

本論文では、江戸の終わり、慶応二年（一八六六）に香川県の商家に産まれ、商人として生きた後、昭和十九年（一九四四）に亡くなったひとりの人物の蔵書の考察を行う。この蔵書は筆者の知人宅に伝存していたが、何故蔵書が集められたのか、蔵書を形成した傳治とはどのような人物であったのかなど、多くのことが分からなくなっていた。また、保存状態があまり良くなく、改善が必要だった。今回筆者は知人より快く許可を頂き、蔵書の手入れと調査、研究を行うことができた。その結果、蔵書の持つ様々な特徴が明らかになった。

この蔵書には「明治二五年蔵書目録」が存在し、目録と現存する蔵書の比較から考察を行うことが可能だ。また、調査の結果、蔵書はおそらく一代で築かれ、他の人物が蔵書収集に関わった様子は見られないことが分かった。したがって、この蔵書から、近代地方商人の教養や趣味などの知的営為を読み取ることが可能であると考える。傳治は、地方商人でありつつ、蔵書を通して儒学や漢詩、囲碁、和歌、俳諧など幅広い関心を持った知識人的な側面も

有していた。傳治の蔵書は、近代地方商人の「知」の様相を分析する上で、格好の素材となる。

傳治の蔵書は、様々な制約を抱える蔵書研究〔1〕のなかでは、好条件が整っており、今後さらに進展するであろう地域社会における蔵書の研究に資するものと考える。本論文では傳治の蔵書の調査から、傳治がどのような思想や学問の下で蔵書を形成したのか、さらに、近代の地方商人がどのような教養・文化の世界に生きていたのかを考察したい。

なお、この論文では、傳治とその家についての情報は、行論に必要なものに限定した。

第一章　傳治蔵書と傳治について

第一節　平成二三年（二〇一一）のA家蔵書調査

A家（知人宅）における蔵書の伝存状況をまとめる。

蔵書は蔵の中の本棚・慳貪箱などに納められていた。装訂により分類されていたようで、主に和本の棚・洋本の棚に分かれた収納が行われている。和本はまとまりごとに麻ひもでくくられ、その本の題名と著者、年代、巻数などを記した黄色い札が挟まれていた（写真1・2）。蔵書にはシバンムシが発生し、棚も老朽化している。そのため、虫干しや手入れを行った。あわせて、以下のように蔵書の調査を実施した。

蔵書の調査及び手入れでは、蔵書群を確認すること。そして必要最小限の応急保存処置をとり、蔵書群の概要のデータ、保存現況のデータを収集すること。蔵書の手入れを行うことを目的とし、可能な範囲での記録を取りながら作業を進めた。なお、機材や時間の不足等々から、計測や幾つかの手順の省略、簡略化せざるを得なかった。

写真１　蔵書の様子

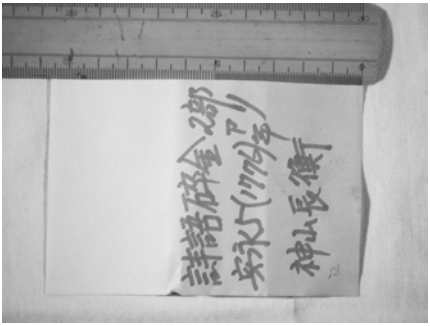


写真２　本に挟まれた黄色い札

調査に際しては、概要調査と詳細調査の二段階で実施した。概要調査の段階では全蔵書を調査の対象とし、詳細調査を行う段階では和本の納められた棚のみを調査した。これは、和本の棚の保存状態が洋本の棚よりも悪かったためであり、洋本の蔵書群については現状維持とした。また、蔵書の概要調査を行った段階で、和本の棚からは蔵書関連の資料が発見されたが、洋本に関する蔵書関連の資料は乏しかった。これらの資料との比較検討のためにも、和本の整理をすべきと判断した。

蔵書調査では、以下のような方法で調査を進めた。

まず蔵の内外の撮影を行い、次に蔵書が収納されている保存容器の位置と周辺状況を記録する。棚の配置図のスケッチを作成し、棚ごとに番号札を設置すると共に、番号札に振った番号Ａ～Ｘ（〈棚番号〉と呼称）を配置図に書き込んでいく。そして番号札と共に本棚を撮影する。ここまでが、全蔵書を対象とした概要調査である。

そして次の段階では、和本の納められた棚について詳細な調査を行っていく。保存容器ごとに蔵書の収納・配列の現状と、蔵書群の概要を記録する。まず棚ごとに、棚番号を含めた写真を撮影し、つぎに棚内部の蔵書を詳しく撮影していく。蔵書には黄色い札が挟まれていた。この札が一枚一枚見えるように撮影し、どの蔵書がどこに納め

られていたのかが分かるようにする。なお、詳細な調査を実施したのは、棚番号A・B・F・T・U・Vの棚である。

最後に、蔵書の虫干しや手入れを行う。また、手入れと並行して目録を作成した。

第二節　蔵書関連の文書及び蔵書を収集した人物

蔵書を調べる上で考えなければならないのが、蔵書を集めた人物は誰か、という問題だ。A家では、傳治という人物が蔵書を集めたと伝えられている。

まず、伝存する蔵書関連の文書を紹介していこう。蔵書関連の文書は、棚Vの「左一」、「左より三」とチョークで書かれた引き出しから発見された。

・「左一」引き出し：明治二五年蔵書目録一冊（写真3・4）。明治二五年蔵書目録とは、表紙に「明治二十五年九がつ(ママ)製　蔵書目録」、裏表紙に「霞堂紫舟生　之有見」と書き込まれた蔵書目録である。

・「左より三」引き出し：書店から傳治宛てに出された封筒五点。防虫剤販売店から傳治宛てに出された封筒一点。明治四三年（一九一〇）の『第一回圖書展覽會目録』一冊、『國書刊行會第二期趣意書』一冊。大正六年（一九一七）の『家庭繪本文庫見本』一冊、

写真３　明治二五年蔵書目録表紙

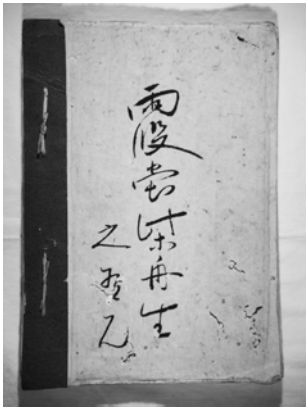


写真４　明治二五年蔵書目録裏表紙

『國書刊行會主旨及規定』一冊。昭和十一年（一九三六）の文華堂古書月報一冊。

・その他の蔵書に関係する資料：博物館への資料貸出証明書十四通。博物館に貸し出した展示品に付けられていたと思われる札数点。博物館からの書簡。雅号印・蔵書印と思われる印章数点。印章に関する書面一点など。

以上の文書の調査から、和本の蔵書を集めた人物は傳治（一八六六～一九四四）である可能性が高くなった。まず、和本・写本・洋本類を取り扱う書店から、傳治宛てに「古書目録在中」と刷られた封筒が送られている。和本の蔵書の多くには「紫舟珍蔵」という蔵書印が捺されており、明治二五年蔵書目録の裏表紙にもまた、「霞堂紫舟生　之有見」という書き込みが見られ、紫舟という人物が蔵書と深く関わりを持つことが分かったが、この紫舟の名が傳治の戒名に含まれていた。傳治以外に、紫舟の名の入った戒名を用いている人物は、A家には見られない事などから、蔵書の管理・収集を中心となって行った人物は、紫舟号を用いていた傳治であると見てよいと思われる。

加えて、後に明治二五年蔵書目録と現存する蔵書（和本のみ）を比較したところ、現存する蔵書では本の冊数が大幅に増加しているが、蔵書には傳治が亡くなる年までの刊行年の本しか存在しないことが分かった。これらの事実からも、蔵書を収集し管理していた人物が傳治であるという推測はより確実になる。傳治以外の人物が、蔵書の収集に大きく関わった可能性は低い。

以上より、A家の蔵書の内、特に和本を収集した人物は傳治であると判断される。本論文では、和本の納められた棚A・B・F・T・U・V左・V右の蔵書を、「傳治蔵書」と呼称する。

第三節　傳治の人物像

傳治は慶応二年（一八六六）に商家の跡取り息子として産まれる。傳治の家系であるA家は、地域の地主二家の

系譜をひいており、A家自体も商業を営みながら地主として収入を得ていたようだ。A家の本家は、江戸期には廻船問屋を営んでいた。A家はこの本家から江戸末期に分家した家筋にあたる。

傳治が生まれた土地は、城下町であると共に、商工業の盛んな港町であり、農村でもあった。港の存在に加え、寺社参詣による人の往来も多く、本を含めた多くの情報が集積される環境となっていたものと推測される。

このような土地に生まれた傳治は、明治六年（一八七三）に父が亡くなると、七歳で家督を相続する。その後明治八年（一八七五）に九歳で尋常小学校の下等小学第八級に入学すると、明治十二年（一八七九）十三歳で下等小学第二級を卒業し、同年中等小学第一級に進級し、十二月に中等小学を卒業したことが、卒業証明書から分かる。その後の学歴は不明だが、他に学校関連の文書が存在しないことから、学歴はここまでと見てよいだろう。

家業を受け継いだ傳治は、商業を営みつつ書籍の収集を行う。文書や蔵書を調べたところ、地元の親戚や知人の他に、京都・大阪・東京の書店などからも蔵書を入手していることが分かった。[2] その後、七四歳となる昭和十五年（一九四〇）には、郷土博物館や地域の資料館へ文書の貸し出しを行っている。貸し出した文書は多くが地方文書、測量役人が来た際の記録などだが、中には幕末期の地域の著名人や事件に関する文書もみられる。昭和十九年（一九四四）十月、傳治は七八歳で亡くなった。

傳治は、「知識人」[3]や「地方名望家」[4]と呼び得る人物だったのか、あるいは一般的な商人の一人だったのだろうか。香川県の人物事典系統の本[5]を調べたところ傳治の名は見つからず、また、現在分かっている傳治の活動を見ても、地域に大きな影響を与えたり、顕著な活動を行っていた様子はうかがえない。おそらく傳治は地方名望家ではなかっただろう。だが一方で、蔵書を形成し、儒学を中心とした学問教養を幅広く学ぶ傳治を、一般的な商人とする事も難しい。傳治は地方商人として商業を営みつつ、蔵書を通して幅広い学びを行うという知識人的な側面も有

していたのである。

加えて、博物館に傳治のコレクションが貸し出されていた事は、彼が知識人として社会的に認知されていたことを示すものと考えてよいだろう。同様に、傳治が学んでいた漢学的教養も、社会から隔絶して修得されたとは考えにくい。彼が蔵書を集積し、漢学を学んだ事により、近代地域社会では知識人とみなされたと考えられる。傳治蔵書は、このような人物が形成した蔵書として捉える必要がある。

第二章　傳治蔵書の目録作成

第一節　平成二三年蔵書目録の作成

傳治蔵書を調査する上で、どのような本が存在しているのかを調べるために、平成二三年（二〇一一）一〇月一〇日～一〇月二三日にかけて、「平成二三年蔵書目録」という目録を作成した。以下の考察はこの目録による。

目録作成にあたって、大学共同利用法人国文学研究資料館、電子資料館の日本古典籍総合目録[6]を使用した。また、日本古典籍総合目録に記載されていない本の情報を調べる上で、以下の目録を使用した。

・国立国会図書館 NDL-OPAC
・早稲田大学図書館　古典籍総合データベース
・西尾市岩瀬文庫　西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース（試運転）

目録には次の項目を設けた。

「本番号」：本の目録内での並びと冊数を記録するため、本一冊一冊に番号を振った。

「棚番号」：その本が納められていた棚を表す記号である。今回の目録作成では、和本群が収蔵されていた棚A・B・F・T・U・V右・V左のみを使用している。

「書名」：書名は、外題、内題を参照しつつ決定し、判読困難な字は□で示した。また、JIS規格第2水準に無い文字は、常用字体で表記した。なお、虫害などで書名を読み取れなかった場合は、本に挟まれていた札を参照し（写真2）、注記の項目に「書名は本に挟まれた札参照」と記した。

「巻数」：その本が何巻から何巻まで存在するのかを示す。

「著者」：著者は題箋、見返・扉、序、目録、巻首、巻尾、跋文、刊記等を調べ決定した。以上から著者を確定することが出来なかった場合は、本に挟まれた札に拠り著者を記し、注記の項目に「著者は本に挟まれた札参照」とした。

「刊行年」：刊行年は題箋、見返・扉、序、目録、巻首、巻尾、跋文、刊記等を調べ決定し、西暦で表記した。本の中に見られる、刊行年に関すると思われる記述の内、最も年代の新しいものを記載した。

「和暦　刊行年」：「刊行年」の項目に書き込んだ年代を、和暦で表記した。

「初版年」：「刊行年」「和暦　刊行年」の項目に書き込まなかった年代で、本の中に見られる、刊行年に関すると思われる記述を記載している。「明治8　版権免許　明治11　再版御届　明治14　三刻御届　明治18　四刻御届」のような形で記載をしている。

「分類」：日本古典籍総合目録を検索し、「著作詳細」画面の「分類」の項目をもとに決定した。日本古典籍総合目録では分類項目が記入されていない本及び日本古典籍総合目録に記載のない本については、書名からの類推で分類を決定した。内容の調査によっても分類を決定した。決定した分類が確実とはいえない場合は、分類に「?」と

付した。

なお、日本古典籍総合目録における著作の分類は、『国書総目録』の「分類」等に依拠しており、新規に追加した著作にもこの分類が与えられている（日本古典籍総合目録　利用の仕方）。

「注記」：様々な補足の情報を記した。

「日本古典籍総合目録情報」：日本古典籍総合目録にその本の情報が記載されているかを示す。記載されていなかったものは「×」とした。日本古典籍総合目録に記載されている本と同じ本か不明な場合、題が読み取れず検索を行えなかった場合などには「不明」とした。なお、「×」とした本の内、江戸時代以前のものについては別途、国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学での検索を行い、本の情報の有無を確かめている。この検索でも確認できなかった本については、「国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学で検索を行ったが記載なし」と注記の部分に書き込んだ。

第二節　明治二五年蔵書目録

傳治蔵書には、明治二五年蔵書目録という目録が存在する。表紙には墨書で「明治二十五年九がつ（ママ）製　蔵書目録」と書き込まれ、裏表紙には同じく墨書で「霞堂紫舟生　之有見」との書き込みがなされている。裏表紙に「紫舟」の名が見られることから、この目録を書いた人物は傳治であると考えられる。明治二五年（一八九二）、傳治が二六歳の時に書かれたとみられるこの蔵書目録は、傳治蔵書の変遷を追う上で重要な資料となる。そこで、明治二五年蔵書目録を調査した結果、この蔵書目録には明治二五年以降に少なくとも一度、手が加えられている事が分かった。明治二五年蔵書目録全五七七冊の内、四九七冊目に書き込まれた『紀伊国名所図会』は現存してお

り、見返に「明治三十三年三月求之□□傳治」という書き込みがある。五六九冊目、五七〇冊目に書き込まれていた『紀伊国名所図会』『東海道名所図会』にも同様の書き込みがみられ、この二冊は目録全五七七冊中のほぼ最後の書き込みとなっている。明治三三年に購入したという本では、ほぼ最後のページに同様の書き込みがあることから、四九七冊目の『紀伊国名所図会』以降は全て、明治三三年（一九〇〇）以降に蔵書目録に書き込まれたものであり、そこから最後の五七七冊目までは一度に書き込まれたのではないかと思われる。この蔵書目録は傳治が若い頃、二〇代～三〇代にかけて用いていたものと考えられる。[7]

第三節　明治二五年蔵書目録比較版

平成二三年蔵書目録と比較検討するため、明治二五年蔵書目録に項目を追加した比較版を作成した。目録作成にあたっては、平成二三年蔵書目録作成の際に使用した目録及び文献と同じものを用いた。

目録の項目は以下の通りである。

「本番号」：目録の記載順に、本一冊一冊に番号を振った。

「部名」：明治二五年蔵書目録の記載に従った。部名記載が無くなったところから、目録に区切りが見られる毎に、「分野記載×1」「分野記載×2」と区分した。

「編集者」：明治二五年蔵書目録の記載に従った。JIS規格第2水準に無い文字、字が読み取れない場合は□で示した。以下全ての項目で同様の方法をとった。

「名称」「装本」「冊数」：明治二五年蔵書目録の記載に従った。

「平成二三蔵書目録での名称」：現存が確認できた場合は、平成二三年蔵書目録における本の名称を書き込んだ。

比定できない場合は「不明」とし、現存しない場合は「×」とした。

「年代」：現存する本は、平成二三年蔵書目録にしたがって年代を書き込んだ。同じ書名の本が複数存在し、どれが明治二五年蔵書目録に記載されている本か分からない場合には「比定困難」とした。現存が確認できない場合は「不明」とした。

「平成二三蔵書目録での分類」：現存する本は、平成二三年蔵書目録での分類を書き込んだ。

「古典籍総合目録での分類」：日本古典籍総合目録での「分類」の項目をもとに「古典籍総合目録での分類」を決定した。日本古典籍総合目録に分類の記載が無い場合や本の情報が無い場合は「×」とした。

「注記」：補足情報を記した。現存する本については、基本的に平成二三年蔵書目録の注記の内容も記載した。

第三章　二つの目録の考察

第一節　地域社会の蔵書研究の現状

蔵書を調査するにあたり、傳治蔵書のような蔵書の研究が、現在どのように行われているのかをみていく。工藤航平「近世地域社会における蔵書とは何か―地域〈知〉の史料論的研究を目指して―」には近世地域社会の書物をめぐる研究状況[8]がまとめられている。

同論文によれば、従来書物を扱った研究は主に書誌学や国文学の分野において行われ、テキスト分析や作家作品論が中心となっていた。歴史学の分野では古文書などが重視され、書物は文化史の一部で研究に利用されてきた。一九九〇年代になると、書物を史料として扱い、地域に残存する書物に注目して、書物が持つ社会的な影響力の解

明、享受した人物（読者）・社会の変容を描く研究が行われるようになる。近年では書物・出版と社会との相互的関係の解明、書物・出版文化の歴史的位置の総合的な解明を目指し、歴史学・国文学・民俗学などの枠組みを超えた共同研究が進められている。

書物研究が進展する中で、個々の書物としてだけでなく、群としての書物群、「蔵書」へも関心が向けられた。書物群への注目は、史料調査・整理という現場の中で提起され、史料として書物を扱う方法論が提示されたことに始まる（書籍史料論）。これは、書籍の集積過程、「蔵書」の構成、思想的傾向、「家」や地域の特性・役割などを明らかにするもので、地域史・地方史にまで発展する可能性を含むと評価されている。書物の史料論的検討のほか、享受者視点での書物の分類、「蔵書」の構造、書物伝来論などの研究結果が蓄積されている。また、小林文雄氏による「蔵書の家」論という書物貸借ネットワークの解明から、「役」として蔵書を蓄積する村役人像を明らかにした研究が契機となり、ネットワーク論を中心とした「蔵書」への注目と、全国的な「蔵書」の発掘が行われ、特に、古文書などによる蔵書把握が行われるようになった。このなかで、蔵書構成の傾向から個人・「家」の特性、書物流通からの蔵書構成の解明、貸借ネットワークと図書館機能、貸本屋機能、情報論など多様な研究結果が蓄積されている（工藤二〇一一）。

このような状況にある近年の蔵書研究において、傳治蔵書は今後さらに進展するであろう地域社会の蔵書の研究の中で、ひとつの事例として意味を持つのではないかと考えている。

第二節　平成二三年蔵書目録の考察

平成二三年蔵書目録を作成した結果、合計二三八七冊の本が納められている事が分かった。内訳は棚Ａ：一四三

表１　傳治蔵書の分類と冊数

種別	冊数	種別	冊数	種別	冊数
漢学	463	歌文	9	水産	2
通史	145	和歌・注釈	9	俳諧・絵画	2
漢詩	142	書画	8	目録	2
辞書	120	家伝	8	物語	2
漢詩文	109	漢詩・注釈	8	物語・注釈	2
読本	96	書簡	8	倫理	2
実録	75	制度	8	和算	2
伝記	74	心学	7	仮名草子	2
戦記	57	史論	7	滑稽本	2
書道	56	歴史	6	紀行・漢詩文	2
地誌	47	軍記物語	6	神祇	2
兵法	44	国学	5	人情本	2
教訓	40	臨済	5	占卜	2
政治	35	海防・政治	5	文集	2
随筆	31	海防・砲術	5	蚕業	1
教育	30	外国史	4	家事	1
往来物	28	歌謡	4	貨幣	1
囲碁	27	狂歌	4	漢詩・絵画	1
合巻	24	金石文	4	教育・地誌	1
茶道	23	礼法	4	神社	1
歴史物語	23	軍記物語・考証	4	注釈	1
俳諧	21	天文	4	通史・史論	1
伝記・絵画	20	楽器	3	伝記・書画	1
系譜	20	花道	3	日記	1
絵画	19	暦	3	年代記	1
医学	18	書誌	3	年表	1
語学	18	真言	3	年表・書画	1
漢文	17	通史・辞書	3	美術・工芸	1
雑史	16	謡曲	3	仏教	1
紀行	15	歌学	3	名鑑	1
漢学・外国史	14	見聞記	3	名鑑・武鑑	1
辞書・節用集	14	思想	3	和歌・漢詩文	1
漢詩・辞書	12	印譜	2	戯文	1
法制	11	漢詩・和歌	2	狂詩・狂文	1
農業	10	災異	2	事典	1
漢文集	9	詩文集	2	伝記・兵法	1
小説	9	儒学	2	物理	1
書目	9	書道・漢詩	2	有職故実	1
和歌	9	書道・辞書	2	不明	209

冊　棚B：二三〇冊　棚F：三九冊　棚T：一一八冊　棚U：五七四　棚V右：五九一冊　棚V左：六九二冊となっている。ここからは平成二三年蔵書目録を元に、傳治蔵書の考察を進めていく。

まず蔵書を調べるにあたって、傳治がどのような分野に興味を持ち、蔵書を収集していたのかを明らかにするため、傳治蔵書を分類ごとに調べ、冊数をカウントした（表1）。

その結果、冊数が多い順に、「漢学」四六三冊、「通史」一四五冊、「漢詩」一四二、「辞書」一二〇冊、「漢詩文」一〇九冊（以下略）となっていることが分かった。「漢学」の分類の冊数が飛びぬけて多い事が明らかである。また、「漢詩」、「漢詩文」などの冊数も多く、漢学関係の学問や教養が多く蔵書に取り入れられていることがわかる。

さらに、四番目に多い「辞書」の分類を調べたところ、『康熙字典』、『増読大公益会玉篇大全』、『字彙』『頭書字彙』など、辞書の大半が中国の字書であることが分かった（新村一九八三）。これだけ多数の中国の字書を必要とした理由は、やはり漢文を読むためと考えられる。傳治は漢学関連の書物を用いた学習を行っており、そのために多数の字書を必要としたのではないだろうか。

第三節　刊行年にみる収集の傾向

傳治の蔵書は、どのような意識の下で収集されたものなのだろうか。古写本や古版本[9]、稀覯本をコレクター的に収集したものなのか、あるいはもっぱら、学びのために収集を行ったのか。蔵書の年代から何らかの傾向を読み取ることができないかと考え、蔵書の刊行年と冊数を示したものが表2である。

調査の結果、冊数の多い順に一八七〇～一八七九年二一五冊、一八八〇～一八八九年二〇九冊、一八五〇～一八五九年一九二冊、一八九〇～一八九九年一三九冊、一八六〇～一八六九年一三五冊、一七一二～一七一九年

表２　刊行年と冊数・分類

刊行年	冊数	分類（冊数）
1575	1	書道・漢詩（1）
1596	4	漢学（4）
1637～1638	13	戦記（6）仮名草子（2）漢学（5）
1649	3	漢学（2）不明（1）
1664～1666	25	漢学（17）漢詩・注釈（8）
1670～1675	26	漢詩文（2）辞書（14）漢学（8）書道・辞書（2）
1680～1688	13	茶道（5）兵法（1）伝記（4）不明（3）
1701～1707	4	茶道（2）真言（2）
1712～1719	121	漢学（27）漢詩文（4）暦（3）辞書（39）随筆（3）戦記（45）
1721～1729	20	教訓（8）漢学（1）政治（11）
1730～1739	14	紀行（1）漢詩文（4）教訓（5）語学（1）心学（3）
1747	1	書簡（1）
1750～1755	44	伝記（1）漢学（16）兵法（10）書誌（3）辞書（1）漢詩文（12）漢文（1）
1762～1768	19	謡曲（1）漢詩文（1）辞書・節用集（13）漢学（3）往来物（1）
1770～1779	44	茶道（2）漢学（15）漢詩（5）戯文（1）天文（4）不明（17）
1780～1789	44	漢学（11）漢詩文（7）漢詩（3）謡曲（1）書道（3）臨済（3）教育（5）海防･政治（5）伝記･兵法（1）国学（1）政治（1）随筆（3）
1791～1799	43	謡曲（1）往来物（1）漢学（15）書道（6）漢詩（4）制度（8）心学（1）地誌（6）絵画（1）
1800～1808	81	書画（1）心学（3）神祇（2）漢学（21）漢詩文（9）読本（26）教訓（2）歌文（9）狂歌（1）書道（1）茶道（2）漢詩（4）
1810～1819	105	系譜（20）漢詩文（2）書道（6）教訓（4）国学（1）漢学（30）読本（12）辞書（2）漢詩（5）伝記（12）辞書・節用集（1）狂歌（1）和歌・注釈（9）
1820～1829	79	紀行（1）漢詩文（13）漢詩（2）法制（10）農業（1）読本（22）漢学（1）通史（15）伝記（3）随筆（4）不明（7）
1831～1839	81	狂歌（1）地誌（17）通史（4）漢学（9）漢詩（6）和歌（1）往来物（2）紀行（1）書画（1）書目（5）伝記・絵画（20）名鑑（1）漢学・外国史（7）漢詩文（3）不明（3）
1840～1849	104	往来物（2）随筆（8）漢詩（7）漢詩文（21）伝記（7）辞書（1）通史（4）漢学（3）教訓（5）俳諧（1）地誌（7）合巻（24）兵法（6）事典（1）漢文集（5）不明（2）
1850 ～ 1859	192	往来物（5）漢詩（2）家伝（8）通史（9）漢学（86）実録（7）医学（6）有職故実（1）海防･砲術（5）読本（24）紀行（2）史論（2）漢詩文（4）教訓（6）見聞記（3）兵法（20）不明（2）
1860 ～ 1869	135	漢詩（22）漢学（50）和歌･漢詩文（1）戦記（1）地誌（9）語学（16）儒学（2）俳諧（1）書道・漢詩（1）伝記（7）文集（2）雑史（1）紀行（2）往来物（1）紀行・漢詩文（2）政治（5）実録（2）詩文集（2）不明（4）漢詩文（3）和歌（1）

刊行年	冊数	分類（冊数）
1870 ～ 1879	215	漢詩（20）農業（9）漢学（38）兵法（2）往来物（7）蚕業（1）物理（1）教育（1）通史（19）辞書（25）地誌（3）書道（7）実録（2）歴史（2）雑史（13）水産（2）漢学･外国史（7）書画（2）真言（1）思想（3）史論（5）政治（1）俳諧（1）随筆（3）漢詩文（8）不明（32）
1880 ～ 1889	209	俳諧（4）辞書（3）漢詩（16）随筆（3）漢学（40）和算（2）倫理（2）通史（52）漢文（4）漢詩文（4）狂詩･狂文（1）書道（2）政治（4）漢詩・辞書（2）歴史（4）通史・辞書（3）教育（7）外国史（2）伝記（14）地誌（1）雑史（2）往来物（2）不明（35）
1890 ～ 1899	139	狂歌（1）通史（18）小説（8）辞書（10）印譜（1）俳諧（1）往来物（2）歴史物語（3）年表（1）漢詩（6）囲碁（13）漢文（9）災異（2）貨幣（1）書道（7）教育（3）目録（1）注釈（1）外国史（2）和歌（1）絵画（4）地誌（3）漢学（1）伝記（4）教育・地誌（1）軍記物語・考証（4）国学（3）美術・工芸（1）法制（1）不明（26）
1901 ～ 1909	96	辞書（8）書画（3）絵画（4）教育（4）漢詩（17）軍記物語（6）俳諧（1）漢学（3）和歌（2）紀行（2）神社（1）書道（3）往来物（1）歌謡（4）礼法（4）花道（1）不明（32）
1910 ～ 1919	105	書目（2）教訓（2）書道（12）俳諧･絵画（2）茶道（6）辞書（3）花道（1）漢学（5）物語･注釈（2）書簡（7）漢詩（13）地誌（1）囲碁（2）伝記・書画（1）和歌（1）俳諧（1）絵画（8）年表・書画（1）臨済（2）漢詩･絵画（1）教育（1）年代記（1）漢詩文（7）読本（12）伝記（1）不明（10）
1920 ～ 1929	52	俳諧（1）書道（2）辞書（1）楽器（1）和歌（2）仏教（1）家事（1）紀行（3）漢学（8）教訓（1）書目（1）金石文（4）占ト（1）伝記（1）教育（7）印譜（1）漢詩・和歌（1）不明（15）
1930 ～ 1937	26	茶道（2）漢詩（2）漢学（3）随筆（5）囲碁（12）通史･史略（1）紀行（1）
1943	1	不明（1）
不明	328	俳諧（10）往来物（4）漢詩・和歌（1）和歌（1）政治（13）書目（1）書画（1）随筆（2）名鑑･武鑑（1）日記（1）書道（7）漢文（3）教育（2）茶道（4）教訓（7）漢学（41）占ト（1）漢詩（8）辞書（13）漢文集（4）兵法（5）花道（1）滑稽本（2）歌学（3）戦記（5）物語（2）歴史物語（20）語学（1）楽器（2）通史（24）人情本（2）小説（1）医学（12）実録（64）紀行（2）伝記（20）漢詩･辞書（10）目録（1）絵画（2）漢詩文（5）不明（19）

一二一冊（以下略）となっていた。蔵書の最も多い時期である一八七〇～一八八九年にかけては、傳治の四歳～二三歳にあたる。

傳治の生存中に刊行された蔵書の内、一九二〇年以降の蔵書は目に見えて数が減っていくが、これは戦争などの社会情勢の変化のた

めに、容易に本を手にする事ができなくなったためと考えられる。特に一九三九年に始まり、一九四五年まで続いたアジア・太平洋戦争が出版界に与えた影響[10]は大きかっただろう。加えて活版印刷の盛行と共に、和本の形で刊行される書物の数が年々減っていったことも、蔵書の減少に影響していると思われる。傳治蔵書では和本の装訂の本のみを調査対象としており、明治以降現代に近付くにつれて本の数が減っていく事は、出版全体の流れに沿っているといえる[11]。

反対に年代を過去へ遡るにつれても、蔵書の数は少なくなっていく。最も古い一五〇〇年代の蔵書は五冊存在し、一七〇〇年代まで蔵書の数は少ない。「古版本」「古写本」と呼べそうなものは十八冊存在し、内七冊は写本である。なお、ここで「古版本」「古写本」ではないかと考えるのは、平成二三年蔵書目録における「本番号」527、1234～1239、1664～1669、2025～2029の本である。

一見すると、古い年代の書物の収集も行っていたが、それだけにこだわった収集ではなかったようだ。蔵書の刊行年のピークは江戸期の嘉永の頃（一八五〇年代）から明治期の前半（一八九〇年代）にかけてにみられ、江戸期の本の収集を幅広い年代から行ってはいるが、特に「古写本」「古版本」に注力していた傾向は見られない。「古写本」や「古版本」への関心はあったが、余り沢山は集められなかったのかもしれない。あるいは書籍収集を行う際、貴重書の収集はさほど大きなウェイトを占めていなかったとも考えられる。江戸期の本を多く集めていたことから、和本の形で入手可能なテキストに興味関心を持っていた事は確かだろう。

さらに、特定の分野のみ、古い年代の書物を収集するようなことは無かったかと考え、「漢学」、「通史」などの分類ごとに蔵書の刊行年の調査を行っていった結果も、同様だった。どの分類の本も幅広い刊行年のものが集められ、年代の新旧へのこだわりはうかがえない。

以上から、傳治は鑑賞のためにコレクションを形成したのではなく、学びのために必要と思える本を集めていったのではないかと考えられる。収集された本の刊行年のピークと「古写本」「古版本」の定義を比較すると、傳治が特に希少なものに焦点を絞り収集していた様子は見られない。

上記の推論を裏付けるために、本の扱いについても調べた。年代の古い蔵書と他の蔵書の間に扱いの違いは無かったかと考え、各棚に納められた本の年代、冊数をカウントしていった。調査結果を見たところ、古い本を多く集めた棚が存在するなど、古い年代の本を特別扱いするような傾向は見られない。また、蔵内での蔵書調査では、全ての蔵書が同じような状況で収納されていた事を確認している。傳治が刊行年以外の面で蔵書に価値を見出していたとしても、少なくとも今回の調査対象に扱いの違いは見られなかった。ただし傳治蔵書に後に誰かの手が入り、保管状況が大きく変わった可能性は全く否定されるものではない。

稀覯本については、傳治蔵書の中から見付ける事はできなかった。稀覯本については、その本が日本古典籍総合目録に記載されているか否かで判断した。明治期以降の本は日本古典籍総合目録に記載されていないことが多いため、「×」の表記を書き込んだものが多いが、江戸期の本では写本を除くほぼ全ての本が日本古典籍総合目録に記載されていた。傳治が収集している本は、大半が複数の収蔵機関に収蔵されているものであり、現存する数が多いようだ。古書販売店の価格などを見ても、稀覯本とはいいにくい。

上記の結果から、傳治蔵書の性格を以下のようにまとめたい。

傳治は年代の古い本の収集等も行っていたが、特に年代の古い本や稀覯本ばかり集めていた訳ではない。収集した蔵書をコレクションとして秘蔵・鑑賞するのではなく、実際に学びのための道具として用いていた。傳治の収集していた蔵書には学問に関わるものが多い。傳治は自分の知識や教養を深めるために必要である、という点にウェ

イトをおいた書籍蒐集を行ったのではないだろうか。

また、傳治の関心という面から蔵書をみると、「漢学」が非常に大きな位置を占めていることが分かる。傳治が特に漢学に関わって何らかの活動を行っていたという話は伝わっておらず、そうした資料も見つかっていない。そのため、漢学を教養として学ぶ文化が明治期にも息づいており、傳治もその流れに即した蔵書の収集を行ったのではないかと考えた。傳治の興味関心と収集された蔵書の内容については、後に分析する明治二五年蔵書目録との比較からさらに考察する。

第四節　明治二五年蔵書目録の考察

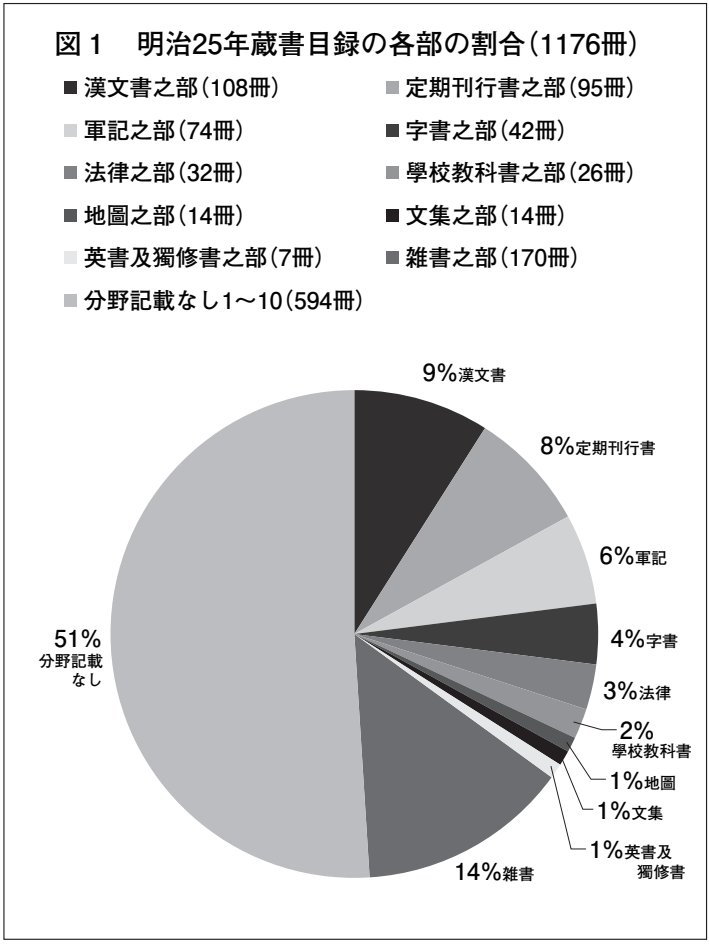
明治二五年蔵書目録に記載されている本の冊数は合計一一七六冊。内和本が七二九冊、洋本が四一二冊、折本が三冊、折が四冊、不明が二八冊となっている。明治二五年蔵書目録に記載されている本の内、現在の傳治蔵書にまで伝存が確認できる本は三四五冊存在する。明治二五年蔵書目録を分析し、平成二三年蔵書目録との比較を行うことから、傳治蔵書の考察をより深めたい。

明治二五年蔵書目録では、途中まで「法律之部」「漢文書之部」といったように部名が振られ、部ごとに分類が行われている。明治二五年蔵書目録全体で見た場合の各部の割合は、図1のようになっている。図1とそれぞれの部の調査から、傳治の明治二五年（一八九二）～明治三三年（一九〇〇）の時点での興味関心を探っていく。

傳治は明治二五年蔵書目録に部名を付けているが、この部名からは傳治が蔵書をそれぞれどのように捉えていたかが読み取れる。部名の書かれた蔵書の内最も冊数が多いのは「雑書之部」で一七〇冊。次に冊数が多いのは「漢文書之部」一〇八冊。その次が「定期刊行書之部」九五冊。以下「軍記之部」七四冊、「字書之部」四二冊、「法律

之部」三二冊、「學校教科書之部」二六冊、「地圖之部」十四冊、「文集之部」十四冊、「英書及獨修書之部」七冊と続く。「雑書之部」は他の部にまとめきれない本がまとめられた、「その他の本」のような項目であるため、次の「漢文書之部」からがより本が選別され、まとめられた部と考えられる。

「漢文書之部」は、「漢学」の分類の本が全体の七六パーセントを占める部だ。漢学関連の書物をまとめた項目であり、この部は明治二五年蔵書目録全体の九パーセントを占める。これは「雑書之部」十四パーセントに次ぐ割合の大きさである。よって、傳治は明治二五年（一八九二）～明治三三年（一九〇〇）の時



点ですでに、漢学に対し他の分野よりも強い関心を持っていたと考えられる。

次に大きな割合を占めるのが「定期刊行書之部」だ。「定期刊行書之部」の本はほとんどが洋本であり、更に雑誌類[12]が多い。雑誌の内容は法律関係の物、商業や経済に関わるもの、俳諧の雑誌、戦争関係の物、汽車と旅行の雑誌、小説や文藝関係の物などさまざまである。傳治は定期刊行される雑誌を通して、商業や経済などの知識や、日々の娯楽を得ていたことがうかがえる。蔵からは傳治が生きていた時代の新聞が発見されることがある。傳治は新聞と雑誌の双方を購読しており、こうした媒体から各種情報の収集に努めていたとみられる。

また、集められた定期刊行書の中には『東京商況月報』『東京経済雑誌』『法治協會雑誌』『法學協會雑誌』などが存在し、傳治が中央の動向に関心をもっていたことがうかがえる。経済や法制度などの情報収集に積極的であり、社会の動向をつかもうとしていた背景には、急激に進展する明治期の近代化の流れと、その流れの中で「家」を維持せねばならない家長としての立場が影響していたのではないだろうか。「定期刊行書之部」からは、明治期、地方の商人が中央の動向に注意を向け、最新の情報を得ようと努め、そのための媒体として、雑誌が活用されていたことが読み取れる。近代の地方の人々の中央への意識を考える上で、興味深い事例といえよう。

この「定期刊行書之部」が見せる地方の中央への関心と、よく似た傾向を持つ蔵書が橘川俊忠「在村書籍調査の方法と課題2―上時国家所蔵書籍調査報告（近代）―」で紹介されている。この論文で調査の対象となっているのは、奥能登の上時国家の所蔵書籍だ。上時国家の蔵書の内容には傳治蔵書と似通った点が多々見られる。その点の一つとして挙げられるのが、明治期に入ってからの法律書の収集、中央で発行される新聞・雑誌の定期購読である。橘川氏は近代の上時国家の書籍収集の傾向に注目し、上時国家が中央の動向にかなり敏感に反応しており、多量の法律書の蓄積は、上時国家が、急速に進行する明治期日本社会の近代化に対して、一つの家としての存在を維持し

続けるために払った努力の蓄積とみるべきではないかと述べている。中央の動向への関心の高さは、時代状況への関心の高さであり、「家」の存続のための努力の現れでもあった（橘川一九九〇）。橘川氏はこのように上時国家の書籍収集を分析しており、同様の傾向が傳治の書籍収集にも見てとれる。

奥能登と香川県という離れた地域にありながら、よく似た傾向を示す蔵書を両家が形成していた点は興味深い。明治期、地方の豪農や商人が中央へ向ける関心のあり方には、共通する部分があったのかもしれない。

「字書之部」は全体の四パーセントを占める。「字書」という語が部名に付けられている事からも分かるように、集められていた本の内には漢文を読むための字書が多くみられる。平成二三年蔵書目録において傳治は学びのために蔵書を収集していたと推測したが、明治二五年（一八九二）の段階でも同様の目的で漢学関係の書物、字書などが収集されていたのではないかと考える。傳治は二六歳の時点ですでに、漢学などの学問に興味を持ち、蔵書の収集による学習を行っていたのではないだろうか。

「法律之部」は全体の三パーセントを占めている。集められた書物は、刑法に関わるものや、市町村制に関わるもの、商法、民法、布告、憲法関連のものなどである。明治政府は人々の前に圧倒的な印刷文字として現れたと、紅野謙介『書物の近代』は指摘している。明治政府は、印刷された文字の形で「国家」としてのあり方を人々へと広めていった（紅野一九九九）。明治期に生きた傳治にとって、大きく変化していく明治政府の諸制度を学ぶことは必要不可欠だっただろう。傳治蔵書に見られる「法律之部」の本の存在は、こうした明治の時代背景を表しているとも考えられる。また、「定期刊行書之部」で考察したような点からも、「法律之部」は形成されたのではないだろうか。

「英書及獨修書之部」は全体の一パーセントを占める。『英三躰伊呂波』『増補英語階梯』『スペルリング』などが

記載されており、英語の辞書やテキストがあつめられている。明治期は広く海外からの知識や技術、文化が流入した時代だ。傳治もまた英語の入門書や辞書を読む必要に迫られ、こうした書物を収集していたと見られる。「字書之部」と共に「英書及獨修書之部」が部名として存在している点に、旧来の学問である漢学と、新たに広まる西洋の学問、文化や知識とが共存している様子をみることができる。明治二五年の傳治は、新旧の文化や学問の入り混じる中で生きており、書籍の収集を行っていたことがうかがえる。

なお、上記の部以外に明治二五年蔵書目録には「軍記之部」、「學校教科書之部」、「地圖之部」、「文集之部」が存在する。「軍記之部」は『関原記大成』『真顯太閤記』などが集められた部であり、「學校教科書之部」は教科書類を集めた部だ。「地圖之部」では、日本地図、世界地図の他に、香川、東京、大阪、横須賀、清国、日清韓三国などの地図が集められている。「文集之部」では、漢学、書道などの分野の文集が集められていた。

ここまで部名が振られた各部を見てきたが、部名が振られていない部分はどのような構成になっているのだろうか。「分野記載なし1～10」とした部分を調査すると、様々な内容の本が混在していることが分かった。冊数は全五九四冊。日本古典籍総合目録での分類を調べると、「通史」の分類が五六冊、「地誌」四三冊、「読本」三五冊、「漢学」十八冊、「教訓」十七冊、「実録」十五冊、「往来物」八冊、「金工」七冊、「占卜」五冊、「茶道」五冊、「漢詩」五冊、「暦」三冊、「伝記」三冊、「見聞記」三冊、「俳諧」三冊、「歌集」二冊、「狂歌」二冊、「歴史物語」二冊、「浄瑠璃」一冊、「兵法」一冊、「演劇」一冊、「絵画」一冊、「外国地誌」一冊、「教育」一冊、「謡曲」一冊、「書簡」一冊、「合巻」一冊、「天台」一冊、「名鑑武鑑」一冊、「和歌・注釈」一冊、「記載なし」三〇二冊、「不明」四六冊となっている。ちなみに、「記載なし」の分類には、『家庭の新風味』『家庭衛生叢書』『怪談稲生武勇傳』『西洋各國　現今政治事情』などの多様な内容の本が存在する。こうして見ると、部名による分類は、目録が作成された最初の頃にのみ行われ

ていたのではないかと推測される。

第五節　平成二三年蔵書目録と明治二五年蔵書目録の比較

ここからは、平成二三年蔵書目録と明治二五年蔵書目録を比較することで、二つの目録にどのような分類の本が何冊みられるのか、また傳治の二〇～三〇代とその後の蔵書ではどういった変化が見られるのかを調べ、傳治の興味関心の変遷を探っていく。

明治二五年蔵書目録と平成二三年蔵書目録において、どの分類の本が何冊あるのかを調べ、双方の目録を比較して、各々の分類に何冊の増減があったかをまとめた表3をもとに考察を進める。

なお、平成二三年蔵書目録では和本のみを調査している。一方明治二五年蔵書目録には和本、洋本が入り混じって書き込まれており、双方の目録の比較から傳治の関心を追っていく上で、洋本の形で多く集められていった分野について欠落ができてしまう。「定期刊行書之部」「文集之部」「法律之部」「雑書之部」などの部は洋本の含まれる割合が大きく、洋本も含めた分析をいずれ行う必要がある。

（一）「漢学」の分類

まず表3をみると、二つの目録とも最も冊数の多い分類は「漢学」である。これは明治二五年（一八九二）の段階で漢学に興味を持っていた傳治が、その後も変わらず漢学に関心を持ち続けた事を表している。漢学の分類は明治二五年蔵書目録では全体の九パーセントを占め、平成二三年蔵書目録では十九パーセントを占めている。

内容については、明治二五年蔵書目録では四書五経などの、基礎的な書物が揃えられている。『孝經餘師』、『經典餘師』の名もみられる。『経典余師』（『經典餘師』）とは渓百年という浪人儒者の編んだ経書の注釈書だ。平仮名

表３　明治二五年蔵書目録と平成二三年蔵書目録の比較

分類	M25 目録冊数	H23 目録冊数	増減 H23－M25	分類	M25 目録冊数	H23 目録冊数	増減 H23－M25
漢学	106	463	357	礼法	0	4	4
不明	651	209	-442	軍記物語・考証	0	4	4
通史	62	145	83	天文	0	4	4
漢詩	12	142	130	楽器	0	3	3
辞書	14	120	106	花道	0	3	3
漢詩文	4	109	105	暦	4	3	-1
読本	37	96	59	書誌	0	3	3
実録	27	75	48	真言	0	3	3
伝記	3	74	71	通史・辞書	0	3	3
戦記	55	57	2	謡曲	1	3	2
書道	3	56	53	歌学	1	3	2
地誌	47	47	0	見聞記	3	3	0
兵法	1	44	43	思想	0	3	3
教訓	19	40	21	印譜	0	2	2
政治	0	35	35	漢詩・和歌	0	2	2
随筆	0	31	31	災異	0	2	2
教育	9	30	21	詩文集	0	2	2
往来物	10	28	18	儒学	0	2	2
囲碁	0	27	27	書道・漢詩	6	2	-4
合巻	1	24	23	書道・辞書	2	2	0
茶道	15	23	8	水産	0	2	2
歴史物語	2	23	21	俳諧・絵画	0	2	2
俳諧	4	21	17	目録	0	2	2
伝記・絵画	0	20	20	和歌・漢詩文	0	1	1
系譜	0	20	20	戯文	0	1	1
絵画	3	19	16	狂詩・狂文	1	1	0
医学	0	18	18	事典	1	1	0
海防・砲術	0	5	5	伝記・兵法	0	1	1
外国史	4	4	0	物理	0	1	1
歌謡	0	4	4	有職故実	0	1	1
狂歌	3	4	1	金工	7	0	-7
金石文	0	4	4	海防	5	0	-5

分類	M25 目録冊数	H23 目録冊数	増減 H23－M25	分類	M25 目録冊数	H23 目録冊数	増減 H23－M25
外国語	4	0	-4	滑稽本	0	2	2
語学	1	18	17	紀行・漢詩文	0	2	2
漢文	0	17	17	神祇	0	2	2
雑史	0	16	16	人情本	0	2	2
紀行	0	15	15	占卜	5	2	-3
漢学・外国史	0	14	14	文集	0	2	2
辞書・節用集	15	14	-1	蚕業	0	1	1
漢詩・辞書	0	12	12	家事	0	1	1
法制	0	11	11	貨幣	0	1	1
農業	0	10	10	漢詩・絵画	0	1	1
漢文集	0	9	9	教育・地誌	0	1	1
小説	0	9	9	神社	0	1	1
書目	0	9	9	注釈	11	1	-10
和歌	0	9	9	通史・史論	0	1	1
歌文	0	9	9	伝記・書画	0	1	1
和歌・注釈	1	9	8	日記	0	1	1
書画	0	8	8	年代記	0	1	1
家伝	0	8	8	年表	0	1	1
漢詩・注釈	0	8	8	年表・書画	0	1	1
書簡	1	8	7	美術・工芸	0	1	1
制度	0	8	8	仏教	0	1	1
心学	0	7	7	名鑑	0	1	1
史論	0	7	7	名鑑・武鑑	1	1	0
歴史	4	6	2	歌集	2	0	-2
軍記物語	0	6	6	漢籍	1	0	-1
国学	0	5	5	経済	1	0	-1
臨済	0	5	5	浄瑠璃	1	0	-1
海防・政治	0	5	5	天台	1	0	-1
物語	0	2	2	和算・塵劫記	1	0	-1
物語・注釈	0	2	2	演劇	1	0	-1
倫理	0	2	2	外国地誌	1	0	-1
和算	0	2	2	便覧	1	0	-1
仮名草子	0	2	2				

まじりで注釈と書き下し文を示したもので、独学で素読を会得し、学問の道に分け入ることができるように仕立てられている（鈴木二〇〇七）。おそらく傳治は「余師本」を用いた儒学を独習したのだろう。

他に朱熹による『四書集註』『孟子集註』『中庸章句』なども見られ、江戸期に一般的に広まっていた朱子学の影響を受けた儒学の学習を行っていたことが分かる（岸田二〇一〇）。『四書集註』は朱子学の最も根本的な経典上のよりどころであり、朱子学の規範的なテキストであって、初学者がまず読むべき書物として特別な地位を占めていたとされる（宇野田一九九六）。近世日本儒学における最大学派となっていた朱子学（王一九八八）から儒教を学んでいく事は、ごく自然な流れであり、傳治はまず朱子学の基本書である『四書集註』を学ぶことから、儒学の基本知識を身につけようとしていたのではないだろうか。

明治二五年蔵書目録の段階では、漢学の分類の本は最も大きな割合をなすが、集められている本は儒学の基礎をなすものがほとんどだった。儒学の入門書、基本的な書物の収集が行われ、儒学の初学者の蔵書という傾向が強い。

その後、平成二三年蔵書目録では明治二五年蔵書目録から三五七冊冊数を増やし、合計四六三冊の「漢学」の本が傳治蔵書に存在している。この蔵書の増加数は、他の分類の本と比べ目立って多い。他の分類では「漢詩」、「辞書」、「漢詩文」などが明治二五年蔵書目録以降百冊ほど冊数を増やしているが、「漢学」の分類の本の増加数はその約三倍にあたる。「漢学」の分類の本の内、刊行年が最も新しいのは一九三〇年のものだ。この年傳治は六四歳になっている。明治二五年蔵書目録と照らし合わせると、傳治が人生のほぼ全般にわたって、漢学の書籍収集を行っていたことが分かる。

では、平成二三年蔵書目録ではどのような「漢学」の分類の本が増えたのかを見ていく。

まず、四書五経全般が揃えられている。経書が多数集められ、同じ五経であっても『校正訓点　詩経』の一群と、

『改正音訓　詩経　再刻　後藤點』、『文化新刻　詩経　字引附』の一群が存在し、四書でも『新版大字　孟子』『新刻改正　孟子　後藤點』が見られるなど、複数の四書五経が収集されている。実際に読んでいく中で必要な訓点、注の入ったものを集めていったのだろう。

他に『十八史略』、『蒙求』などの漢文や歴史、故事の入門書、『文章軌範独学』『纂評唐宋八大家文読本』といった漢文、漢詩の名作集もみられる（新村一九八三）。

平成二三年蔵書目録をみると、特に増えたのは注釈書だ。『春秋左氏傳』、『論語逢原』、『正文章軌範評林註釈』、『文章軌範纂評』、『小学句讀』、『箋注蒙求』、『増補孝経彙註』など多数の注釈本が存在し、傳治が経書や儒学・漢文・漢詩などの理解をより深めようとしていたことが分かる。『経典余師』を含む余師本の冊数も増えている。特定の学問分野を特に専門的に学んだのではなく、儒学、漢文学の入門書や基本書を一通り学んでいたようだ。

また、朱熹関連のものでは『明治訓点　四書集註　論語』『論語集註　再刻』『孟子集註　再刻』『大学章句　再刻』『新刻改正　中庸　再刻後藤點』などが集められている。『四書集註』の疏釈書（経典の注釈書）の和刻本である『四書大全』の名も見られ、傳治が朱子学の基本書の学習をより深めていたことが分かる（宇野田一九九六）。

さらに、陽明学の入門書である『精校斷句　王陽明傳習録』、『標註　傳習録』、『古本大学』『四言教講義』などの存在から、陽明学への関心を有していたことも分かった。

陽明学もまた、朱子学と同じく儒教の学派である。日本の陽明学は少数の知識人によって信奉されたことはあるが、江戸期を通じて、社会的に持続してその思想的影響を及ぼす事がほとんどなく、連続性のある学派を形成したこともなかったとされる。民衆に対する影響も中国のように大きいものではなく、終始在野の地位にある学派であった（王一九九八）。しかし陽明学は、幕末の改革運動に大きな影響を与えた。多くの志士が陽明学に影響され、「大

塩の乱」を起こした陽明学者大塩中斎（平八郎）、松下村塾の塾頭吉田松陰もまた、陽明学的教養を身に付けた一人だった（王一九九八）。

傳治は陽明学の書物収集を通じて、吉田松陰、大塩中斎の著作を多数収集している。幕末から明治維新という変革期に生じた思想に、傳治が強い影響を受けていた可能性は大きい。ただし明治二五年蔵書目録には陽明学関係の書物の記述がなく、吉田松陰、大塩中斎の著作も見受けられない。そのため、吉田松陰や陽明学への関心は、傳治が三四歳の時以降のどこかで生じたものと考えられる。他に、尊王思想に影響を受けていたことを表す文献として、『靖献遺言』、『日本外史』、『下学邇言』、『新論』[13]の存在が挙げられる。

漢学に対して、国学関連の書物は驚くほど少ない。「国学」の分類は、本居宣長、本居太平、岡吉胤の著作が計五冊みられるのみである。[14]

（二）「通史」、「漢詩」、教養と娯楽関係の分類

明治二五年・平成二三年蔵書目録で「漢学」の次に冊数の多い分類は「通史」だ。「通史」の分類は八三冊増加している。明治二五年蔵書目録の段階では「通史」に関する特定の著者へのこだわりはみられなかったが、平成二三年蔵書目録では頼山陽の著作を多く集めていることがわかる。『増補日本政記　再刻』、『日本外史』、『増補日本政記　再刻』などが集められ、『日本外史』、『日本政記』は同じタイトルの刊行年の異なるものが複数存在する。頼山陽関連の文献では他にも『頼復校訂　通儀』、『標註　山陽詩鈔』、『頼山陽先生手簡』、『詩文眞蹟』などが集められ、特に強い関心を抱いていたようだ。

頼山陽の著作については、伊藤博文の「廃藩置県の決定」（『伊藤公直話』）という回顧談に、『日本政記』の制度観に従って政治行動を決定した、という意味の言葉がある。他の維新の志士にも同様の発言が見られ、『日本外史』

や『日本政記』の「語り」は彼らの政治行動の指針となっていたとされる（苅部・片岡二〇〇八）。頼山陽への関心も、その思想への関心の現れではないかと考えられる。また、伊藤博文の伝記にあるように、明治期の指導者が頼山陽の「語り」に影響を受けていたということも、傳治が頼山陽に関心を抱いたことと関係している可能性がある。明治期の指導者たちが関心をもつ人物であったからこそ、傳治もまた頼山陽に注目したのかもしれない。頼山陽の他に、青山延于、大槻東陽、岩垣杉苗らの著作がみられる。

「漢詩」の分類は、明治二五年蔵書目録では冊数が十二冊とあまり多くなかったが、平成二三年蔵書目録では一四二冊になり、冊数が一三〇冊増加するという「漢学」の分類に次ぐ増加量を見せている。集められた本の内、『新撰詩学活法』、『詩語対句自在』、『詩語砕金』などは漢詩実作に用いられたと思われ、傳治が自ら漢詩を作っていたことをうかがわせる。詩集も多数購入しており、傳治が三四歳以降漢詩への興味を強めていったことが分かる。

「読本」「戦記」「歴史物語」「小説」「軍記物語」「物語」「仮名草子」「滑稽本」「人情本」などの読み物では、「読本」の分類が最も冊数が多い。明治二五年蔵書目録で書き込まれていたものに、さらに五九冊買い足したようだ。反対に「戦記」の分類は明治二五年蔵書目録からほとんど変化がない。「戦記」以外の上記の分類は、明治二五年蔵書目録以降買い足されたものがほとんどのようだが、系統だった収集は行われていない。

他の教養・娯楽関係の書物としては、「和歌」「俳諧」「囲碁」「書道」「茶道」「花道」「狂歌」などを集めていたようだ。その内「茶道」を除くほとんどの分類が、平成二三年蔵書目録では冊数を増やしている。教養・娯楽・趣味の幅は傳治の年齢が上がる程に広がっていったようだ。ただし、これらの分野を深く追求した様子はみられない。

（三）　傳治の職業に関わる分類

傳治の職業と関わる分類はどうだろうか。傳治は地方の商人であり地主だった。傳治の職業に関わると思われる

分類は、「法制」「農業」「政治」「蚕業」「水産」だ。

「政治」の分類の本は明治二五年蔵書目録には存在しなかった。平成二三年蔵書目録には頼山陽、中井竹山、会沢正志斎らの著作が集められ、現行の政治というよりは儒学と思想にまつわる構成となっている。傳治の生きている時代に行われた政治に関わる書物については、主に洋本の形で集められたのだろう。「法制」の分類についても同じことがいえる。

「農業」「蚕業」「水産」の分類については、十三冊と冊数は少ないが『樹葉抜草　養蚕手引草』『漁村維持法』『農家備要』のような文献が集められている。平成二三年蔵書目録に記載された文献からは、傳治が地域の産業に関心を持っていることが読み取れる。

傳治の職業に関わる文献は、平成二三年蔵書目録ではほとんど見付ける事ができない。しかし明治二五年蔵書目録をみると「定期刊行書之部」に表れているように、傳治が職業関連の情報収集に無関心だったわけでは決してない。むしろ意欲的に知識を求めており、その後もこの姿勢が崩れたとは考えにくい。おそらく多くの最新の知識に関わる文献は、明治以降新たに刊行される洋本の装訂の形をとっていたのだろう。そのために平成二三年蔵書目録には記載されていないのだと考えられる。

（四）　二つの目録比較の総括

平成二三年蔵書目録と明治二五年蔵書目録の比較からは、傳治が趣味と教養のために本を収集していたことが浮かび上がってきた。蔵書の刊行年の調査、蔵書の扱いの調査、稀覯本の有無などの調査と照らし合わせると、やはり傳治蔵書は、学びのために収集された蔵書と見て間違いないようだ。

また、傳治は儒学などの教養・趣味の蔵書を収集しつつ、新たな知識の収集にも意欲的であったことが明治二五

年蔵書目録の「定期刊行書之部」よりうかがえる。傳治が教養や思想に関わる文献では江戸時代からの和本の古書を多く入手しており、最新の知識に関しては近代の書籍を多く購入していたと考えられる点は興味深い。ここには、江戸期より続く思想や観念の下に生きながら、新進の知識を積極的に取り入れ近代化の波に順応しようとする、近代地方商人の姿が表れているのではないだろうか。

第四章　傳治蔵書とは何か

第一節　漢学的教養・風雅文化の受容と傳治蔵書

傳治蔵書は教養と趣味のための蔵書だ。傳治は儒学を学び、通史を収集し、読本や戦記を楽しみ、漢詩を読み、囲碁や茶道、俳諧を嗜んでいた。この傳治蔵書とよく似た傾向を示す蔵書が、奥能登の時国家の近世末期の蔵書である。

橘川俊忠「在村残存書籍調査の方法と課題―時国家所蔵書籍調査報告1（近世編）―」は、時国家の蔵書を「儒学の素養を身につけ、漢詩を読み、謡曲をたしなみ、軍記物を好み、囲碁を楽しむ」蔵書であると形容した（橘川一九八九）。

さらに、橘川俊忠「地方文人・名望家の教養―相州津久井縣上川尻村八木家の蔵書をめぐって―」では、相州津久井縣上川尻村の富農、八木家の蔵書が紹介されているが、ここにも儒教・漢詩文を中心とした漢学的教養を共通の基礎とし、文芸への関心や政治への関心が、歴代当主の個性と時代状況に応じてその比重を変化させてきたという特色が表れている。なお、八木家の家業は近世後期までは農業を中心とし、近代に入ってから米穀・荒物商、醤

油醸造業などの商売の比重を高めていったのだとされる（橘川一九九三）。

こうした近世地方の村落社会での上層にあったと思われる人々の蔵書を見ていくと、傳治蔵書との共通点が多い。なぜ地方の商人・村落上層の人々が似たような蔵書をつくり得たのだろうか。漢学的教養[15]の受容と風雅の文化[16]が、近世の社会においてどのように受容されていたのかを調べることで、八木家・時国家・傳治蔵書を考えていきたい（橘川一九九三・杉二〇〇一）。

（一）　近世における漢学的教養・風雅文化の浸透

近世には都市部のみならず農村にも文字文化が広く浸透していく（片桐・木村二〇〇八）。また、書物という媒体が登場したことで、民衆にとっての知と情報のあり方は根本的な転換を迎えた。知と情報は大量化し、均質化して、身分や階層、地域といった境界を越えていった（横田二〇〇七）。

こうした状況の中で、漢学的教養や風雅の文化の受容が全国の農山漁村レベルにまで広がる。杉仁『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流―』は、農山漁村で営まれるこれらの文化を「在村文化」と規定し、その主な担い手は村落上層の村役人～豪農商層の人々であると述べている（杉二〇〇一）。

「在村文化」では、俳諧をはじめ書・画・生花・茶道がもっとも一般的に営まれ、文化下層（担い手のなかの下層）が形成されて多数に広まる。その上に人数は少ないが文化中層の狂歌・俳諧宗匠が存在し、さらに少ない人数の文化上層に、和歌・国学または漢詩・漢学を中心に戯作・医学・薬学などが存在する。ここに「生産文化」と呼ぶべき、農山漁村の日々の生業に関わる知識や文化が加わって、「在村文化」を形作っていた（杉二〇〇一）。

「在村文化」で営まれた文化活動は、「生産文化」を除けば都市文化・町人文化を取り入れたものがほとんどであり、根本的な内容は変わらないとされる（杉二〇〇一）。では都市文化・町人文化はどのようなものであったのだろうか。

近世の都市は本質的に武家の御用都市であり、町人は御用町人[17]、都市文化は本質的には御用町人文化だったと杉氏は述べる。最も普及した俳諧は「つどいの芸術」であり、日常の交際と一体化しやすかったため、武家と町人の御用の円滑な授受を保つための交際に役立てられた。御用町人にとっての最大の価値は、御用の永続と後継者の承認におかれる。後継者の御用が円満に承認されれば、後は隠居の立場で文化に専念できた。それによって中央文人・地方文人として文化に専念した町人たちは、広く近代文化の質の高さを支える存在となっていた（杉二〇〇一）。成功した町人たちの中には、文芸や芸能の稽古に励み、独自の町人文化を創出したり、学問にはげみ学者となる者が現れている。中央のみならず、地方においても文雅に生きた町人の事例は数え切れない（三好一九八七）。

都市文化・町人文化は、全国に点在する城下町の武家・御用町人が中心となっていたが、在村文化は村落上層の人々によって主に営まれ、あらゆる地域の農山漁村一帯に面状に広がるという特徴を持っていた。村役人～豪農商層は、豪農的地域経済圏・文化圏を形成するなかで在村文化を営み、流通路を通して遠くの地域とも強く結ばれていた（杉二〇〇一）。近世日本社会において漢学的教養・風雅文化は、面状の広がりと人々の階層を貫く深みを持ち、展開していたのである。

地方においてこうした文化を受容する上で、モデルとなり、中央の最先端の文化との接点となっていたのが、諸藩の儒官・藩士たちのもつ武家の教養と文化である。諸藩の藩校には多くが儒学、主に朱子学を教授する学問所が設置され、儒学を教える儒官は儒学者同士のネットワークを持ち、参勤交代による江戸との往来もあったため、開かれた教育文化の環境下にあった。この藩校の存在が、地域教育に大きな影響を与えることになる。地方に学者が来住した事は民間好学の人々を大いに刺激し、多くの儒官は家塾を設けこれに応えている（高橋二〇〇七）。また、江戸詰で中央の文化を垣間見た藩士の趣味教養が、城下町から周辺に与えた影響も大きい。中央で振興する最先端

の風雅文化は、城下町から周辺へと伝わり、地域文化の交流の要となっていた（高橋二〇〇七）。

そして、漢学的教養や風雅の文化の広まり、出版文化の盛行とともに、庶民層の中にも蔵書を形成する家が現れる。村落社会における書物と学問・教養の関わりを調べたものに、横田冬彦氏の研究がある。横田氏は村落上層が、村落社会において知的名望を得るために、実用的知識にとどまらない知を蓄積するため、〈蔵書の家〉を形成したことを明らかにした（横田一九九八）。また、工藤航平「近世地域社会における蔵書とは何か」では、近世後期以降に地域の指導者層的立場にあった有力農民の蔵書の分析が行われ、地域指導者層の資質形成の基盤として蔵書が形成され、活用されていたことが明らかにされている（工藤二〇一一）。

これらの研究から、近世の人々が学びのため、地域指導者層の資質形成のため、蔵書を形成し、活発な知的活動を行っていたこと、また、蔵書を形成する家は、少なくとも地方の村落上層の人々にまで広がっていたことなどがうかがえる。

そして、横田冬彦「日本近世上層町人における〈家〉の教育」では、摂津国の酒造家・惣宿老である八尾家の、近世における〈家の教育〉の分析が行われている。八尾家においてもまた、家産として蔵書が形成されていた。

八尾家の〈家の教育〉からは、鼓や謡、仕舞、俳諧、茶道などの芸能・文化の教育が、上層町人の社交関係を築くために必要とされていたことが分かる。また、芸能・文化の教育は一般町人層との〈差異化〉を示すものだが、それはそのまま家業から逸脱し〈文人〉化や放蕩化して、家を潰すに至る危険をはらむものだった。ゆえに〈家〉を維持するための〈通俗道徳〉を身体化させるため、儒教的道徳を内面的規範として、家業の担い手としての訓練が進められたのだとされる（横田二〇一〇）。

八尾家の〈家の教育〉を近世〈上層町人の家〉として特徴づけているものの一つは、道徳教育を兼ね、漢学的教

養なども含む学習を行う〈文字教育〉の過程であり、蔵書はもとより講談や俳諧の会など、豊かな知的文化的環境という〈文化資本〉[18]であると横田氏は述べる。それらが算用状や帳簿計算といった家業経営や、行政文書を必要とする惣宿老の職務を再生産する基礎となっていた（横田二〇一〇）。

八尾家の事例からは、漢学的教養・風雅文化が地方近代商人にとってどのような意味を持ち、受容されていたのかを垣間見ることができる。また、八尾家における蔵書は、豊かな知的文化的環境＝〈文化資本〉の一端であった。〈家〉を受け継ぐ上で必要な知識、教養を身につけ、家と身分の再生産を行うための、豊かな知的文化的環境を整える一端を担うという目的を有する八尾家の蔵書。漢学的教養と風雅の文化が全国的に展開しており、八木家・時国家・傳治蔵書の内容に共通点が多々見られる事を鑑みると、いずれの家でも八尾家と同じような目的で、蔵書が必要とされる一面があったのかもしれない。八尾家の事例は、近世・近代の地域社会の蔵書が形成された理由を考える上で、一つの視点を示しているように感じられる。

近世にこうした文化的基盤が存在したからこそ、八木家・時国家のような蔵書が形成され、その流れを受け継いで、傳治は漢学的教養や風雅の文化の学びのための蔵書を形成したものと考えられる。杉仁『近世の地域と在村文化』は、在村文化は少なくとも明治三〇年代までほぼ近世と同じ形で続いたと述べる。直接生産から遊離せず、近世的な漢学的教養や風雅文化をたしなむと同時に、「近代」的な活動も行う人々の事例が紹介されており、傳治の姿と重なる（杉二〇〇一）。近世に育まれた文化・学習の営みが、近代にもなお受け継がれていたことを、傳治蔵書は表しているものと考えられる。

第二節　傳治の郷土の学問

前節で漢学的教養・風雅の文化の広まりが、在村文化や都市文化に見られる事を述べたが、それらには、藩の教育・学問が影響を与えていた。傳治蔵書にも、郷土の藩の思想・学問・文化の影響は見られるのだろうか。傳治が郷土博物館、地域の史料館に寄託していた資料から、興味深い事が明らかになった。

傳治は七四歳となる昭和十五年（一九四〇）に、郷土博物館へと文書を貸し出しているのだが、この文書の中に、「松崎渋右衛門殺害事件ニ関シ太政官判決書写　壹冊」というものがある。明治二年（一八六九）に高松城内桜の馬場で起きた、高松藩の家老・松崎渋右衛門殺害事件は、幕末・維新期に藩の進路をめぐって多くの地方で起きた派閥抗争事件の一つである。この事件では、親藩の高松藩において尊王攘夷を唱える少数派の松崎を、佐幕派の軍務局大隊令官、堀多仲ら幹部十四人が謀って殺害したとされている（山下・岩部二〇〇四）。

傳治蔵書には陽明学や尊王思想への関心が現れている。恐らくは、尊王思想の持ち主であった地域の家老、松崎渋右衛門に関心を持ち、こうした事件記録を所有していたのだろう。傳治が郷土の藩の思想や事件に注目していたことが分かる。

また、江戸時代の讃岐国の各藩―高松藩、丸亀藩、多度津藩は、儒学に力を注ぐ好学の藩であった。

高松藩は儒学の盛んな藩であり、藩校では藩士に限らず、城下の町人や農民も受け入れた儒学教育が実施されていた。また、文政十年（一八二七）に町人教育のための明善郷校が設立され、天保三年（一八三二）には聖廟を建設して儒学による思想的教化が行われ、天保五年（一八三四）に藩校での町民や農民の子どもの勉学を命じた通達が出されるなど、儒学教育が藩士から庶民にまで積極的に行われていた（香川県一九八九）。

丸亀藩の藩校では、儒者の三田義勝による、朱子学を正学とした講義が実施されていた。また、文政八年

（一八二六）には、下級武士や町民の子どもたちも受け入れた学びの場である敬止堂が設立される。文久年間（一八六一～一八六四）になると儒学教授の他に武芸の修練の必要性が生じ、明倫館とよばれる新館が創設された（香川県一九八九）。

多度津藩では、文政十一年（一八二八）に郷手代村川幸右衛門の子友蔵が子どもらに素読を教えていた所、箕部安左衛門（大目附）より役屋敷の西隣にある空き屋敷を使用し、出張教授をするようにとの口達があり、その場で儒学や武芸が学ばれるようになる。その後文政十三年（一八三〇）には家老より藩内へ、塾を藩校とするとの申し渡しがある。多度津藩の学問を推奨したのは家老の林直記だ。林は長野富山について儒学を学び、塾を藩校とし自明館と名付けた。自明館は後に、維新を迎え撃剣を講義内容に取り入れ、文武館と改称している（香川県一九八九）。

更に、陽明学については、林良斎という幕末期の著名な陽明学者が、多度津藩の家老職についていた。林良斎（一八〇八～一八四九）は、代々多度津藩の家老職を務める家に生まれた人物だ。丸亀藩校にて厳村南里に就いて朱子学を学んだ後、江戸藩邸で長野豊山に教えを受け、その後帰国するに際して豊山より『陽明文録』を贈られる。これを契機に陽明学の世界へ入った良斎は、天保五年（一八三五）と天保七年の両回にわたり大塩中斎の洗心洞を訪ね、陽明学者池田草庵らと交友をもつなど、陽明学の道を深めていく。三九歳の秋に弘浜書院を建てると、読書講学の所としたとされる（香川県一九八九）。

林良斎については、博物館へ貸し出した資料を記した札に、「典籍　讃岐の陽明学者　林良斎　一冊　文學博士高瀬武次郎述　□□傳治氏」「典籍　林良斎先生遺跡訪問記　大塚豊三郎述　陽明學誌掲載　二冊　□□傳治氏」とあり、傳治が良斎へ関心を持っていた事が分かる。「松崎渋右衛門殺害事件」や林良斎関係の文書など、傳治の

尊王思想や陽明学への関心には、郷土の学問・思想の動向が大きく関わっていたようだ。また、讃岐の各藩が儒学を奨励し、庶民の儒学教育にも力を入れていたことも、傳治のような商人が蔵書を形成する上での土壌となっていただろう。漢学的教養・風雅の文化が在村文化や都市文化に広まるなかで、藩の学問や教養がこうした文化に影響を及ぼしていたという事を、傳治蔵書や、傳治の収集していた文書類は示している。

第三節　明治期の儒学

傳治蔵書に見える儒学の学習には、明治期の儒教的教養の普及も影響していると思われる。松本三之介『明治精神の構造』は、明治時代は進取の気性・実験的精神が横溢する一方で、武士的精神が継承され、明治的人間像の模範として受け継がれていったと述べる。武士的人間像は、さまざまな捉え直しを経たうえで模範的な人間像となり、さらに明治に入ると武士的な道徳が一般的な道徳観念に浸透していく（松本一九九三）。

明治精神による武士的モラルの継承は、政府を中心に推進された臣民道徳論と結びつき、あるいは国家社会を担う自立的な個人の気概や品性の源流として再生された。明治二三年（一八九〇）に規定された教育勅語には儒教道徳が援用され、明治民法で家の制度が明確化されるにあたっても、旧武士層の家族秩序が理想的家族像として政府より公認され、家制度の範型とされる。また、明治初期の自由民権運動にあっては、士族の精神や気概がしばしば政治意識の源泉として評価されていた（松本一九九三）。

儒教的教養が広範に普及し、国民的な「知」として血肉化したのは、江戸期よりもむしろ明治期になってからのことである。明治初期啓蒙知識人たちは儒学を旧制度の虚学として批判、唾棄し、儒者を「腐儒」と切り捨てることで自らの学問を位置づけ、「知」の自立を宣言した。だが一方で、彼らの知的背景や知的風土を詳細に検討した時、

また「近代的」主張の内実を検討した時、これらの発言の背景には江戸後期からの知的連続が存在していた（中村二〇〇二）。

こうした近世漢学・儒学の流れを継ぐ近代儒学の教養を、傳治もまた蔵書に広く取り入れた。傳治が儒教的教養を身につけるために学習を行った背景には、十九世紀の儒学的教養の広範な層への普及も影響したと考えられる。

第四節　読書体験の変化

開化期の民衆はお上から「開かれる」ことに甘んじていた訳ではない。彼ら自身で「ひらける」ことを望み、増大する「文明開化」の情報量を消化・吸収しうる学習能力の獲得は、切実な生活的欲求でさえあったとされる（前田一九九三）。

明治維新に引きつづく約四半世紀は、日本人の読書生活が大きな変革を迫られた時期であった。その変革の過程は、ほぼつぎの三つに要約されると前田愛『近代読者の成立』は指摘する。すなわち、一、均一的な読書から多元的な読書へ（あるいは非個性的な読書から個性的な読書へ）。二、共同体的な読書から個人的な読書へ。三、音読による享受から黙読による享受への三つである。幕末から明治初年にかけて幼少年時代を過ごした人々は、その読書体験に前代の教養圏が把持していた洗練された秩序の名残をとどめており、かれらの読書体験はおどろくほどに等質性を持っていた。幼年期における素読と絵解きの読書体験は、やがて青年期における漢学塾での四書五経・左伝・史記・八家文などの学習、貸本屋から借りた読本・人情本・実録ものの耽読に引き継がれていく（前田一九九三）。

それが、明治十年代の半ば過ぎに少年期に達した、正規の小学校教育を受けた第一世代に属する人たちになると、

その読書体験は多様化の兆しを見せる。かれらが少年期に達した時には漢学塾の役割は低下し、貸本屋の退場は決定的になっていた。さらに、活版印刷による大量生産が低廉な価格の書籍・雑誌・新聞を市場に奔流させる。書物は個人的に読まれるものとして、明治青年たちの新しい生き方、価値観の模索に影響を与えていたと前田氏は述べる（前田一九九三）。

傳治はちょうど、この前代の教養圏が持つ秩序にもとづく等質的な読書体験と、多様化の兆しを見せる読書体験の登場する中間に少年期を過ごした。そのためか、傳治蔵書には前代の教養圏の秩序が色濃く表れている。しかし反面、最新の情報収集に努め近代化の波に乗ろうとするなど、新たな知識の吸収と個人での学習にも意欲的である。また、陽明学や尊王思想に特に興味を持ち収集を行った形跡も見られる。傳治蔵書では江戸期より続く儒学的教養の中で、前代の教養圏の秩序にのっとった収集が行われる半面、個人的で多様化する側面も見せているのではないかと考えられる。

結語

以上の分析の結果、明らかにできたことを以下にまとめる。

一、傳治は主に、教養や趣味の学びのために蔵書収集を行っていた。

二、傳治蔵書はほぼ傳治一代で築かれたものであり、彼は二〇代の頃から晩年まで書籍収集を行っていた。

三、傳治は地方商人として商業を営みながら、蔵書による幅広い学習を行うという知識人的な側面をもっていた。

四、傳治は定期刊行書などで中央の最新の情報を得ることに努め、中央の法制度や経済の状況に注意を払っていた。

五、傳治蔵書で集められた本の内最も目立つのは「漢学」、特に儒学関連の書籍の収集である。傳治は朱子学と陽明学に関心を持っていた。陽明学への関心は若い頃にはみられず、三四歳より後のいずれかの時点から関心を持ったようだ。陽明学の他にも、通史などの分析から、傳治が幕末維新期の尊王思想に影響を受けていたことがわかる。

六、傳治の漢学関連の学習は、明治二五年（一八九二）の段階では入門書、基本書を用いた初歩的な段階だったが、その後学びを深めていった。特定の分野では、陽明学へ関心を持ち、陽明学関連の書籍の収集が行われている。儒学の経書類の学習、朱子学等の学習についても、注釈本や余師本を購入し、基礎的な部分をより深く学んでいる。傳治の蔵書は基本的な学びの流れに沿って儒学を学んだ、という印象を強く抱かせる構成であり、専門的にあるいは学術的に儒学を究めた蔵書ではないと思われる。商家を営むかたわらの教養としての学習という、業雅両立のあり方を良く表しているのではないだろうか。

七、傳治は儒学の他にも、通史を収集し、読本や戦記を楽しみ、漢詩を読み、囲碁や茶道、俳諧を嗜んでいた。

八、傳治蔵書の構成は、八木家・時国家の蔵書と類似する。これは、近世日本に成立した漢学的教養・風雅の文化が幅広い階層に浸透し、近代に継続したことを背景とするものだった。

十、傳治の郷土、香川県は儒学の教育が盛んだった。傳治は郷土の尊王思想を有する藩士や著名な陽明学者に関心を持ち、漢学に大きなウェイトを置く蔵書を形成した背景には、このような学問環境も影響していると考えられる。

十一、幕末から明治初年の読書体験は等質性をもっていたが、明治十年代後半になると、読書体験は多様化の兆しを見せた。傳治蔵書は、等質的な学びの様相を見せる一方で、定期刊行書による情報収集や陽明学への関心など、

多様化の兆しも見せている。

傳治は江戸期より続く思想や観念の元に生きながら、最新の知識を取り入れ、近代化のなか、家を存続させることに努めていた。こうした特徴を示す傳治蔵書は、近代における地方商人がどのような思想、教養のもとに生きていたのか、そして彼らがいかにして近代化への適応を図っていったかということを考える上で、一つの有効な研究事例となると考えている。

今後は、蔵書より伺える欧米由来の知の浸透を、洋本の調査より本格的に分析していくと共に、傳治の家の地域的・社会的諸条件の調査を行い、傳治の生まれ育った地域にどのような知的ネットワークが存在したのかなどを調べていきたい。知人宅より今後も調査を行うお許しを頂いているので、今回行った調査を基礎として、より深く調査を進めていければと考えている。

註

（1）工藤航平氏は、蔵書を把握・再構築する方法の制約を次のように述べる。蔵書を把握し、再構築する方法としては、i 現存する書物の調査・整理と、ii 蔵書目録などの史料の分析という二つがある。この内 i の方法では、幾多の苦難を乗り越え現在まで残存した書籍のみを対象とし、その刊行時の基礎的情報という限られた情報のみで調査を行うという史料的な限界が存在する。現在の蔵書把握は、圧倒的に i によるところが大きいが、近年のネットワーク論などでは ii を利用した研究が多く見られる。近世期の実態、蔵書を形成した当事者の認識を踏まえた蔵書把握には、ii を利用した分析方法しかないのが現状だが、ii も、作成されること自体が少ないという史料的制約をもつ（工藤二〇一一）。

（2）傳治が地元の書店を利用して本を入手していたのかは分からないが、蔵書に「消毒済 9.2.26 香川県」の紙が貼られた物や、香川県の地名が書き込まれたものがいくつかある事から、傳治の地元に何らかの形で書物を得られる環境があったので

はと推測される。

（3）「知識人」とは、表象＝代弁し、意味をつくりだし、自己実現するような個人という、いわば近代社会における特権的な存在であると『江戸儒教と近代の「知」』において著者の中村春作氏は定義する（中村二〇〇二）。

（4）「地方名望家」とは財産と教養を有する名門の資産家であり、その社会的活動によって一般民衆から尊敬や名望を得ていた人たちのことを指す。「地方名望家」たる第一条件は民衆の信望がある事である（渡辺二〇〇九）。

（5）調査の際には、香川県立図書館「地域の本棚」を利用し、香川県の人物事典の類を元に、目次に傳治の項目が見られないか調べていった。人物事典では取り上げている人名を個々に目次に挙げているため、この調査方法から傳治が記載されているか否かが割り出せると考える。なお、香川県立図書館「地域の本棚」とは無料公開のインターネット図書室であり、電子テキスト化された香川県に関する資料の目次が、デジタル郷土資料として公開されている（香川県立図書館「地域の本棚」）。

（6）日本古典籍総合目録とは、日本の古典籍の総合目録（一部、漢籍・明治本を含む）だ。『国書総目録』（岩波書店刊）の継承・発展を目指して構築されたこの目録には、古典籍の書誌・所在情報が、著作及び著者の典拠情報とともに提供されている（日本古典籍総合目録）。

（7）明治二五年蔵書目録の本文は全四六丁。本文に用いられている原稿用紙は少なくとも三種類である。一～十四丁、十九～二四丁、三一丁では桃色の染料で匡郭が刷られた紙が用いられ、十五～十八丁、二五～三〇丁では小豆色の染料で匡郭が刷られた紙が用いられる。三二～四六丁では黒色の染料で匡郭が刷られた紙が用いられ、柱に「□□商廛」の印刷があり、傳治の経営する店で用いられた原稿用紙ではないかと考えられる。用紙の違いから書かれた年代などの情報を読み取る事はできなかった。

（8）ただし、工藤氏が論文中で扱う時代は近世であり、近代の蔵書研究の現況とは少し異なる部分があるかもしれない。だが、工藤氏の要約する内容からは、地域社会の蔵書研究の全体的な流れを読み取ることができると考える。近代蔵書研究は、今後の課題でもあると思われる。

（9）川瀬一馬『書誌学入門』は、「古写本」を厳密には室町時代までの写本、便宜的に慶長（一五九六～一六一五）・元和（一六一五～一六二四）・寛永（一六二四～一六四五）までのものも含むとし、「古版本」を慶長・元和・寛永までのものとする（川瀬二〇〇一）。

（10）戦時中出版物は思想統制と「日配」時代と呼ばれる出版―配給の一元的支配を受け、また、印刷用紙の配給制の元にあった。紙の原料である木材は軍需物資と結びつき、膨大な量の紙が軍官関係の公文書や宣伝ビラ、軍事情報誌となり、消

費されていった（紅野一九九九）。こうした状況下で本に用いられる紙の量は否応なく減っていったであろう。戦時中の傳治の蔵書の減少は、当時の出版の実情を映し出している。

（11）洋本については詳しく調査できていないが、『資本論』『レーニン評伝』『商業簿記要論』『新会社法論』などの本がみられる。

（12）雑誌は明治七年前後から政治、経済、社会、自然科学など幅広く文化的側面を解説・評論する形態をとった定期刊行物としてひとり歩きしはじめる。雑誌は知識、生活、娯楽の各情報を主として提供する印刷媒体であり、政治・経済・社会などに関する解説、評論や、日常生活に関する情報、幅広い趣味の領域に属するガイド情報である娯楽情報などを提供していた（浜崎一九九八）。

（13）『新論』は本格的な国内防衛論かつ内政改革論を示し、尊王攘夷運動に身を投じた幕末の志士達のバイブル的書物となっていた（苅部・片岡二〇〇八）。

（14）傳治の郷土では国学者の活動がみられるが、傳治は国学をほぼ受容していなかったようだ。

（15）高橋敏氏の『江戸の教育力』では儒学の村や町への浸透が指摘される。十八世紀に民間に浸透、熟成してきた儒学思想は、町村の上層階層の地方文人、寺子屋師匠たちによって吸収、消化され、彼らの精神的バックボーンとなっていた（高橋二〇〇七）。

（16）田崎哲郎『地方知識人の形成』は、時代と共に寺子屋の増加の中で、文字を知る人が増え、通俗的読物の普及、歌舞音曲への親しみ、俳句・俳諧歌・和歌のグループの交わり、茶の湯・生花・弓などの愛好者が地方の村落上層階層に登場してくることを指摘している（田崎一九九〇）。

（17）「御用町人」とは『近世の地域と在村文化』において杉仁氏が用いた呼称である。「御用商人」と類似の概念ではないかと考えられる。

（18）横田冬彦氏は、〈文化資本〉についてピエール・ブルデューの『ディスタンクシオン』を参照しているとする（横田二〇一〇）。『ディスタンクシオン』における「文化資本」を、『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕I』の訳者、石井洋二郎氏は次のように解説する。「文化資本　capital culturel　広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境や学校教育を通して各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など（身体化された文化資本）、書物・絵画・道具・機械のように、物資として所有可能な文化的財物（客体化された文化資本）、学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など（制度化された文化資本）、以上の三種類に分けられる。」（石井一九九〇）

〔参考文献〕

安藤正人、一九九八、『記録史料学と現代―アーカイブズの科学を目指して―』、吉川弘文館。
石井洋二郎、一九九〇、『ディスタンクシオン〔社会的判断力批判〕Ⅰ』、藤原書店。
宇野田尚哉、一九九六、「板行儒書の普及と近代儒学」『江戸の思想』第五号、ぺりかん社。
王家驊、一九九八、『中国における日本思想の研究②　日本の近代化と儒学』、農山漁村文化協会。
香川県、一九八九、『香川県史　第三巻　通史編　近世Ⅰ』、四国新聞社。
片桐芳雄、木村元、二〇〇八、『教育から見る日本の社会と歴史』、八千代出版。
苅部直、片岡龍、二〇〇八、『日本思想史ハンドブック』、新書館。
川瀬一馬、二〇〇一、『書誌学入門』、雄松堂出版。
岸田知子、二〇一〇、『阪大リーブル24　懐徳堂　漢学と洋学―伝統と新知識のはざまで―』、大阪大学出版会。
橘川俊忠、一九八九、「在村残存書籍調査の方法と課題―時国家所蔵書籍調査報告1（近世編）―」『歴史と民俗』（神奈川大学日本常民文化研究所論集）四、平凡社。
橘川俊忠、一九九〇、「在村残存書籍調査の方法と課題2―上時国家所蔵書籍調査報告（近代）―」『歴史と民俗』（神奈川大学日本常民文化研究所論集）五、平凡社。
橘川俊忠、一九九三、「地方文人・名望家の教養―相州津久井縣上川尻村八木家の蔵書をめぐって―」『歴史と民俗』（神奈川大学日本常民文化研究所論集）一〇、平凡社。
工藤航平、二〇一一、「近世地域社会における蔵書とはなにか―地域〈知〉の史料論的研究を目指して―」『国文学研究資料館紀要　アーカイブズ研究篇』第七号、人間文化研究機構国文学研究資料館。
紅野謙介、一九九九、『書物の近代』、筑摩書房。
新村出、一九八三、『広辞苑第三版』、岩波書店。
杉仁、二〇〇一、『近世の地域と在村文化―技術と商品と風雅の交流―』、吉川弘文館。
鈴木俊幸、二〇〇七、『江戸の読書熱』、平凡社。
高橋敏、二〇〇七、『江戸の教育力』、筑摩書房。
田崎哲郎、一九九〇、『地方知識人の形成』、名著出版。
中村春作、二〇〇二、『江戸儒教と近代の「知」』、ぺりかん社。
浜崎廣、一九九八、『雑誌の死に方　〝生き物〟としての雑誌、その生態学』、出版ニュース社。
堀川貴司、二〇一〇、『書誌学入門―古典籍を見る・知る・読む』、勉誠出版。
前田愛、一九九三、『近代読者の成立』、岩波書店。
松本三之介、一九九三、『明治精神の構造』、岩波書店。
森末義彰ほか、一九八九、『補訂版　国書総目録　第一巻』、岩波書店。

三好信浩、一九八七、『商売往来の世界　日本型「商人」の原像をさぐる』、日本放送出版協会。
横田冬彦、一九九八、「近世村落社会における〈知〉の問題」『ヒストリア』一五九号、大阪歴史学会。
横田冬彦、二〇〇七、『身分的周縁と近世社会5　知識と学問をになう人々』、吉川弘文館。
横田冬彦、二〇一〇、「日本近世上層町人における〈家〉の教育」『叢書・比較教育社会史　識字と読書―リテラシーの比較社会史』、昭和堂。
渡辺尚志、二〇〇九、『東西豪農の明治維新』、塙書房。

〔参考 HP〕
香川県立図書館「地域の本棚」
（http://www.library.pref.kagawa.jp/kgwlib_doc/local/local.html）2011 年12月19日1時20分アクセス。
国立国会図書館　NDL-OPAC（http://opac.ndl.go.jp/）2011 年11月21日13時42分アクセス。
大学共同利用法人国文学研究資料館　電子資料館　日本古典籍総合目録
（http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html）2011 年11月21日13時39分アクセス。
（利用の仕方：http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/howto.html#keylist）2011 年11月21日13時41分アクセス。
西尾市岩瀬文庫　西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベース（試運転）
（http://www.i-repository.net/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe?DEF_XSL=default&GRP_ID=G0000048&DB_ID=G0000048kotenseki&IS_TYPE=csv&IS_STYLE=default）2011 年11月21日13時47分アクセス。
山下和彦、岩部芳樹、2004、「角筆が面白い～旧高松藩士の獄中記発見から　三つの謎に迫る―四国新聞社」（シリーズ追跡）
（http://www.shikoku-np.co.jp/feature/tuiseki/273/）、2011 年12月25日14時02分アクセス、四国新聞社。
早稲田大学図書館　古典籍総合データベース
（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html）2011 年11月21日13時46分アクセス。

〔付記〕
傳治蔵書の調査の機会を与えて頂いた知人宅の皆様に、深く感謝いたします。また、蔵書の保存方法やシバンムシ駆除の方法についてお教えくださった西尾市岩瀬文庫の職員の皆様に、深く感謝いたします。

平成二三年蔵書目録

本番号	棚番号	書名	巻数	著者	刊行年	和暦　刊行年	成立年	分類	注記	日本古典籍総合目録掲載
1・2	A	新撰　地理小志字引	十二、三十四	江南金次郎　編輯	1883	明治 16		辞書		×
3	A	俳諧手桃燈		不詳	1865	元治 2		俳諧		×
4・5	A	俳諧　發句明治集	上下	内海良大　編輯	1880	明治 13		俳諧		×
6	A	俳諧　新五百題		武田先生　編	1891	明治 24		俳諧		×
7	A	狂歌題林抄　讀方　證歌	上	狂歌房米人	1805	文化 2		狂歌		
8・9	A	近世名家　類題發句集	上下	花守岱年　撰	不明	不明		俳諧		×
10	A	俳諧流行發句集冬部		曾長成　編	不明	不明		俳諧		×
11	A	今人發句集秋		木木園校　輯	1903	明治 36		俳諧		×
12	A	無双いろは字典		清水善博	1905	明治 38		辞書		×
13	A	日本いろは字典		加藤伴之	1921	大正 10		辞書		×
14 ～ 17	A	晩唐詩選	一～四	曹学栓　撰	1806	文化 3		漢詩		
18・19	A	増補元明史略字解	上下	櫻井茂衛　編輯	1879	文化 3		辞書		×
20・21	A	明治訓点　四書集註　論語	上下	朱熹　撰　久留問与三訓点	1884	明治 17		漢学		×
22・23	A	明治訓点　四書集註　孟子	上下	朱熹　撰　久留問与三訓点	1884	明治 17		漢学		×
24	A	明治訓点　四書集註　學庸		朱熹　撰　久留問与三訓点	1884	明治 17		漢学		×
25・26	A	増補十八史畧字解	上下	櫻井茂衛　編輯	1878	明治 11		辞書	巻末「明治十四年購入」書込	×
27	A	和漢名數　目録		上田元周　編	1752	宝暦 2　再刻		辞書		
28	A	図解和漢名數大全		上田元周　編	1842	天保 13　四刻		辞書		
29	A	寺子日用　童子古狀揃大成		不詳	1850	嘉永 3		往来物	巻末書込あり	×
30	A	小笠原諸禮大全		不詳	1851	嘉永 4		往来物		×
31	A	四季部類大全		岡田寅之進　翻刻	1879	明治 12		俳諧		×
32	A	男女必讀　ふみのかけはし		吉澤富太郎	1889	明治 22		往来物	巻末書込あり	×
33	A	男女必讀　ふみの志ほり		吉澤富太郎	1889	明治 22		往来物	巻末書込あり	×
34・35	A	明治大家絶句	一、二	山田延太郎　編輯	1888	明治 21　第二版		俳諧		
36・37	A	月瀬記勝	天地	斎藤拙堂	1881	明治 14		漢詩文		
38	A	文選字引		洞明先生校	1862	文久 2　改刻		漢学		
39	A	廣益無双　日本正字通		清水善博　編	1893	明治 26		辞書	「高畠蔵書」印	×
40	A	以呂波節用　明治辭典		花房柳條　編輯	1894	明治 27		辞書	「□林文庫」印　消印あり	
41	A	字典節用集		髙田政度　選	1817	文化 14　再刻		辞書 節用集	表紙裏表紙なし	
42 ～ 46	A	近代名家著述目録	一～五	堤朝風　原輯	1836	天保 7		書目		
47	A	新撰　和漢書画一覧		葛城禪敖　識	1800	寛政 12　再版		書画		
48	A	新撰　和漢書画一覧		鳴鶴書舗　識	1835	天保 6　六刻	天明 6　原刻 寛政 12　再刻 文化 6　三刻 文化 11　四刻 文政 4　五刻	書画		不明
49	A	無雙字林　大増活益会玉編		伊澤駒吉　編輯	1891	明治 24		辞書		×
50 ～ 53	A	明治大家文鈔	一～四	吉田長祥　編纂	1880	明治 13		不明	「□□傳治」印	×
54・55	A	煎茶早學	上下	竹軒楽人	1911	明治 44　五版		茶道		×
56	A	喫茶新叢生記		諸岡存	1930	昭和五年　再版		茶道	ちきりや茶店　非売品	×
57	A	白樂天詩集		五雲先生　選	1797	寛政 9		漢詩		×
58 ～ 60	A	醉古堂劍掃	一～三	松陵陸紹珩　客選	1908	明治 41		不明		
61	A	評註　文章軌範獨學		土田淡堂　評註	1903	明治 36　譲受発行		漢学		×
62	A	評註　続文章軌範獨學		土田淡堂　評註	1903	明治 36　譲受発行		漢学		×
63 ～ 65	A	蘇東坡詩集	一～三	近藤元粹	1908	明治 41　三版		漢詩		×
66 ～ 68	A	増讀大廣益會玉篇大全	上中下	毛利貞斎	1911	明治 44		辞書		
69	A	宝玉百人一首		不詳	不明	不明		往来物		
70	A	江□往来		不詳	1850	嘉永 3		往来物	書名不明　本に挟まれた札参照。	不明
71	A	改訂四版　税務至要		荻野千之助	1899	明治 32　改訂四版	明治 28　印刷 明治 31　増訂三版	法制？		×
72・73	A	四聲音訓　廣益會玉篇	上下	大塚宇三郎　編纂	1901	明治 34		辞書		×
74・75	A	金□玉□　新撰詩學活法	天地	福井淳　編纂	1895	明治 28　訂正再版	明治 26　印刷	漢詩		

76	A	名家百人十句		俳句研究會　編	1920	大正 9　四版		俳諧		×
77	A	生花秘術獨稽古		熊見良　編纂	1911	明治 44　五版		花道	裏表紙書込あり	×
78	A	墨水秋詠		平野治	1918	大正 7		漢詩		×
79	A	狂歌　富士百景画譜		大川錠吉　編輯	1890	明治 23　再版	萬延 9　初刻	狂歌		×
80 ～ 82	A	七輯	上中下	藤澤南岳　編	1911	明治 44		書道		
83	A	甲辰の秋樗庵野□　老師　蕉門 俳談諸記　俳諧雑録		□□□□	不明	不明		俳諧	折本　写本　書名不明。本に挟まれた札参照	×
84	A	新撰繪入　増補年代記大成		雪陽散人	1917	大正 6　第十六版		年代記	折本	
85	A	訂正増補　新撰年表		清宮秀堅　原著 安藤一郎　訂正増補	1892	明治 25　訂正増補 三版	明治 12　出版御届 明示 19　増補再版	年表	裏表紙「河田一雄」書込	
86	A	詩韻碎金幼學便覽		伊藤馨　撰	1849	嘉永 2		漢詩	横「安政三年三月吉祥日求之」書込	
87	A	明治幼學便覽		森口永太　編輯	1884	明治 17		漢詩	表紙朱筆書込	×
88・89	A	詩語對句自在	一、二	藤良國	1850	嘉永 3		漢詩	五巻合冊	
90 ～ 92	A	古渡　新渡　唐本類書考	上中下	向栄堂主人	1751	寛延 4		書誌		
93	A	下懸雛謡大成		不詳	1791	寛政 3		謡曲		
94	A	外雛諷		不詳	1762	宝暦 12		謡曲		
95	A	雛諷大成		不詳	1783	天明 3		謡曲	裏表紙書込	
96	A	袖珍康熙字典		橋爪貫一　編輯	1904	明治 37　第七版		辞書		×
97	A	東湖遺唫		藤田東湖	不明	不明		漢詩 和歌	折本	
98	A	國語法一覽		華族女学校　編纂	1902	明治 35		教育	折本　「伊藤泣情」印。「金港堂文芸界懸賞漢詩ニテ得タリ」書込	×
99	A	和哥八重垣（？）		不詳	不明	不明		和歌	本の後半欠	
100	A	芳野新詠		荒井鳴門	1819	文政 2		漢詩		
101	A	鴻鵠志		吉田松　　輯	1869	明治 2		漢学		
102	A	松□快談		長野豐山	1919	大正 8		伝記		×
103	A	四部備要説明書		上海中華書局	不明	不明		書目		×
104・105	A	鯊渓紀勝		花房鼓山	1906	明治 39		漢詩		×
106	A	隷書千字文		小野□之助	1920	大正 9　再版		書道		
107	A	十體千字文　附　千字文講義 實語教俗解　童子教俗解		大橋新太郎　編輯	1893	明治 26		辞書	表紙「有用之書□□子□之好□□や　紫舟□□」書込。裏表紙に書き込み	×
108	A	新撰日本節用		内山正如　編纂	1893	明治 26		辞書		×
109	A	文求堂新古唐本書目		文求堂書房	1910	明治 43		書目	古書店カタログ	×
110	A	藏書紀要坿　文求堂唐本　書目		文求堂書房	1913	大正 2		書目	古書店カタログ	×
112・113	A	頼復校訂　通儀	上中	頼襄子成	不明	不明		政治		
113・114	A	頼山陽著　通議	中下	頼山陽	1882	明治 15　翻刻		政治		
115	A	三十二世黄□□元書画		不明	不明	不明		書画	書名不明。本に挟まれた札参照	×
116	A	いろは分漢語字引		德山純　編輯	1880	明治 13		辞書		×
117	A	標記唐宋聯珠詩格	巻下	小石磯郎　編標	1880	明治 13		漢詩		×
118	A	寐惚先生文集		岸田太右衛門　翻刻	1881	明治 14	明和 4　新刻	狂詩 狂文		
119	A	近古史談		大槻清崇	1868	慶応 4		雑史		
120	A	山中人饒舌	上	竹田生	不明	不明		随筆	朱筆書込	
121	A	林華園鷹事圖録		林新助　編輯	1903	明治 36		書画	非売品	×
122	A	西御丸御造営　御用掛御役人附		出雲寺幸次郎	1838	天保 9		名鑑	裏表紙「天保十五甲辰求之　春英」書込	
123	A	新板改正　文久武鑑　西御丸附	巻之四	不詳	不明	不明		名鑑 武鑑		
124	A	古今名家　群玉詩文		小川棟宇　編輯	1877	明治 10		漢詩		×
125 ～ 128	A	金声玉音	上下、× 2 冊	渡邊元成　編輯	1877	明治 10		漢詩？		×
129・130	A	天下一品　明治作詩含英	乾坤	橋本小六	1883	明治 16	明治 15	漢詩・辞書？		
131	A	啓蒙　智慧之環		於菟子　譯述	1874	明治 7　改正	明治 5　新雕	辞書		×
132・133	A	標註續菜根譚	上下	杉原夷山	1910	明治 43　七版	明治 42	教訓？		×
134	A	菜根談	乾、前集、後集	藤井利八　複製	1925	大正 14		教訓？	三冊合冊。	
135 ～ 137	A	寒聚瑣綴	上中下	淺野長祚	1880	明治 13		随筆		

138	A	治安策		迎陽軒玉栞之字	不明	不明		政治	写本　著者不明。本に挟まれた札参照	
139	A	項羽本記		迎陽軒玉栞之字	不明	不明		政治？	写本　著者不明。本に挟まれた札参照不明 "	×
140 ～ 141	A	鼇頭□解　十八史略大全	一、二	内山経知　編輯	1884	明治 17		外国史		
142	A	藤本鐵石先生　印譜在中　□□様返戻品		知水　識	1929	昭和 4		印譜	封筒　裏表紙「大西幸泉」書込	×
143	A	觀古堂印譜		三蕉中村桑　撰	1891	明治 24		印譜		×
144 ～ 145	B	支那史要 文部省検定済	上下	市村□次郎	1895	明治 28　訂正五版	明治 27	外国史		×
146 ～ 147	B	鐘美帖	一、二	日本美術教会	1902	明治 35		絵画		×
148 ～ 154	B	康熙字典　第一函	一～六、補遺	陳邦彦	1716	康熙 55（？）		辞書	一函　全七冊　状態が良いため明治版のものか	
155 ～ 160	B	康熙字典　第二函	一～六	陳邦彦	1716	康熙 55（？）		辞書	二函　全六冊　帙に「三百七千四号」貼紙	
161 ～ 166	B	康熙字典　第三函	一～六	陳邦彦	1716	康熙 55（？）		辞書	三函　全六冊	
167 ～ 172	B	康熙字典　第四函	一～六	陳邦彦	1716	康熙 55（？）		辞書	四函　全六冊	
173 ～ 178	B	康熙字典　第五函	一～六	陳邦彦	1716	康熙 55（？）		辞書	五函　全六冊	
179 ～ 186	B	康熙字典　第六函	一～七、補遺	陳邦彦	1716	康熙 55（？）		辞書	六函　全八冊　うち一冊は補遺	
187・188	B	高杉東行詩文集	上下	津川松太郎　編輯	1892	明治 25		漢詩		
189 ～ 191	B	精校斷句　王陽明傳習録	上中下	上海掃葉山房　発行	1924	民国 13		漢学	帙内・巻末「東洋大学二科二年山川朝四朗」書込	×
192 ～ 201	B	論語語由	一～十	亀井先生	1880	明治 13　補刻		漢学		
202	B	文明移入に関する古書展覧會目錄		荒木幸太郎	1925	大正 14		書目		×
203・204	B	譚短海	一、二	依田百川	1884	明治 17		伝記		
205	B	雨中花　（月並雌句集題）		花晩書洋	不明	不明		俳諧	写本	不明
206	B	狂歌日本風土記		北窓梅好	1831	天保 2		狂歌	表紙なし　裏表紙「尾道屋□傳」書込	
207 ～ 226	B	前賢故實	上一～十、下一～十	菊池武丸　蔵版	1836	天保 7（？）		伝記 絵画	帙に「荒木書店　大阪」シール。刊行年次記載なし。蔵書に挟まれていた札を参照	
227	B	明治天皇御集		宮内省　蔵版	1922	大正 11		和歌	巻末に「消毒済 9.2.26 香川県」の紙あり。藤川の記入あり	×
228・229	B	竹田書画譜	乾坤	青木恒三郎	1901	明治 34		書画	帙書込り	×
230 ～ 233	B	賞心贅録	一～四	江馬正人	1881	明治 14		漢詩？		×
234 ～ 240	B	梅嶺画鑑	一～七	幸野楳嶺　画	1913	大正 2　求版		絵画	折本	
241 ～ 248	B	増補日本政記　再刻	一～八	頼久太郎	1891	明治 24　四刻	明治 9	通史		
249 ～ 251	B	寧静齋文存　五巻	一～三	牧野謙次郎	1932	昭和 7		随筆？		×
252・253	B	寧静齋文存　五巻　黙水居随筆	一、二	牧野謙次郎	1932	昭和 7		随筆？		×
254 ～ 257	B	新居帖	一～四	桃花庵　蔵版	1876	明治 9　版権免許	弘化 4　出版	書道	巻末「吉田□治良」書込	
258	B	江南游藻　江南三十圖詩畫抄鐫		渡邊蕃　編輯	1916	大正 5		漢詩 絵画	非売品	×
259	B	ゆかりのいろ		加藤正誼　編輯	1925	大正 14		和歌	非売品	不明
260	B	訂正九版　書道講習録		小野　之助　編書	1909	明治 42　訂正九版	明治 39	書道	洋本	×
261・262	B	甲子兵燹圖	上下	森雄山　編圖	1893	明治 26		災異	折本	
263	B	東西遊記　東征稿	上	中井竹山	1853	嘉永 6　刻成		紀行		
264	B	東西遊記　西上記	下	中井竹山	1853	嘉永 6　刻成		紀行		
265 ～ 268	B	標註　山陽詩鈔	一～四	頼久太郎	1883	明治 16　出版	明治 15　版権免許	漢詩		
269 ～ 272	B	増補　尚古年表　上帙	一～四	山本隠倫	1925	大正 14		金石文		
273	B	四言教講義　附或問		三輪希賢	1727	享保 12		漢学		
274	B	蒹葭堂小傳		高梨光司	1926	大正 15		伝記	「此書五百部刊行第三六五号」り	×
275	B	杏雨餘滴	乾	帆足進　編輯	1912	大正 1		伝記 書画		
276 ～ 295	B	鈐録	一～二十	物徂徠	1857	安政 4　新刊		兵法	本中に「古書籍展覧会　鈴録二十冊　物徂徠　金拾一円」の札	
296	B	殉難前草		青雲閣兼文	1868	慶応 4　叢		和歌		

297	B	神皇正統記　附吉野拾遺		鈴木種次郎　編集	1935	昭和 10　第三版	昭和 10	通史 史論		
298	B	古今書畫名家年表		石田誠太郎	1913	大正 2		年表 書画	非売品	×
299	B	新曲古曲　琴曲全集		富道音樂研究會	1921	大正 10　三十六版	明治 44	楽器	「□□氏」書込	×
300・301	B	海村	上下	有島生馬	1927	昭和 2		不明		×
302 ～ 304	B	幼學綱要	上中下	宮内庁　蔵版	1926	大正 15　七版	明治 20　版権届	教育		
305 ～ 307	B	婦女鑑	上中下	宮内庁　蔵版	1926	大正 15　七版	明治 20　版権届	教育		
308	B	漢文解		宮内庁　蔵版	1926	大正 15　七版	明治 20　版権届	教育		
309	B	換鵞集		丸女	1910	明治 43		書道	手書き	×
310	B	辛亥換鵞集		丸女	1911	明治 44		書道	手書き	×
311 ～ 322	B	増続　會玉篇大全	全 12 冊	毛利貞齋　編輯	1877	明治 10　七刻		辞書	包装「明治二十四年□…□□□□□□」書込　全十二冊	
323	B	曼荼羅通解		權田雷斧	1922	大正 11　五版	大正 5	仏教		
324	B	東河濯纓		藤原東川　編輯	1927	昭和 2	昭和 1　印刷納本	漢詩 和歌		×
325	B	字義詳解　朱子　大學句讀講義 春日仲淵先生講義		春日仲淵	1886	明治 19	明治 18　版権免許	漢学		不明
326 ～ 329	B	小曲　松のみどり	一～四	歌沢士佐太夫芝重　直傳	1909	明治 42		歌謡？		不明
330	B	懐徳堂五種		西村時彦　編輯	1911	明治 44		漢学	非売品	×
331	B	蘭洲茗話		西村時彦　編輯	1911	明治 44		不明	非売品	×
332・333	B	勢語通	2 冊	西村時彦　編輯	1911	明治 44		物語 注釈	非売品	
334・335	B	竹山國字牘	2 冊	西村時彦　編輯	1911	明治 44		書簡	非売品	
336 ～ 339	B	論語逢原	4 冊	西村時彦　編輯	1911	明治 44		漢学	非売品	
340 ～ 345	B	尊除集	5 冊	西村時彦　編輯	1911	明治 44		漢詩？		×
345・346	B	東北遊日記	上下	吉田松	1868	慶応 4		紀行		
347・348	B	松□先生武教講録	2 冊	吉田松	1871	明治 4　刻成	明治 2　官許	兵法		
349 ～ 354	B	幽室文稿	6 冊	吉田松	1881	明治 14　刻成	明治 12　版権免許	漢詩		
355 ～ 359	B	頼山陽先生手簡	第一集～五集	杉本要　石川喜助　發行	1913	大正 2　譲受	嘉永 2　出版	書簡	折本	
360 ～ 363	B	歸入寶典	巻の一～四	山澤俊夫　編纂	1909	明治 42　三版	明治 36　印刷	礼法？		×
364	B	日本貨幣史		兀山	1893	明治 26		貨幣？		不明
365	B	せめて綴草　第一学期		□□みね	不明	不明		日記	表紙「第四学年北組　□□みね」書込	×
366	B	水府公猷策	上	徳川斉昭	不明	不明		政治	写本	
367	B	荊門行書		不詳	不明	不明		不明	写本	不明
368	B	草書		不詳	不明	不明		書道	写本	不明
369	B	行書		不詳	不明	不明		書道	写本	不明
370	B	五七言絶句		不詳	不明	不明		漢詩	写本	不明
371 ～ 373	B	唐詩七言絶句	3 冊	不詳	不明	不明		漢詩	写本	不明
374	F	高等圍棊講義録組立概案		八幡恭助	1935	昭和 10　七版発行	大正 15	囲碁		×
375	F	最新講評　置碁石立□範　七子五子三子		中川千治	1914	大正 3　訂正三版発行	"明治 44　初版発行 明治 44　訂正再版発行"	囲碁		×
376	F	東行寫眞		楳嶺 凌雪園同人　編輯	1925	大正 14		不明	非売。絵入	
377	F	聖代讀本	巻下	芳賀矢一	1912	明治 45　発行	明治 44　印刷	不明	巻下のみ	×
378・379	F	蘇元存稿	上下	桐島像一	1926	大正 15		不明	非売品	×
380	F	志士遺芳		大木清治	1943	昭和 18		不明	限定絶版	×
381・382	F	梅清處文鈔	上下	山本憲	1913	大正 2		不明	非売品	×
383	F	櫻百趣		谷士隆介　編輯	1914	大正 3		絵画	絵入	×
384 ～ 388	F	白樂天詩集	一～五	近藤元粹　訓訂	1906	明治 39　九版		漢詩？		×
389	F	十銭文庫　新釋　江戸繁昌記		朝野房　編集	1911	明治 44		地誌		
390・391	F	新論	上下	會澤正志	不明	不明		政治		
392・393	F	星巌詩集	天地	金刺源次　發行	1894	明治 27		漢詩？		×
394 ～ 397	F	唐宋詩語玉屑	二～五	高木專輔　輯	1841	天保 12　刻成		漢詩		
398	F	山中人饒舌	下	田□村氏　蔵板	1879	明治 12　翻刻御届	嘉永 7　原版	随筆		
399 ～ 402	F	陶淵明集	天地玄黄	近藤元粹　撰	1913	大正 2		漢詩？		
403 ～ 406	F	校定常陸帶	一～四	藤田彪	1866	慶応 2		伝記	著者不明。本に挟まれた札参照	

407 ～ 412	F	墨場必携	巻一～六	市川米菴　編輯	1893	明治 26　再版発行	明治 26　求版	書道		
413	T	新式　習字と手紙		小野□之助　編輯兼筆者	1908	明治 41		教育		×
414	T	高等女子　文の志を梨		中島真州　編輯兼筆者	1898	明治 31		教育		×
415・416	T	草書淵海	上下	□朝訥齋田宗堅　甫撰	1675	延宝 3　序文		書道 辞書		
417 ～ 419	T	行書唐詩選　五言絶句	上中下	鳥石先生	不明	不明		書道		
420 ～ 423	T	漢篆千字文	上、上之下、中、下	芙容源先生　稿本 學川曾居士　増修	1796	寛政 8　序文		書道		
424	T	龍田詣		宇知驛屋　彌吉	1842	天保 13		往来物	写本。西尾市岩瀬文庫にあり	×
425	T	手紙文例		宇智驛屋　岩吉	1840	天保 11		往来物	写本。西尾市岩瀬文庫にあり	
426	T	校訂増補　十體千字文		細井広澤　遺稿	1881	明治 14　識語		書道	最後の丁に犬の印の押された厚紙が二枚貼られている。書込、蔵書印多数。裏表紙「錦太郎」書込	
427・428	T	新選萬字文	一、二	佐瀬得所	1891	明治 24　再版	明治 8　明治 21　求版	往来物		
429	T	行書世話千字文　海石書		村田浩造	1883	明治 16		書道		
430	T	廣千文		鹿門河維明	1768	明和 5		往来物	題箋なし	
431	T	女文章指南車		静茶巽行精　作	1853	嘉永 6　發兌		往来物	著者不明。本に挟まれた札参照	
432	T	吉岡孝始著　眞行両點 單語五千字		吉岡孝始	1872	明治 5		往来物？	年代不明。本に挟まれた札参照。	×
433	T	詩文眞蹟		頼山陽	1918	大正 7　譲受発行		漢詩 文？		×
434・435	T	漢語注解　書翰大全	上下	萩原乙彦	1873	明治 6		往来物	年代不明。本に挟まれた札参照	
436	T	真艸兩讀　寺子讀書千字文		葛西水玉堂	1835	天保 6　再板		往来物		
437	T	啓蒙手習の文		福澤諭吉　編	1871	明治 4　序文		往来物		
438	T	頭書　女用文袖珠		山田貴月堂　筆	1858	安政 5　新板		往来物	見返し「横井氏」書込	
439	T	女子消息　ふみかきふり		小野鋼之助　編輯兼筆者	1906	明治 39 訂正 10 版発行	明治 24　初版印刷発行	往来物？		×
440 ～ 442	T	米菴墨談	巻一～三	米菴主人	1812	文化 9　新鐫		書道		
443 ～ 445	T	米菴墨談　續編	巻一～三	米菴主人	1812	文化 9　新鐫		書道		
446 ～ 448	T	東江先生書唐詩選	上中下	東江源鱗文龍書	1784	天明 4　新鐫		書道		
449 ～ 450	T	書道　師範學校小學校女學校 中學校高等學校教員諸官衛吏員神職僧侶等　參考用	上下	吉田□生　発行兼編纂者 北崎道範　発行兼編纂者	1904	明治 37　再版	明治 36　印刷 明治 37　発行	書道		×
451・452	T	隷辯	上下	東江源鱗　撰	1792	寛政 4		書道	国立国会図書館にあり	×
453	T	新撰大全　童子往来百家通		晩鐘成　纂校　並　書圖 龍章堂　文章　並　巨書 浦邊昭　註説　並　細書	1868	慶応 4　再刻	天保 8　嘉永 5　再刻	往来物		
454 ～ 463	T	石立稽古　置碁自在	一～十	服部因淑	1892	明治 25		囲碁		
464	T	ポケット素人棋經　置碁の手筋		森田幸次郎　編輯	1911	明治 44		囲碁		×
465 ～ 467	T	格伍定石集	一～三	辻井榮治郎	1892	明治 25		囲碁	見返しに「□□傳治様」と書かれた紙あり	×
468 ～ 471	T	五體字書	子至寅、卯至巳、午至申、酉至亥	前田圓	1904	明治 37		辞書？	卯至巳の廿七丁に「塩田安治」と書かれた名刺が挟まっている。	×
472	T	照顔録　附坐獄日録		柗陰二十一回□士	不明	不明		政治		
473	T	如亭山人藁　初集		柏昶永日	1806	文化 3　序文		漢詩文	表紙「山□□兵□林氏蔵書」書込。巻末書込あり	
474・475	T	凝秀山房詩	上下	佛石　山口光道　淨薫	1930	昭和 5		漢詩？	非売品	×
476・477	T	梅潭詩鈔	上下	田邊新之助　編 岡崎壮太郎	1902	明治 35		漢詩？	巻末「松山学生堂書店」シール。	
478	T	佛山堂遺稿　上下		末松謙澄　編纂	1914	大正 3		不明		×
479	T	國民精神作興詔書帖		藤原茂	1925	大正 14		不明		×
480	T	千代のひかり		松方正義	1903	明治 36　刊行		和歌	著者不明。本に挟まれた札参照	
481	T	皤皤野の花		津崎村岡	1895	明治 28		和歌		×
482	T	消息新十二月帖		池邊義象	1921	大正 10		不明		×
483	T	庭訓往来繪鈔		内山松陰	不明	不明		往来物	巻末書込あり	

484	T	泰平御江戸往來		吉田屋文三郎　板	不明	不明		往来物	巻頭巻末に書込「文久二壬戌年伊澤氏」	
485	T	増字　消息往来		芝泉堂先生　書	1834	天保 5		往来物		
486	T	反□さのし		鵬齋老人	不明	不明		不明		不明
487	T	開化日用　文の梯		三尾重定　編	1878	明治 11		不明		
488・489	T	習字單語　村田海石書		村田海石	1875	明治 8		書道		×
490	T	庭湖集		芳田奇然　編輯	1905	明治 38		和歌？	非売品	×
491	T	常磐能佳氣		井□美清	1912	大正 1		和歌	非売品り	
492	T	草の戸集		桐陰宇末彦	1912	大正 1		俳諧		×
493	T	漢字のくづしかた		前田德次郎	1916	大正 5		教育？		×
494・495	T	新撰普通　明治塵劫記	上下	新名重内　編輯	1880	明治 13		和算？		×
496	T	硯の栞		後藤朝太郎 山口弘達　共著	1921	大正 10		書道？		×
497	T	隷真行艸千字文　千字文講義		小野□之助　書 伊藤千可良　述	1917	大正 6		書道？		×
498 ～ 501	T	隷真行艸千字文　隷　千字文	隷、真、行、草	小野□之助　書	1917	大正 6		書道？		×
502・503	T	木堂翰墨談	巻一・二、巻三・四	犬養毅　講話 長尾甲　補評	1916	大正 6　再版	大正 5	書道？		×
504	T	銅版画入　萬國往來		四方春翠	1871	明治 4		往来物	裏表紙に書込あり	
505 ～ 510	T	草字彙	一～六	八十二翁石亭　書	1880	明治 13		不明	乾隆原本　著者不明　本に挟まれた札参照	
511	T	現代圍碁大系　圍碁大講座	第八冊	鈴木為次郎　木谷實	1937	昭和 12		囲碁		×
512	T	現代圍碁大系　詰碁の新研究		喜多文子	1935	昭和 10		囲碁		×
513	T	現代圍碁大系　圍碁初学入門		鈴木為次郎	1934	昭和 9		囲碁		×
514・515	T	現代圍碁大系　はめて大成	上下	瀬越憲作	1935	昭和 10		囲碁		×
516	T	現代圍碁大系　置碁四子から九子必勝法		岩佐銈	1934	昭和 9		囲碁		×
517	T	現代圍碁大系　布石と定石の統合		木谷實	1934	昭和 9		囲碁		×
518	T	現代圍碁大系　先手優勢布石方		呉清源	1935	昭和 10		囲碁		×
519	T	定石進化の経路		加藤信	1935	昭和 10		囲碁		×
520	T	現代圍碁大系　玄々碁経新定本		橋本宇太郎	1935	昭和 10		囲碁		×
521	T	現代圍碁大系　侵分と劫の研究		久保松勝喜代	1935	昭和 10		囲碁		×
522	T	大岡政要實録	巻之八	不詳	1851	嘉永 4　写之		実録	写本。裏表紙に「嘉永四辛亥年皐月上旬写之　夫野氏」とある。八巻のみ	
523	T	不明		不詳	不明	不明		不明	写本。題箋なし。書名著者年代不明。本に挟まれた紙に「メモ的雑書　一冊　筆記年代不明」とある。筆跡は傳治と異なる。	不明
524	T	頭書増補訓蒙圖彙	巻之八巻之九	不詳	1848	嘉永 1		事典	題箋欠け読めず。見返しに「讃□加賀屋新□嘉永元年伐申九月　穐之月」書込あり。巻末に書込多数。年代不明。本に挟まれた紙参照	
525	T	婢女行		吉田先生　筆夫	1881	明治 14		不明	写本。巻末「讃□　□□傳治」書込	不明
526	T	小謡集		不詳	不明	不明		不明	写本。子どもが書いた字のように見える	不明
527	T	唐詩選五言絶句		米倉書散人	1575	天正 3		書道・漢詩？	写本。巻末に「天正三年　□九月□日　□□□　□□求」書込。	不明
528	T	唐詩選		硯山亭松友山人書	1865	慶応 1		書道・漢詩？	写本。巻末書込あり	不明
529	T	黄檗山諸堂聯額		近藤大法　丸山鼎國	不明	不明		不明		
530	T	四時読書楽　好蘇玉□墓志銘		子□　記	不明	不明		随筆	写本。	

531	U	文語粹金	下　巻三	鈴木政寧又　甫輯 川口恭子　肅校	不明	不明		不明	巻三のみ	×
532 ～ 534	U	新撰文語粹金	天、地、玄	近藤元粹　編輯	1876	明治 9　例言		不明	全四冊中一冊欠本	×
535	U	校註　言志四録　合巻		佐藤一齋	1898	明治 31		漢学		
536・537	U	作文率	二・三、四	北山山本信有	不明	不明		漢文	二、三、四のみ	
538・539	U	無難禪師法語　異本　假名法語	2 冊	小谷保太郎　編纂	1915	大正 4		臨済	二冊あり	
540	U	文海一滴　初集		五十川左武郎　撰評	1883	明治 16		漢詩文		
541	U	最新　野菜料理法		田中せい子	1922	大正 11　第 46 版		家事？		×
542	U	操觚必要　事實門		不詳	不明	不明		不明	写本。題箋なし。三冊のみ。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学なし。	×
543	U	操觚必要　慶吊門		不詳	不明	不明		不明	写本。題箋なし。三冊のみ。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学なし。	×
544	U	操觚必要　人事門		不詳	不明	不明		不明	写本。題箋なし。三冊のみ。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学なし。	×
545	U	増補　藤公詩存		末松謙澄　編	1911	明治 44　増補再版発行	明治 43　発行	漢詩？	巻末にメモが挟まれている。	×
546・547	U	梅園紀行文艸	上下	須川信行　編輯	1903	明治 36		紀行？		×
548・549	U	秋水遺稿	上下	筒井興八郎	1917	大正 6		漢詩文		
550・551	U	詩語碎金　新刻	2 冊	泉要士德　編纂	1834	天保 5　嗣出		漢詩	文中に書込あり	
552・553	U	報桑録	上下	斉藤馨子德　稿	1868	慶応 4		紀行 漢詩文		
554	U	北遊詩草附録		詩佛先生　輯	1823	文政 6　發兌		漢詩	見返に書込あり	
555・556	U	近世名家詩鈔	上下	関重弘仲毅　輯 藤田龜千載	1861	万延 2　刊行		漢詩		
557 ～ 559	U	日記故事大全	上中下	赤松榮　撰 鎌田環齋　再校	1831	天保 2		不明		
560 ～ 564	U	寛齋先生遺藁	一～五	男　三玄　編次 孫　三千　校字	1821	文政 4　發兌		漢詩文		
565	U	三名士傳		長野確猛確	1828	文政 11		伝記		
566 ～ 568	U	朱雀經驗　養生辨	上中下	水野澤齋　編録	1851	嘉永 4　序文		医学		
569 ～ 571	U	朱雀經驗　養生辨　後編	上中下	水野澤齋　編録	1851	嘉永 4　序文		医学		
572	U	樹藥抜草　養蠶手引草		朝野泰毘古	1872	明治 5　序文		蚕業		
573	U	幼學詩韻　再刻		成德隣　輯 檜長裕　輯	1845	弘化 2　再版	天保 13	漢詩		
574	U	幼學詩韻　再刻		成德隣　編輯 檜長裕　編輯	1834	天保 5　再板		漢詩		
575 ～ 577	U	初學知要	上中下	貝原篤信　編輯	1884	明治 17	元禄 11　原版 明治 17　再版御届	漢学		
578	U	國朝畫徵録　正續		香雪道人　□校　蘭渚雅伯　□校	1798	寛政 10　翻刻		絵画？		
579・580	U	近世先哲叢談　正編	上下	松村操	1898	明治 31　再版	明治 13　版権所有	伝記		
581・582	U	續近世先哲叢談	上下	松村操	1898	明治 31　再版	明治 13　版権所有	伝記		
583	U	南汎録　單		羽倉用九士乾甫	1834	天保 5　序文		紀行		
584・585	U	新論	上下	會澤正志	不明	不明		政治	題箋なし	
586	U	誹諧證句　てにをは紐鏡図式早學		黒樹園先生 源李隆　篇	1844	天保 15	天保 12	俳諧		
587・588	U	詩韻含英異同辨	2 冊	劉文蔚約君　輯	1878	明治 11　再板	文化 14　発行 天保 11　再刻	漢詩？		

589	U	興風集　單		秋湖久坂通武	1862	文久 2		和歌 漢詩文	七丁に書き込みのある紙が挟まれている。本に挟まれた札「僧月性の詩あり」とある。年代不明。本に挟まれた札参照	
590・591	U	興風後集　單	2 冊	亟洲川西確　輔	1869	明治 2　新雕		詩文集	裏表紙に書込あり	
592 ～ 599	U	黄石齋	第一集、第二集上下、第三集上下、第四集上下	岡本黄石	1882	明治 15		不明		×
600	U	浪□小藁		岡本黄石	1882	明治 15		不明		×
601 ～ 603	U	月洲遺稿	上中下	巖垣六蔵	1877	明治 10　新鐫		不明		×
604 ～ 605	U	檜崎隆存編輯　近世詩文	第一集～三集	檜崎隆存　編輯	1877	明治 10　新鐫		漢詩？		×
607	U	外征紀事		福原公亮	1869	明治 29		不明		×
608	U	南遊志		庄司海村　編輯	1936	昭和 11		紀行		
609 ～ 612	U	天下古今　文苑竒觀	一～四	池田觀　編纂	1879	明治 12		不明		
613	U	校正　宮城縣地誌提要		宮城師範学校　編纂	1884	明治 17　再版	明治 14　版権届	地誌		×
614・615	U	日本立志編　五版	一、二	干河岸貫一	1880	明治 13　序文		倫理	巻末に書込あり	
616 ～ 620	U	三洲居士集	一・二、三・四、五・六、七・八、九・十・十一	長三洲	1909	明治 42		漢詩？		
621	U	□□□		銭唐蒋其辛子	1877	光緒 3		書画？	題箋なし。	
622	U	□□□		銭唐蒋其辛子	1877	光緒 3		書画？	題箋なし。	
623 ～ 625	U	日記故事大全	上中下	赤松榮　撰 鎌田環齋　再校	1880	明治 13　再版		不明	古典籍総合目録にあるものと同じか不明	不明
626	U	標註圖解　皇朝史略字類大全	上中下	山田貞豊　編輯	1883	明治 16		通史・辞書？		×
629 ～ 632	U	翻刻　日本略史	一～四	笠間益三　編輯	1882	明治 15　再版	明治 13	歴史		
633・634	U	東湖隨筆	上下	藤田東湖　門人等　緝	1870	明治 3　新刻		随筆？		
635 ～ 637	U	皇朝靖獻遺言	上中下	横尾謙　纂輯	1873	明治 6　序文		漢学		
638 ～ 643	U	皇朝史略	一～六	青山延于	1881	明治 14　上木出版	明治 13	通史		
644 ～ 647	U	續皇朝史略	一～四	青山延于	1884	明治 18　刻成	明治 8　版権免許 明治 11　再版御届 明治 14　三刻御届 明治 18　四刻御届	通史		
648 ～ 654	U	訂正　續續皇朝史略	一～七	石村貞一　纂輯	1881	明治 14　上木出版	明治 13	通史		
655 ～ 664	U	大槻東陽和解　啓蒙國史略	前編一～五、後編六～十	大槻東陽　蔵梓	1875	明治 8		通史？		
665・666	U	靖獻遺言	一・二・三・四、五・六、七・八	淺見安正	1869	明治 2　再刻	慶応 3　新刻	漢学		
668 ～ 672	U	啓蒙日本外史	六～十	大槻東陽　蔵梓	1875	明治 8		通史？		
673 ～ 684	U	日本外史	一～十二	頼久太郎	1883	明治 16	明治 9　版権免許 明治 13　再版御届 明治 13　別製本御届 明治 16　再版御届	通史		
685・686	U	弘道館記述義	上下	藤田彪	不明	不明		教育		
687 ～ 690	U	茶事集覽	一～四	小枝略翁　編	不明	不明		茶道		
691・692	U	ははのつとめ	親の巻、子の巻	三嶋通良	1894	明治 27　第六版	明治 22　第一版 明治 23　第二版 明治 25　第三版 明治 26　第四版 明治 26　第五版	教育？		×

693	U	模範教育　我家の新家庭		竹島茂郎	1905	明治 38　三版	明治 38　発行 明治 38　再版	教育？		×
694・695	U	鼇頭　十二宗綱要	本、末	町元呑空　編輯	1887	明治 20　刻成		不明		
696	U	碧堂絶句		田逸爲三郎	1914	大正 3		漢詩		
697 ～ 705	U	本朝名家文範	上中下、上中下 × 2 冊	馬場健	1892	明治 25　第三版	明治 18　版権免許 明治 20　訂正再版御届	漢文	697 ～ 699 の表紙に「新古典籍交換売買　辻文明堂書店」シール。装丁のみ異なるもの 2 種あり	
706 ～ 708	U	丙午紀行	天、地、人	佐藤脩亮	1922	大正 11		紀行		×
709	U	新訂　三世相大鑑		湯淺粂策　編集	1925	大正 14		占卜		
710 ～ 713	U	櫻水遺藁	4 冊	石丸安世	1918	大正 7		不明		×
714 ～ 717	U	各傳比較　點茶活法	巻之一～四、五～七、八～十、十一～十三	岡崎淵冲	1913	大正 2　再版発行	明治 34　発行	茶道		×
718・719	U	今世名家文鈔	一、二	小竹篠崎	1849	嘉永 2		漢文集		
720・721	U	今世名家文鈔	三、四	拙堂斉藤	1849	嘉永 2		漢文集		
722	U	今世名家文鈔	七	笛浦野田	1849	嘉永 2		漢文集		
723 ～ 727	U	絶句類選評本	一～五	東陽先生　輯 拙堂先生　評	1862	文久 2　新版		漢詩		
728	U	華實年浪草三餘抄	巻之六	不詳	不明	不明		俳諧	写本	
729 ～ 732	U	華實年浪草　秋の部	巻之一～四	不詳	不明	不明		俳諧		
733・734	U	讀史贅議	乾坤	齋藤竹堂	1853	嘉永 6　新鐫		史論		
735	U	ラヂオ・テキスト　茶の湯のお稽古		關正雄　編輯	1936	昭和 11		茶道		×
736	U	茶式		煙水道人　記	1770	明和 7（？）		茶道	料紙が新しい。	
737 ～ 740	U	日清交戦畫報	第二号～五号	藤原信一　編輯 坂入隆意　編輯	1894	明治 27		絵画	絵入彩色有。日清戦争の絵。	×
741 ～ 753	U	逸史	首巻、子～亥	中井積善	1876	明治 9		雑史		
754	U	鵬齋先生詩鈔	巻之ニ	不詳	1822	文政 5		漢詩		
755 ～ 757	U	北海詩鈔三編	上中下	江邨君錫	1782	天明 2		漢詩		
758	U	勢遊志		響石圖詩附	1730	享保 15		紀行		
759・760	U	茶話指月集	乾坤	今井重左衛門　梓行	1701	元禄 14		茶道		
761	U	傳習附録		三輪希賢	1712	正徳 2		漢学		
762 ～ 764	U	標註　傳習録	上中下	三輪希賢	1712	正徳 2		漢学		
765	U	茶經詳説	下	大典顯常	1774	安永 3		茶道		
766	U	草偃和言		会沢安	1852	嘉永 5　新鐫		有職故実		
767・768	U	鶴梁文鈔	一・二、三・四	林長孺	1867	慶応 3		文集		
769	U	星巌集		齋藤正格　撰 横野擇善夫　較訂 木内政浄清卿　較訂	1853	嘉永 6　序文		漢詩文		
770	U	紅蘭小集		張景婉道華	1841	天保 12　較刊		漢詩文		
771	U	玉池唫社詩	一集巻一之二	遠山澹雲如　編輯 竹内鵬九萬　編輯	1845	弘化 2　序文		漢詩		
772 ～ 774	U	山陽詩鈔	二～四	頼襄子成 後藤機　校	1833	天保 4　發兌		漢詩		
775	U	善謔随譯		靈松道人　□撰	1775	安永 4		戯文		
776・777	U	葛原詩話後編	上下	六如上人	1804	文化 1		漢詩文		
778	U	八分千文		蒙所先生　書法	不明	不明		不明	国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学になし	×
779	U	行書後赤壁賦		菱湖先生　書	不明	不明		書道		
780	U	蒙求標題		趙陶齋　書	不明	不明		漢学		
781	U	四體蘭亭帖		巌谷修　書	1893	明治 26		書道	裏表紙に書込あり	
782	U	東湖正氣歌　行書		小野鵬之助	1914	大正 3　再版	明治 37	漢詩？		×
783	U	草□□遊		海陽首文明　選集	1682	天和 2		不明	本に挟まれた札参照	不明

784	U	校正新版　七ついろは		不詳	不明	不明		往来物		
785	U	實語教		不詳	不明	不明		教訓		不明
786	U	長雄　春日詣　紀の道詣		□□□　書	1791	寛政 3		往来物		
787	U	文化新刻　傍訓千字文		冨田幹君貞	1805	文化２　再刻		書道		
788	U	眞書　千字文		菱湖先生　書	不明	不明		書道		
789	U	三體千字文		巻菱湖　書	1875	明治 8		書道		
790 ～ 794	U	国史纂論	一・二～九・十	山縣禎	1878	明治 11	弘化 2	史論		
795	U	慶長以來　諸家著述目錄　和學家之部		中根肅治　編	1894	明治 27		目録		×
796	U	櫻田烈士傳		締引泰	1897	明治 30		不明		×
797・798	U	頼山陽著　通議	上下	頼襄子成　　頼又二郎校訂	1882	明治 15　翻刻	明治 9	政治		
799	U	夢合判断大成		松川半山　畫圖	不明	不明		占卜		
800 ～ 802	U	山陽先生書後	上中下	頼山陽　　児玉慎　輯録	1879	明治 12		漢詩文		
803	U	山陽先生題跋		頼山陽　　児玉慎　輯録	1879	明治 12		漢詩文		
804・805	U	謫居詩存	上下	藤田東湖	不明	不明		漢詩		
806・807	U	日本復古詩	乾坤	田中内記	1870	明治 3		漢詩？		
808 ～ 810	U	服部誠一著述　東京新繁昌記	初編、二編、四編	服部誠一	1874	明治 7		地誌？		
811・812	U	樂山堂詩鈔	乾坤	金本先生	1869	明治 2	慶応 3	漢詩		
813	U	日本外史訓蒙		松嵐先生　泉石先生	1872	明治 5		不明		
814	U	密宗安心鈔		大教正釋良基	1877	明治 10		真言		
815	U	自省録		不住道人	1906	明治 39		不明		
816	U	菜根譚	乾坤	還初道人	1825	文政 8		不明	817 とは版が異なる	
817	U	菜根譚	乾坤	還初道人	1825	文政 8		不明	816 とは版が異なる	
818	U	補習科用　漢文讀本		田沼勝之助　編輯	1904	明治 37		教育		
819	U	松籟帖		安生順四郎　編輯	1892	明治 25		不明		×
820	U	家庭福音　婚姻の秘訣		池田要七	1913	大正 2		不明		×
821 ～ 824	U	竹外二十八字詩	一～三、補遺四	藤井啓士	1871	明治 4		漢詩		
825 ～ 827	U	校正　日本小史	上中下	大槻文彦	1892	明治 25	明治 18	通史		
828 ～ 836	U	藤樹全書	巻一～三、巻五～十	中江藤木先生遺稿 志村巳之助　斎藤耕三編	1893	明治 26		不明		×
837・838	U	湖山樓詩鈔	2 冊	小野長愿佃翁	1870	明治 3		漢詩	巻八迄のうち巻四迄、札参照	
839	U	教科用書　福岡縣史談		野口援太郎　林十治郎	1898	明治 31		教育・地誌？		×
840 ～ 845	U	橋本寧著　瓊矛餘滴　一名本朝蒙求	上中下、× 2 冊	橋本寧	1877	明治 10		不明		
846 ～ 848	U	橋本寧　瓊矛餘滴續編	上中下	橋本寧	1877	明治 10		不明		
849	U	垂統秘録　佐藤信淵著		椿園佐藤信淵	1878	明治 11		政治		
850 ～ 852	U	雲洞遺稿	上中下	上毛嵩井孚	1880	明治 13		不明		
853・854	U	刪修近古史談	一、二	大槻磐翁	1884	明治 17　三刻	明治 14 版権免許　明治 15 刻成　明治 17 再版	雑史		
855	U	十字□糞培例		佐藤元庵	1824	文政 7		農業		
856・857	U	漁村維持法	上下	佐藤信季　著　佐藤信渕校	1876	明治 9		水産		
858 ～ 860	U	國史畧	一～三	岩垣先生　編次　大江成美　書	1875	明治 8	元本文政 9	通史		
861・862	U	雅俗要文　作文大全	上下	福原有因	1877	明治 10		往来物		×
863・864	U	柳北奇文	上下	成島柳北　原著　西山喜内　編	1883	明治 16		不明		×
865	U	古文眞寶字引　前集		村岡孫十郎	1882	明治 15 新刻	明治 14 刻成	漢詩文		
866 ～ 870	U	草茅危言	一～五	中井竹山　著　富岡鉄斎校	1868	明治 1		政治		

871 ～ 878	U	山陽詩註　初篇	一～八	鷲石陳人　註　鋏齋漫士　増校	1869	明治 2		漢詩		
879 ～ 891	U	新版　字彙	首巻、子集～巳集、未集～亥集、巻末	鐫宣城梅誕生先生　訂字彙	不明	不明		辞書？		
892・893	U	耐軒詩草	乾坤	曽我景章子明	1860	万延 1　新刻		漢詩		
894 ～ 897	U	近世叢語	一・二～七・八	角田九華	1828	文政 11		随筆		
898 ～ 901	U	續近世叢語	一・二～七・八	角田九華	1845	弘化 2		随筆		
902 ～ 904	U	儒門語要	天、地、人	倪元垣　輯著 吉村晋　校閲	1865	慶応 1　新刻		不明		
911 ～ 913	U	蘇長公論策	上中下	丹波久米太郎　校	1870	明治 3	明治 2 官許	不明	国立国会図書館に有り	×
914 ～ 919	U	日本智嚢	巻一～六	中村和周　著 中村鼎五　校	1885	明治 18		伝記		
920 ～ 922	U	鐵楽遺稿	上下、附録	河野絢夫	1899	明治 32		不明		×
923・924	U	不折俳畫	上下	中村不折	1910	明治 43		俳諧・絵画？	国立国会図書館に有り	×
925・926	U	文法詳論	上下	石川鴻齋	1893	明治 26	明治 15 版権免許　明治 17 出版	不明		
927・928	U	纂註　和漢文格評林	乾坤	瀧川昇　編輯	1884	明治 17	明治 13 版権免許　明治 15 改題御届	不明		
929 ～ 931	U	土性辨	上中下	佐藤信景　著 佐藤信淵　増補	1873	明治 6		農業		
932	U	果物糖蔵後篇		田原陶□	1878	明治 11	明治 9 版権免許	農業？		
933 ～ 936	U	今世名家文鈔	一・二～七・八	小竹筱嵩　盾山阪井 拙堂齋藤　笛浦野田 清狂月性　編纂	不明	明治？		漢文集		
937 ～ 940	U	静園詩鈔　黄□□	巻一、巻二・三・四、巻五・六・七、巻八・九・十・十一・十二・十三・十四	勝島仙之介	1917	大正 6		漢詩文	国立国会図書館サーチ参照	×
941 ～ 945	U	好古類纂	第一集、二集、十集～十二集	好古社編纂部	1903	明治 36		不明	雑誌。非売品	×
946 ～ 951	U	好古類纂二編	第一集～三集、六集、七集	好古社編纂部	1904	明治 37		不明	雑誌。非売品	×
951 ～ 958	U	好古類纂三編	第二集～五集、八集、九集、十一集、十二集	好古社編纂部	1906	明治 39		不明	雑誌。非売品	×
959・960	U	國朝諫諍錄	乾坤	藤井理定	1688	貞享 5		伝記		
961・962	U	本朝孝子傳	上中	伊藤子勝　蔵	1684	天和 4　序文		伝記	見返に書込あり	
963・964	U	増訂　習文録甲乙判	上下	皆川愿伯□	1811	文化 8		漢詩文		
965・966	U	西涯舘詩集	乾坤	近藤篤子業父　撰 江雛福仲黑　校	1796	寛政 8　序文		漢詩		
967	U	諸葛孔明傳		田寛仁甫	1827	文政 10		伝記		
968 ～ 971	U	金華先生文集刪	一、二・三、四、五・六	平玄中子和	1731	享保 16		漢詩文		
972・973	U	讀史雜詠	乾坤	青山延壽季卿	1866	慶応 2		漢詩	並付録一冊欠と札に有り	
974 ～ 976	U	帆足先生文集	一～三	岡松辰　撰	1847	弘化 4　序文		漢詩文		

977 ～ 979	U	世範校本	上中下	片山信成　校	1853	嘉永 6		教訓？	980 ～ 982 とは見開きが異なる。版は同じ	
980 ～ 982	U	世範校本	上中下	片山信成　校	1853	嘉永 6		教訓？	977 ～ 979 とは見開きが異なる。版は同じ	
983・984	U	京華要誌	2 冊	内貴甚三郎	1895	明治 28		不明		×
985	U	京華要誌附録		内貴甚三郎	1895	明治 28		不明		×
986 ～ 990	U	農家備要　前編	一～五	河野大人	1870	明治 3　發兌		農業		
991 ～ 996	U	文章軌範講解	一～六	森立之	1881	明治 14	明治 9　版権免許 明治 11　出版 明治 14　再版御届	漢学		×
997	U	韻府一隅　上平聲　下平聲		呉趨顔麓莊　輯	1814	文化 11		辞書？		×
998	U	韻府一隅　上聲　去聲　入聲		呉趨顔麓莊　輯	1814	文化 11		辞書？		×
999・1000	U	詩韻含英異同辨	三、四	勝村治右衛門	1878	明治 11　出版	明治 9　版権免許 明治 11　再版御届	漢詩？		
1001	U	都繁昌記		因果道士	1867	慶応 3		地誌		
1002	U	文久廿六家絶句	上	石樵藤堂駿　書	1862	文久 2		漢詩		
1003 ～ 1005	U	評偶　今體名家文抄	一、二・三、四・五	土居光華　編選	1877	明治 10		思想		
1006 ～ 1012	U	増補　日本政記　再刻	一～六、八	頼久太郎	1886	明治 19	明治 9　版権免許 明治 9　製本改式御届 明治 16　出版 明治 19　再版御届	通史		
1013	U	東山先生嵯峨稿		力□光公暉	1786	天明 6		漢詩文		
1014 ～ 1017	U	五山堂詩話	一・二、五・六～九・十	槑菴居士	1807	文化 4		漢詩文		
1018	U	武士訓	三四五	蟠龍子記	1721	享保 6		教訓	巻末に「天保七年丙申中夏　真鍋氏　源正金」書込	
1019 ～ 1024	U	熊耳先生文集　正編	一・二～七・八、十三・十四、十五・十六	唐津文学餘承裕子綽	1781	天明 1		漢詩文		
1025	U	訓蒙　窮理圖解		福澤諭吉	1873	明治 6　改正再刻	明治 1	物理	巻末に書込あり	
1026	U	不明		不詳	不明	不明		不明	写本。題箋なし。本に挟まれた紙に「歌集」とあり	不明
1027	U	啓蒙　智慧之環		於菟子　譯述	1873	明治 6　再刻	明治 5　新雕	教育	題箋なし	
1028・1029	U	國史畧	四、五	岩垣松苗　編	1884	明治 17　刻成發兌	文政 8　原刻 明治 8　版権免許 明治 12　再版御届同刻成 明治 14　再版御届 明治 14　刻成發兌 明治 17　再版御届	通史		
1030 ～ 1032	U	箋註蒙求校本　反刻	中（×2 冊）、下	岡白駒　箋註	1880	明治 13　刻成		漢学		
1033・1034	U	蒙求	中下	不詳	1649	慶安 2		漢学		
1035	U	大東世語		静齋　蔵刊	1750	寛延 3		伝記		
1036	U	新板心經鈔		中野小左衛門	1649	慶安 2		不明	古典籍総合目録にあるものと同じか不明	不明
1037	U	正學指掌		二洲尾藤	1787	天明 7　開彫		漢学	題箋なし	
1038	U	校訂　忠經集註		五十川左武郎	1882	明治 15　刻成		漢学	裏表紙に書込あり	
1039・1040	U	茶道早合點	上下	珍阿　撰	1805	文化 2		茶道	図入り	
1041 ～ 1043	U	陳龍川文鈔	一、三、四	訥□大橋先生　校訂	1859	安政 6　序文		漢詩文		
1044 ～ 1048	U	七荘　利休茶湯書	一～四、六	不詳	1680	延宝 8　板行		茶道		
1049	U	慨士遺音		吉田松陰	不明	不明		漢文		
1050	U	武門要鑑抄　一騎伝	巻五六七	不詳	不明	不明		兵法	写本。題箋なし。表紙に絵あり。裏表紙に「尾道屋　茂□八」書込。巻末に書込あり。本文末に「□□□熊吉」書込	

1051 ～ 1053	U	近事紀略	二～四	石津發三郎	1873	明治 6　官許開版		不明	一巻なし	
1054	U	日本外史字引		野呂公敏　編集	1873	明治 6　新鐫		通史		
1055 ～ 1063	U	日本外史	四～十二	頼久太郎	1883	明治 16		通史	巻一～巻三なし。虫害酷く本開けず。著者年代不明。本に挟まれた札参照	
1064 ～ 1067	U	山陽遺稿　文	一～四	頼襄子成	1879	明治 12　重鐫		漢詩文		
1068 ～ 1071	U	貝原養生訓	一・二～七・八	貝原篤信　編録	1812	文化 9　補刻發兌		教訓		
1072 ～ 1077	U	養生訓	一、三～七	貝原篤信　編録	不明	不明		教訓	題箋なし。	
1078	U	春臺先生文集　序目		宮田明　書	1752	宝暦 2		漢詩文	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1079 ～ 1081	U	春臺先生文集　前稿	一・二、三、四・五	宮田明　書	1752	宝暦 2		漢詩文	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1082 ～ 1088	U	春臺先生文集　後稿　初編	一・二～九・十、十三・十四、十五・附録	植村正直　書	1752	宝暦 2		漢詩文	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1089	U	明七子尺牘	坤	震東顧起元　彙選	1747	延享 4		書簡		
1090	U	池坊生花集		龍松齋華芸	1909	明治 42		花道		×
1091	U	龍艸廬先生集	一至五	龍元二郎	1753	宝暦 3		漢詩文	写本。本に挟まれた札なし。巻末「真行寺蔵書」書込あり	
1092	U	大學或問	上	熊澤了介	1788	天明 8　序文		政治		
1093	U	生駒山人詩集	三	孔文雄世傑	不明	不明		漢詩？		
1094 ～ 1103	U	校正改刻　世説新語補	一・二～十九・二十	山琥允明	1779	安永 8		漢学	著者不明。本に挟まれた札参照	
1104	U	新刻　瓶花容導集	乾	西原善治	不明	不明		花道	乾のみ。虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1105・1106	V 左	厳島參詣膝栗毛	上下	十返舎一九	不明			滑稽本	本に挟まれた札に「初版本」の記載有り。裏表紙に「第 29 号　南海散士」書込。表紙に印「伊藤泣情　第 25 号」	
1107	V 左	厳島神社寶物一覧		井口謙造　編	1903	明治 36	明治 11	神社？		×
1108	V 左	厳島名所の志るべ		所信文	1897	明治 30		地誌？		×
1109 ～ 1116	V 左	制度通	一・二、三・四、五、六・七、八・九、十、十一、十二・十三	伊藤長胤	1796	寛政 8	享保 9	制度		
1117 ～ 1119	V 左	再板　和歌題林愚抄	夏、冬、雑上	不詳	不明			歌学		
1120	V 左	変態社會史		武藤直治	1926	大正 15		不明		×
1121	V 左	變態傳説史		藤澤衛彦	1926	大正 15		不明		×
1122	V 左	變態藝術史		村山知義	1926	大正 15		不明		×
1123	V 左	変態廣告史		伊藤竹□	1927	昭和 2		不明		×
1124	V 左	變態見世物史		藤澤衛彦	1927	昭和 2		不明		×
1125	V 左	變態作家史		井東　憲	1926	大正 15		不明		×
1126	V 左	変態人情史		井東　憲	1926	大正 15		不明		×
1127	V 左	変態仇討史		梅原北明	1927	昭和 2		不明		×
1128	V 左	新撰　狂歌五十人一首		六樹園飯盛　撰 六極園南北　集 拱齋北溪　画	1819	文政 2　発行		狂歌		
1129	V 左	天野八郎著述　上野戦争實記	乾坤	天野八郎	1875	明治 8		実録		
1131 ～ 1154	V 左	岩見武勇傳	一～廿四	山村東寿軒	1845	弘化 2		合巻	写本　本文冒頭「讃陽飯山麓資本所博多堂」印	
1155・1156	V 左	浄瑠璃圖會　葛飾北齋翁筆	乾坤	葛飾北齋　筆	1901	明治 34　再版	明治 24	絵画	粘葉装	
1157 ～ 1163	V 左	尾張名所圖會　前編	一～七	春江小田切忠近　絵画 岡田啓 梅居野口道直	1844	天保 15　発行	天保 12　□稿	地誌		

1164 ～ 1172	V 左	尾張廼家苞	一之上、一之下、二之上、二之下、三、四之上、四之下、五之上、五之下	石原正明	1819	文政 2		和歌　注釈		
1173	V 左	校定　水鏡		萩野由之　編纂 松井簡治　編纂 關根正直　編纂	1898	明治 31		歴史物語		
1174・1175	V 左	大鏡	一、二	久米幹文　校訂	1891	明治 24		歴史物語		
1176	V 左	浅瀬のしるべ		本居太平	1812	文化 9		国学？	写本。本に挟まれた札参照。	不明
1177・1178	V 左	和語除隲文繪鈔	2 冊	葛飾戴斗　書画	1843	天保 14　鐫		漢学		
1179 ～ 1184	V 左	平家物語講義　今泉定介講述	一～六	今泉定介　講述	1902	明治 35　第五版	明治 32	軍記物語？		×
1185 ～ 1188	V 左	標註　參考源平盛衰記	一～四	近藤瓶城　標註	1898	明治 31		軍記物語　考証		
1189 ～ 1190	V 左	赤穂義人録	乾坤	鳩巣室	1868	明治 1		実録	巻末に「持□□□□良」書込。年代不明。本に挟まれた札参照	
1191・1192	V 左	紀文大盡傳画入写本	上下	不詳	不明	不明		不明	絵入写本。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学になし。	×
1193 ～ 1209	V 左	大江伝記　鎌倉見聞志	17 冊	上田東雲　序	1774	安永 3		不明	写本。本文頭に「芝金」印。本に挟まれた札参照。札に「10 代家治将軍」書込	
1210 ～ 1214	V 左	假名手本　後日の文章	巻之一～五	立川談洲樓焉馬	1808	文化 5		読本		
1215	V 左	翻刻　讀史論略評注		竿齋石阪先生　閲	1825	文政 8　發兌		不明		
1216・1217	V 左	梧窓漫筆　三編	上下	大田錦城	1840	天保 11　新鐫		随筆		
1218・1219	V 左	梧窓漫筆　後編	上下	大田錦城	1840	天保 11　新鐫		随筆		
1220 ～ 1227	V 左	南木誌	一～八	斉藤馨識	1850	嘉永 3		家伝		
1228	V 左	楠家傳七巻書	自一至七	不詳	1682	天和 2		兵法	巻末に「吉田性」書込あり	
1229 ～ 1233	V 左	島津琉球軍精記	一・二・三・四・五・六、七・八・九・十・十一・十二、十三・十四・十五、十六・十七・十八、不明、廿五・廿六・廿七・廿八、廿九、三十	不詳	不明	不明		戦記	写本。見返に筆書きによる英語筆記体の書込あり。	
1234・1235	V 左	清水物語	上下	不詳	1638	寛永 15　開之		仮名草子	巻末に書込あり。住所と人名か	
1236 ～ 1239	V 左	讀書録	一・二、三・四、五・六・七、八・九・十一	南京禮部侍郎呂□　撰	1596	萬暦 24		漢学？	見返に書き込みあり。裏表紙なし。	×
1240 ～ 1242	V 左	多波礼具左	上中下	雨芳州	1789	寛政 1　発行		随筆	本に挟まれた札に「珍本（趙泰億）」とある。印「天堅快道印章」	
1243	V 左	古今名家略傳		山崎美成	1841	天保 12		伝記	年代不明。本に挟まれた札参照	
1244 ～ 1246	V 左	吾愛吾廬詩	第一稿～三稿	小田園主人	1866	慶応 2		漢詩文		
1247 ～ 1250	V 左	開宗直解　鼇頭七書	一、三～五	江陵張居正泰嶽父　輯著	不明	不明		兵法		
1251 ～ 1256	V 左	前太平記圖會	一～六	秋里籬島	1803	享和 3		読本		

1257 ～ 1265	V 左	日本外史補	一、二・三、四・五、六、七、八・九、十、十一、十二、十三・十四	岡田僑　撰	1850	嘉永 3　自序		通史		
1266 ～ 1277	V 左	繪本太閤記	一～十二	法橋玉山　畫作	1917	大正 6		読本		
1278 ～ 1282	V 左	忠魂遺香	國風、詩、遺言一～三	竹内昌矩　編纂	1893	明治 26　訂正	明治 24　脱稿	不明	写本。表紙裏に「竹内外山藏書」印。しおりの貼付、書込多し。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学になし。	×
1283 ～ 1285	V 左	伊香保志	巻一、巻二、巻三・四	大月栖霞	1882	明治 15		不明		
1286	V 左	洗心洞箚記　大塩中斎　著		大塩中齋	1907	明治 40		漢学		
1287・1288	V 左	洗心洞箚記	上下	大塩中齋	1930	昭和 5	天保 6	漢学		
1289	V 左	洗心洞箚記附録抄		大塩中齋	1930	昭和 5	天保 6	漢学	洗心洞文庫から□□治宛ての葉書 2 通（昭和 5）が挟まっている	
1290 ～ 1294	V 左	海岸備要	一～五	本木正□子光　譯解 布川通璞弦五　校正	1852	嘉永 5	嘉永 3	海防 砲術		
1295 ～ 1297	V 左	徴古新論	一～三	岡吉胤	1899	明治 32		国学？	写本	
1298	V 左	天地組織之原理問答		不詳	不明	不明		不明	写本	×
1299	V 左	考証　井上頼文		井上頼文	不明	不明		不明	写本	×
1300	V 左	幽魂　第三回第一問ノ答辨二付属		阿曇宿□　元胤	1859	安政 6		不明	写本	×
1301 ～ 1308	V 左	再撰　花洛名勝圖會　東山之部	一～八	晴翁木村明啓　編者 半山粟川安信　図画	1864	元治 1		地誌		
1309・1310	V 左	哥ひいなかた	× 2 冊	洛揚北　柏□軒	1688	貞享 5		不明	本に挟まれた札参照。札に書かれた作者名は柏□軒。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学になし。	×
1311	V 左	按異首書　土佐日記		市岡翁	1820	文政 3		紀行		
1312・1313	V 左	いせもの語	上下	不詳	不明	不明		物語	写本	不明
1314	V 左	名所三百首和歌			1833	天保 4 ？		和歌	写本	
1315・1316	V 左	竹園松田彦六　画 豊前　耶馬渓眞景畫帖	上下		1892	明治 25		不明	国立国会図書館にあり。	×
1317 ～ 1323	V 左	續翁問答	一～七	江西漁叟足立氏述	1728	享保 13		教訓？	本に挟まれた札参照	
1324 ～ 1330	V 左	幼學綱要	一～七	元田永孚	1883	明治 16	明治 14	教育		
1331 ～ 1345	V 左	繪本三國妖婦傳	一～十五	不詳	1805	中巻享和　下巻文化 2		読本	年代不明。本に挟まれた札参照	
1346 ～ 1350	V 左	江戸繁昌記	一～五	静軒居士	1831	天保 2		地誌	写本	
1351・1352	V 左	美術淵源　大和周遊誌	上下	鳥居武平	1898	明治 31		地誌？		×
1353 ～ 1364	V 左	繪本甲越軍記三編	一～十二	速水春暁齋	1825	文政 8　發跋		読本		
1365 ～ 1384	V 左	栄花物語	一～廿	不詳	不明	不明		歴史物語		
1385 ～ 1389	V 左	國史畧	一～五	岩垣杉苗	1880	明治 13　刻成發兌	文政 9　刻成 明治 8　版権免許 明治 11　再版御届 明治 13　再版御届	通史		
1390 ～ 1396	V 左	本稿　国史眼	一～七	重野安繹 久米邦武 星野恒	1890	明治 23		通史？		
1397	V 左	校訂　仮名文字遣		三条西殿　奥書	不明	不明		語学	巻末に書込あり。著者不明。本に挟まれた札参照	
1398	V 左	撫箏雅譜集　松竹梅　越後獅子等		不詳	不明	不明		楽器？	写本。著者年代不明。題箋ないため、題を本に挟まれた札参照。	×
1399	V 左	撫箏雅譜集　松竹梅　越後獅子等		不詳	不明	不明		楽器？	写本。著者年代不明。題箋ないため、題を本に挟まれた札参照	×

1400 ～ 1411	V 左	繪本甲越軍記弐編	一～十二	速水春暁齋　画	1813	文化 10		読本		
1412 ～ 1424	V 左	増補　合類大節用集　乾坤　再版	一～五、六上、六下、七、八上、八下、九上、九下、十	駒谷散人槇郁　輯	1766	明和 3　再版	享保 2	辞書 節用集		
1425 ～ 1429	V 左	國史畧	一～五	岩垣松苗　編	1826	文政 9　刻成		通史		
1430 ～ 1439	V 左	貞観政要	一～十	山本元恒	1823	文政 6　發兌		法制		
1440 ～ 1447	V 左	書經講義	一～八	申時行	1674	延宝 2		漢学		
1448	V 左	通語		水哉館　遺編	1842	天保 13　序文		通史		不明
1449 ～ 1451	V 左	校正　通議	上中下	頼襄子成	不明	不明		政治		
1452 ～ 1454	V 左	名節録	一～三	岡田僑　識	1866	慶応 2　新鐫		伝記		
1455・1456	V 左	下學邇言　論政	上下	會澤安	不明	不明		漢学		
1457	V 左	下學邇言　論時		會澤安	不明	不明		漢学		
1458	V 左	中興源記		牛窪弥五兵衛景春	1787	天明 7　写之	天明 3　書之	伝記 兵法	写本。巻末に「天明三卯四月書之　牛窪弥五兵衛景春　天明七未八月写之　蘆澤平馬元徹」とある	
1459 ～ 1466	V 左	文藝類纂　字志上	巻一～巻八	榊原芳野　編	1878	明治 11		辞書		
1467	V 左	嘉永六年癸丑　北亜美理駕船四艘□来之事　諸家届□写		不詳	1853	嘉永 6		不明	写本。戸田伊豆守の名などが文中に見られる	不明
1468 ～ 1471	V 左	古文眞寶	4 冊	不詳	1712	正徳 2　板行		漢詩文	題箋なし。文中書き込み多数	
1472 ～ 1478	V 左	標記増補　十八史畧	一～七	源松苗　撰	1839	天保 10　再刻成		漢学・外国史？		
1479 ～ 1485	V 左	増評讀本　十八史畧	一～七	平田宗城　補訂 増田貢　増評	1876	明治 9　版権免許		漢学・外国史？		
1486・1487	V 左	古文眞寶	乾坤	不詳	1670	寛文 10　板行		漢詩文		條
1488 ～ 1491	V 左	新刻改正　孟子　後藤點	一～四	朱熹　集註	1794	寛政 6　發兌	寛政 4　御免上梓	漢学		
1492 ～ 1503	V 左	繪本烈戦功記	一～十二	小澤東陽	1852	嘉永 5		読本		
1504 ～ 1515	V 左	繪本烈戦功記　後編	一～十二	小澤東陽	1855	安政 2		読本		
1516 ～ 1520	V 左	繪本忠孝美善録　前編	一～五	東籬亭菊人　編 春暁齋政信　画	1828	文政 11　鐫		読本		
1521 ～ 1525	V 左	繪本忠孝美善録　後編	一～五	東籬亭菊人　編 春暁齋政信　画	1828	文政 11　鐫		読本		
1526 ～ 1539	V 左	汪份増訂　四書大全	一～十四	吉村晉　點	1853	嘉永 6		漢学	年代不明。本に挟まれた札参照	
1540 ～ 1547	V 左	日本政記	一～八	頼襄子成	不明	不明		通史		
1548	V 左	先哲叢談　序目年表		東條耕	1827	文政 10　序文		伝記		
1549 ～ 1556	V 左	先哲叢談	一・二～七・八、×2 冊	原念齋	1816	文化 13　新鐫		伝記		
1557 ～ 1560	V 左	先哲叢談後編	一・二～七・八	東條耕	1816	文化 13　新鐫		伝記		
1561 ～ 1566	V 左	先哲叢談続編	一～六	東條琴臺	1884	明治 17　出版	明治 14　版権免許	伝記		
1567 ～ 1571	V 左	黄葉夕陽村舍詩	一～四、附録五	菅茶山	1847	弘化 4		漢詩文	表紙に「復陽堂森姓」書込。裏表紙に「明治 17 年甲申晩春調」書込	
1572 ～ 1575	V 左	黄葉夕陽村舍詩　後編	一～四	菅茶山	1823	文政 6		漢詩文	表紙に「復陽堂森氏と」書込	
1576 ～ 1579	V 左	黄葉夕陽村舍詩　遺稿	一～四	菅茶山	1823	文政 6		漢詩文	表紙に「復陽堂森氏と」書込	
1580 ～ 1595	V 左	日本政記　神武至仁徳	一～十六	頼襄子成	不明	不明		通史		
1596	V 左	四時遊観　花筐第四編	下	松亭金水　編次	不明	不明		人情本		
1597	V 左	花筐拾遺　湊の月後編	中	松亭金水　編次	不明	不明		人情本		
1598 ～ 1600	V 左	武林見聞筆記	一～三	不詳	不明	不明		不明	写本。本に挟まれた札に「関ヶ原戦の頃」書込み。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学になし	×

1601	V 左	道二翁道話二篇	上	八宮齋　輯	1796	寛政 8　發行		心学		
1602	V 左	道二翁道話三篇	上	八宮齋　輯	1800	寛政 12　發行		心学		
1603	V 左	道二翁道話四篇	下	八宮齋　輯	1802	享和 2　發行		心学	題箋なし	
1604	V 左	道二翁道話五篇		八宮齋　輯	1804	文化 1		心学		
1605 ～ 1606	V 左	遠羅天釜	上中、続集下	不詳	1785	天明 5　求之		臨済		
1607	V 左	遠羅天釜續集	下	不詳	1785	天明 5　求之		臨済		
1608 ～ 1610	V 左	吉良義風鈔譯　上記鈔譯　歴史部自第一綴至第十綴	一～三	吉良義風　鈔譯	1877	明治 10		不明		
1611 ～ 1615	V 左	三省錄	一～五	志賀理助	1843	天保 14　官許		教訓		
1616 ～ 1618	V 左	折たく柴の記	天、地、人	新井君美	1716	正德 6		随筆	写本	
1619	V 左	新作 12 番　小説		山田美妙齋	1890	明治 23		小説？		×
1620	V 左	新作 12 番　小説		依田百川	1891	明治 24		小説？		×
1621	V 左	新作 12 番　小説		尾崎紅葉	1890	明治 23		小説？		×
1622	V 左	新作 12 番　小説		幸堂得知	1891	明治 24		小説？		×
1623	V 左	新作 12 番　小説		岡本昆石	不明	不明		小説？		×
1624	V 左	新作 12 番　小説		前田香雪	1891	明治 24		小説？		×
1625	V 左	新作 12 番　小説		南新二	1890	明治 23		小説？		×
1626	V 左	新作 12 番　小説		響庭篁村	1890	明治 23		小説？		×
1627	V 左	新作 12 番　小説		宮寄三昧	1890	明治 23		小説？		×
1628	V 左	南郭先生文筌小言		鳥石□君嶽	1734	享保 19		語学	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1629	V 左	作文初問		不詳	1755	宝暦 5		漢文	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1630	V 左	古文矩附文変		荻生徂徠	1764	明和 1		漢詩文	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1631	V 左	聖学問答辨		久田先生	1791	寛政 3		漢学	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1632・1633	V 左	三教指歸刪補鈔	天、地	梅國泰音	1707	宝永 4		真言		
1634・1635	V 左	陸放翁詩鈔	2 冊	周之鱗雪蒼　□撰　紫升錦川　□撰	1801	享和 1　新鐫		漢詩文		
1636 ～ 1641	V 左	義公黄門仁德録	初編上中下、後篇上中下	藤田安次郎	1854	安政 1		実録	写本。虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1642 ～ 1653	V 左	外科必読	一～十二	箕作阮甫	不明	不明		医学	写本。本に挟まれた札参照。年代不明	
1654 ～ 1656	V 左	安政見聞録	上中下	晁蘆漁夫	1856	安政 3　發行		見聞記		
1657	V 左	方丈記捷解		井上喜文	1894	明治 27		注釈？	文中に鉛筆での書き込みあり。	×
1658	V 左	白石詩草		三野知彰　書写	1797	寛政 9		漢詩	写本。本に挟まれた札に「京松玉藻城外ニテ写ス　三野知彰」と書き込みあり	
1659 ～ 1661	V 左	安政見聞誌	上中下	不詳	不明	不明		実録	本に挟まれた札に「一鶯齋国周画」書込あり	
1662	V 左	鎌倉江の島紀行　熱海乃草むら	上	不詳	不明	不明		紀行？	写本。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学になし。	×
1663	V 左	熱海紀行　熱海乃草むら	下	不詳	不明	不明		紀行	写本。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学・日本古典籍総合目録で検索を行ったが記載なし。分野を紀行にしてよいか不明	×
1664 ～ 1669	V 左	天草軍記	壱～六	田丸佐右ヱ門源具　序	1637	寛永 14		戦記？	写本。虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照。	
1670 ～ 1680	V 左	経濟録	一～四、五上、五下、六～十	東都處士	1729	享保 14		政治	写本	

1681 ～ 1700	V 左	勢免天話草	一～二十	不詳	不明	不明		伝記	写本	
1701 ～ 1712	V 左	紀伊國名所圖會　和歌山部	一巻上、一下、二、三上、三下、不明、不明、三編二巻、同三、同四上、同五、同六	法橋中和　画工 小野廣隆　画工 上田公長　画工 池田東籬亭　筆耕 部關牛　筆耕	1838	天保 9　發行	天保 6　官輸上淮	地誌	見返に「明治三十三年三月求之 □□傳治」書込。巻末に印「本家松尾金尾屋　斤原町」	
1713・1714	V 左	日新館童子訓	上下	古南　謹識	1803	享和 3		教訓		
1715	V 左	古事辨疑		不詳	不明	不明		不明	問答が交互に記される。傳治によるものか	×
1716 ～ 1720	V 左	海國兵談	5 冊	林子平	1786	天明 6		海防政治	写本。虫害酷く題箋読み取れず	
1721	V 左	厭□太平楽記		長曾我部	1862	文久 2		戦記	写本。著者年代不明。本に挟まれた札参照。表紙に「□讃海老屋持」と題箋あり。三冊合巻。	
1722 ～ 1724	V 左	都鄙問答	元、亨、利	山村半右ヱ門	1739	元文 4		心学	虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	
1725 ～ 1729	V 左	百姓嚢	一～五	不詳	1731	享保 16　出来		教訓		
1730 ～ 1740	V 左	太閤眞顕記	11 冊	不詳	不明	不明		実録	写本。虫害酷く題箋読めず。本開けず。本に挟まれた札に「1 巻～130 巻」書込	
1741 ～ 1746	V 左	東海道名所圖會	一～六	秋里籬嶌	1797	寛政 9		地誌	見返しに「明治三十三年三月求之　□□傳治」の書き込みあり。紙背文書あり。巻末に印「本家松尾金尾屋　斤原町」	
1747 ～ 1796	V 左	赤穂精義内侍所	前篇一～二十五、後篇一～二十五	不詳	不明	不明		実録	写本。虫害酷く本開けず。本に挟まれた札に「明治 35 年求之　写本伝本」書込あり。巻末に「明治 35 年」「紫舟」書込	
1797	V 右	明治新刷　廣集玉篇大全		鈴木音彦　編纂	1898	明治 31　訂正再版		辞書		×
1798	V 右	新増　明治玉篇大全		吉井節　編輯	1890	明治 23		辞書		
1799 ～ 1814	V 右	纂評唐宋八大家文讀本	一、二・三、四・五、六、七・八～廿九・三十	井上揆　纂輯	1879	明治 12　出版	明治 11　版権免許	漢学？		
1815 ～ 1817	V 右	授時暦註　循環暦	巻之一～三	小泉松卓　撰	1712	正徳 2　改□		暦		
1818	V 右	近世史略　再刻		青木東園　書	1875	明治 8		歴史	写本	
1819	V 右	近世史略	二編	青木東園　書	1875	明治 8		歴史	写本	
1820 ～ 1823	V 右	天経補衍　天學指要	元、利、亨、貞	西村遠里	1776	安永 5		天文		
1824 ～ 1828	V 右	博覽古言	一・二～九・十	管相公　編輯	1785	天明 5　補刻発行		教育		
1829 ～ 1838	V 右	皇朝史略	一・二、三～八、九・十、十一、十二	青山延于	1826	文政 9		通史		
1839 ～ 1841	V 右	四聲和訓　日本大字典	上中下	片岡義助	1893	明治 26　再版発行		辞書		×
1842	V 右	國號考		本居宣長	1787	天明 7　発行		国学		
1843 ～ 1862	V 右	校定音訓　小學	1 ～ 4、各 5 冊	佐藤一齋	1864	元治 1		漢学		
1863 ～ 1865	V 右	正文章軌範評林註釋	一～三	宗謝枋得	1886	明治 19		漢学	年代不明。本に挟まれた札参照	
1866 ～ 1868	V 右	続正文章軌範評林註釋	一～三	宗謝枋得	1886	明治 19　出版	明治 17　版権免許	漢学		×
1869 ～ 1874	V 右	宋名臣言行錄　前集自一至二	一～六	宋朱晦菴	1843	天保 14	寛文 7	伝記		
1875	V 右	唐詩解頤		菅原世長	1776	安永 5		漢詩	題箋なし。年代不明。本に挟まれた札を参照し年代・著者名を記入	
1876 ～ 1879	V 右	四書國字辨　孟子	一～四	平安棹湖	1794	寛政 6		漢学	年代不明。本に挟まれた札参照	
1880	V 右	四書國字辨　大学	一	平安棹湖	1794	寛政 6		漢学	年代不明。本に挟まれた札参照	
1881 ～ 1894	V 右	文選正文　山子點	序、一～十二	梁昭明太子　撰	1850	嘉永 3　三刻	天明 4　元刻 文政 11　再刻	漢学	見返に「三刻」	
1894	V 右	孝経五種		杉浦親之助　編纂	1925	大正 14		漢学	非売品	×

1895 ～ 1904	V 右	繪圖第五才子奇書	一～十	奥海書荘石印	1906	明治 39　清 32		不明	国立国会図書館、早稲田大学、西尾市岩瀬文庫になし。本に挟まれた札に「M39、清 32 年、光緒（1906 年）」とあり。	×
1905 ～ 1907	V 右	文章軌範纂評	一～三	謝枋得　編次 安藤太郎　纂評	1878	明治 11	明治 9　版権免許 明治 11 再版改式御届	漢学	包装に「宗家　□□　之蔵」書込り	
1908 ～ 1910	V 右	続文章軌範纂評	一～三	謝枋得　編次 安藤太郎　纂評	1878	明治 11	明治 9　版権免許 明治 11 再版改式御届	漢学	包装に「宗家　□□　之蔵」書込り	
1911 ～ 1920	V 右	圓機活法	× 10 冊	鳳洲王世貞　増校 益軒唐謙　上梓	不明	不明		漢詩・辞書？		
1921 ～ 1923	V 右	唐詩選國字解	一・二～五・六	南郭先生　辨	1814	文化 11　再板	天明 2　開板	漢詩	巻末に「大正十一年夏五月新調焉　鳴謙堂□蔵」書込	
1924	V 右	唐詩選國字解		南郭先生　辨	1814	文化 11　再板	天明 2　開板	漢詩	巻末に「大正十一年夏五月新調焉　鳴謙堂□蔵」書込	
1925 ～ 1928	V 右	唐宋卅六名家文鈔	一～四	藤澤南岳　閲	1880	明治 13		漢文		
1929	V 右	JAPANESE EXHIBITION CATALOGUE"		不詳	不明	不明		目録？	絵入彩色あり。全文英語。日本の名所文化の紹介など	
1930	V 右	美術工藝ひひなかた	第一	高木源四郎　編輯	1899	明治 32　印刷発行	明治 31　内務省認可	美術 工芸	絵入彩色あり。工芸品の図案等が書かれる。毎月前金振込みにより入手できたようだ	
1931 ～ 1934	V 右	孟子	一～四	不詳	1773	安永 2		漢学	本に挟まれた札に「10 代家治将軍」とあり。	
1935 ～ 1944	V 右	詩經示蒙句解	一～十	阿陽後學増田謙之益夫	1780	安永 9　求板		漢学		
1945 ～ 1960	V 右	唐宋八家文讀本	一～十六	後学沈德潜確士　編次	1750	乾隆 15		漢学？	年代不明。本に挟まれた札参照。題箋なし。	
1961	V 右	五經圖彙	中	松本愚山　編纂	不明	不明		漢学	絵入。中のみ	
1962・1963	V 右	小學　内扁	亨、元	陳選　句讀	1883	明治 16		漢学	本に挟まれた札に「吉田寛治郎所有の書あり」とあり。裏表紙に「吉田寛治郎　□之」書込あり	
1964・1965	V 右	新刻校正　小學句讀　外篇	利、貞	陳選　句讀	1883	明治 16		漢学	年代不明。本に挟まれた札参照	
1966	V 右	古本大學		陽明先生　撰	不明	不明		漢学	本文中に朱筆書込あり。裏表紙に紙を 2cm× 4.5cmに切り抜いた跡あり。	
1967	V 右	林家正本再刻　改正　四書集註		芝山後藤先生　定本	不明	不明		漢学	裏表紙に「西谷斎右衛門」書込あり	
1968 ～ 1977	V 右	冠辞考	一～十	上田秋成　撰	1864	元治 1	寛政 7　再刻	語学		
1978 ～ 1983	V 右	冠辞続貂	一～六	上田秋成　撰	1864	元治 1	寛政 7　再刻	語学		
1984・1985	V 右	鬼神論	上下冊	源君美	1800	寛政 12		神祇		
1986・1987	V 右	王學提綱	乾坤	吉邨晉　輯録	1864	元治 1		儒学		
1988 ～ 1990	V 右	箋注蒙求　再版	上中下	龍洲先生　輯	1832	天保 3　再版	明和 4　寛政 4	漢学		
1991 ～ 1992	V 右	靖獻遺言	一－四、五・六、七・八	浅見安正	不明	不明		漢学	表紙裏に「石井氏」書込。著者は本に挟まれた札参照	
1994	V 右	孝經餘師		吉田屋文三郎	1842	天保 13　新刻		漢学		
1995 ～ 1997	V 右	増補孝經彙註	上中下	明仁和江元□　刪輯	1835	天保 6		漢学	裏表紙に「矢野氏」書込	
1998 ～ 2000	V 右	増補孝經彙註	上中下	明仁和江元□　刪輯	1835	天保 6		漢学		
2001	V 右	孝經		不詳	不明	不明		漢学	表紙裏・裏表紙に書込あり	
2002	V 右	標註増補　古文孝經		鵜飼静磨　編	1883	明治 16　出版	明治 15　版権免許	漢学	表紙・裏表紙に書込あり	
2003	V 右	環堵室蔵　冢註孝經		冢田多門	1778	安永 7		漢学		
2004	V 右	重刻古文孝經		紫芝園　蔵版	1794	寛政 6　再板	享保 17	漢学		
2005・2006	V 右	校正訓點　詩經	上下	増田春耕	1876	明治 9　版権免許	化 9　原刻 嘉永 1　再刻 慶應 3　三刻成	漢学	校正訓点のｾｯﾄ	

2007・2008	V 右	校正訓點　書經	上下	増田春耕	1876	明治 9　版権免許	文化 9　原刻 嘉永 1　再刻 慶應 3　三刻成	漢学	校正訓点のセット	
2009・2010	V 右	校正訓點　易經	上下	増田春耕	1876	明治 9　版権免許	文化 9　原刻 嘉永 1　再刻 慶應 3　三刻成	漢学	校正訓点のセット	
2011 ～ 2014	V 右	校正訓點　禮記	一～四	増田春耕	1876	明治 9　版権免許	文化 9　原刻 嘉永 1　再刻 慶應 3　三刻成	漢学	校正訓点のセット	
2015	V 右	校正訓點　春秋		増田春耕	1876	明治 9　版権免許	文化 9　原刻 嘉永 1　再刻 慶應 3　三刻成	漢学	校正訓点のセット、表紙裏に書込有り	
2016 ～ 2019	V 右	東萊博議	天、地、玄、黄	呂祖謙伯恭　撰	1799	寛政 11		漢学		
2020	V 右	當世武勇傳		花陽楼国貞 画	不明			絵画	早稲田大学図書館にある	×
2021 ～ 2024	V 右	新版大字　孟子	一～四	朱熹　集註	1719	享保 4		漢学	一の裏表紙に「吉田寛一」書込	
2025 ～ 2029	V 右	孔子家語	一・二～九・十	王肅　註	1638	寛永 15		漢学		
2030 ～ 2032	V 右	箋注蒙求	上中下	岡白駒　箋註	1767	明和 4		漢学	表、裏表紙に書き込みあり	
2033 ～ 2035	V 右	箋註蒙求校本	上中下	西播岡白駒　箋註	1858	安政 5		漢学		
2036 ～ 2039	V 右	金聖歎批評水滸傳	一～四	平山高知　譯	1829	文政 12		不明	年代は本に挟まれた札参照	
2040 ～ 2046	V 右	筆記書集傳	一、二・三、四、五・六～九・十、十一・十二	平安仲欽敬甫	1864	元治 1		漢学		
2047 ～ 2054	V 右	筆記詩集傳	一、二・三～十・十一、十二・十三・十四、十五・十六	惕齋仲	1864	元治 1		漢学		
2055 ～ 2058	V 右	論語集註　再刻	一～四	朱熹　集註	1864	元治 1		漢学		
2059 ～ 2062	V 右	孟子集註　再刻	一～四	朱熹　集註	1864	元治 1		漢学		
2063・2064	V 右	聖世紹胤録	乾坤	東條琴臺	1870	明治 3		不明		
2065 ～ 2068	V 右	續皇朝史略	一～四	青山延于	1831	天保 2		通史		
2069・2070	V 右	王心齋全集	乾坤	楚黄耿定力 金陵焦竑　原校	1847	弘化 4		不明		×
2071 ～ 2080	V 右	孫子國字解	一、二・三、四・五、六～十二	物茂卿	1750	寛延 3		兵法		
2081 ～ 2088	V 右	新刻頭書　詩經集註	一～八	朱熹　集傳	1663	寛政 3　再刻	寛文 4	漢詩注釈		
2089 ～ 2103	V 右	春秋左氏傳　再刻	一・二～廿九・三十	源輙□	1800	寛政 12　再刻		漢学	序文末尾に書き込みされた紙あり	
2104 ～ 2123	V 右	汪份增訂　四書大全　論語集註	一～二十	吉村晉麗明甫　造文	1854	嘉永 7　刻成	天保 13　官許	漢学		
2124 ～ 2137	V 右	汪份增訂　四書大全　孟子集註	一～十四	吉村晉麗明甫　造文	1854	嘉永 7　刻成	天保 13　官許	漢学		
2138 ～ 2143	V 右	新刻頭書　書經集註	一～六	蔡□　集傳	1801	享和 1　再板	寛文 4	漢学		
2144 ～ 2148	V 右	易學發蒙	仁、義、礼、智、信	井上主殿源教親	1812	文化 9		漢学		
2149	V 右	朱子行状		退溪李滉　輯注	不明	不明		漢学		
2150 ～ 2153	V 右	文化新刻　禮記　字引附	元、亨、利、貞	不詳	不明	不明		漢学		
2154・2155	V 右	文化新刻　書經　字引附	天、地	不詳	不明	不明		漢学		
2156	V 右	文化新刻　春秋　字引附		不詳	不明	不明		漢学		
2157・2158	V 右	文化新刻　詩經　字引附	上下	不詳	不明	不明		漢学		
2159	V 右	改正音訓　詩經　後藤點	下	不詳	不明	不明		漢学		
2160	V 右	改正音訓　書經　後藤點	地	不詳	不明	不明		漢学		
2161	V 右	新刻改正　大学　後藤點		芝山後藤先生　定本	不明	不明		漢学		
2162	V 右	新刻改正　中庸　後藤點		芝山後藤先生　定本	不明	不明		漢学		
2163	V 右	論語	巻之三	朱熹　輯註	不明	不明		漢学	題箋なし。見返に「鴨田氏」、裏表紙に「第六小□第一□学　生徒鴨田関」書込あり	

2164	V 右	詩經　再刻　後藤點		不詳	不明	不明		漢学	題箋所々欠け読み取れず	
2165	V 右	大学章句　再刻　單		朱熹　章句 佐藤坦　覆詳	1825	文政 8		漢学		
2166	V 右	新刻改正　大学　後藤點		後藤先生　定點	1870	明治 3　新刻		漢学	見返に紙が挟まれている	
2167	V 右	新刻改正　中庸　後藤點		後藤先生　定點	1870	明治 3　新刻		漢学		
2168	V 右	新刻改正　中庸　再刻後藤點		朱熹　章句	不明	不明		漢学	見返、裏表紙に「鴨田八百冶所有」書込あり	
2169	V 右	改正音訓　書經　後藤點		不詳	不明	不明		漢学	著者年代不明。表紙裏表紙に書き込みあり	
2170・2171	V 右	改正音訓　書經　再刻　後藤點	天、地	不詳	不明	不明		漢学		
2172・2172	V 右	改正音訓　詩經　再刻　後藤點	上、× 2 冊	不詳	不明	不明		漢学		
2174・2175	V 右	改正音訓　易經　再刻　後藤點	乾坤	芝山後藤先生　定本	1812	文化 9		漢学		
2176・2177	V 右	改正音訓　春秋　再刻　後藤點	× 2 冊	不詳	不明	不明		漢学		
2178 ～ 2181	V 右	改正音訓　禮記　再刻　後藤點	貞、亨、元、利	不詳	不明	不明		漢学		
2182 ～ 2194	V 右	周易程朱傳義	目録、一・二～廿三・廿四	春秋館教授昌易　謹記	1664	寛文 4　開板		漢学	題箋なし	
2195 ～ 2198	V 右	評註　傳習録	上中下	王陽明 髙瀬武次郎　撰	1924	大正 13		漢学		
2199 ～ 2202	V 右	唐詩集註	一～四	近江字　鼎士新	1774	安永 3　鈔行		漢詩	著者は本に挟まれた札参照	
2203 ～ 2217	V 右	春秋左氏傳校本　再版	一・二～廿九・三十	秦鼎先生　校讀	1850	嘉永 3　再刻		漢学		
2218 ～ 2220	V 右	星巖集	甲集金、乙集石、乙集□	梁緯公　圖	1839	天保 10		漢詩文		
2221 ～ 2225	V 右	星巖集	丙集林、丙集調、丙集土、丁集革、丁集市	梁緯公　圖	不明	不明		漢詩文		
2226	V 右	玉池唫社詩	一集巻三之五　□	梁緯公　圖	不明	不明		漢詩		
2227 ～ 2245	V 右	重改新添　論語集註俚諺鈔	巻之一～十五、十七～二十	毛利貞齋	1715	正德 5		漢学	巻之十六欠巻	
2246 ～ 2259	V 右	頭書字彙	首巻、子集～亥集、附巻	鏞宣城梅誕生先生　重訂	1672	寛文 12　札参照		辞書	裏表紙に「西讃丸亀領庄内□□七宝山壽命院」書込あり。本に挟まれた札に印「武江後学簡室」	
2260 ～ 2268	V 右	鈴屋集　近調歌	一～九	本居宣長	1803	享和 3		歌文	印「深見速雄押手」	
2269・2270	V 右	書經	天、地	山崎闇齋　點	不明	不明		漢学		
2271・2272	V 右	小學	内篇、外篇	山崎嘉　點	1866	慶応 2		漢学		
2273 ～ 2276	V 右	小學内篇句讀	序　題辞　立教明倫、敬身　稽古、□、善行	天台　陳　遷	1666	寛文 6		漢学		
2277 ～ 2279	V 右	通語	上中下	中州清水原　譔	1842	天保 13		通史		
2280 ～ 2295	V 右	唐宋八大家文読本	一、二・三、四・五、六、七・八～廿九・三十	沈德潜	1814	文化 11　新鐫		漢学？		
2296 ～ 2302	V 右	経典余師	一～七	讃岐百年　述	1858	安政 5　再刻	文政 2 文化 12	漢学		
2303 ～ 2309	V 右	経典余師	一～七	讃岐百年　述	1819	文政 2　發兌		漢学		
2310 ～ 2329	V 右	藩翰譜	序、一～三、四上、四中、四下、五、六、七上、七下、八上、八下、九上、九下、十上、十下、十一、十二上、十二下	新井君美	1810	文化 7		系譜	写本。書込多数。著者は本に挟まれた札参照。札に「於□松求」書込あり	
2330	V 右	□□□戦争圖　明治□□□		不詳	不明	不明		絵画？	彩色絵入り。大本。痛み酷い。本に挟まれた札なし。巻末書込。紙背文書？多数	不明
2331 ～ 2342	V 右	星巖集	一～十二	梁緯　公圖	1841	天保 12　較刊		漢詩文	虫害酷く題箋読めず。	
2343 ～ 2387	V 右	関原軍記大成	一～四十六	栁田渉　撰	1716	正德 6		戦記	写本。虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照	

明治二五年蔵書目録比較版

本番号	部名	編輯者	名稱	装本	冊数	平成23蔵書目録での名称	年代	平成23蔵書目録での分類	古典籍総合目録での分類	注記
1	地圖之部	青木恒三郎	世界旅行萬國全地圖	和	壹	×			×	
2	地圖之部	森　琴石	新精大日本　全圖	和	壹	×			×	
3	地圖之部	大□四朗兵衛	繪入　東京　御畫圖	和	壹	×			×	
4	地圖之部	藤井幸三郎	大阪府管下細見新圖	和	壹	×			×	
5	地圖之部	大□四朗兵衛	長野善光寺境内圖	和	壹	×			×	
6	地圖之部	西村禾公助	横須賀港一覧繪圖	和	壹	×			×	
7	地圖之部	北□□一	香川縣管内圖	折本	壹	×			×	
8	地圖之部	山根秋里	大日本新地圖	洋	壱	×			×	
9	地圖之部	中田貞矩	清国本部興地圖	洋	壱	×			×	
10	地圖之部	清水光憲	朝鮮興地圖	洋	壱	×			×	
11	地圖之部	清水壹太ら	日清韓三国地圖	洋	壱	×			×	
12	地圖之部		大日本管轄分地□香川□	洋	三	×			×	
13	法律之部	村田保	刑法註釋	和	八	×			×	
14	法律之部	村田保	治罪法　註釋	和	八	×			×	
15	法律之部	大野堯運	刑法　治罪法合卷	洋	壹	×			×	
16	法律之部	高木周次	現行類集　日本規則大全	洋	貳	×			×	
17	法律之部	石黒磬	市町村制　實釋	洋	壹	×			×	
18	法律之部	大塚祐英	現今訴訟獨案内	洋	壹	×			×	
19	法律之部		市町村制	和	壹	×			×	
20	法律之部	福永惟精	登記法心得	洋	壹	×			×	
21	法律之部	香川縣	布告	和	壹	×			×	
22	法律之部	愛媛縣	布告	和	參	×			×	
23	法律之部	中村芳□	傍訓　帝國憲法	洋	壹	×			×	
24	法律之部	坪谷善四郎	日本商法釋　全我	洋	壱	×			×	
25	法律之部	田中宋栄堂	改正民法戸籍法正文	洋	壱	×			×	
26	法律之部		改正□□□□□□□	洋	壱	不明	不明	不明	不明	
27	法律之部		□□□□□	和	壱	不明	不明	不明	不明	
28	漢文書之部	近藤文粹	箋註十八史略校本	和	七	×			漢学	
29	漢文書之部	後藤世鈞	増補元明史略	和	四	×			外国史	
30	漢文書之部	巖垣松苗	國史略	和	五	国史略　一～五	複数あり	通史	通史	
31	漢文書之部	頼山陽	増補日本外史	洋	壹	×			通史	
32	漢文書之部	後藤芝山	四書	和	拾	林家正本再刻　四書集註一冊のみ	不明	漢学	漢学	
33	漢文書之部		五經	和	拾一	×			漢学	
34	漢文書之部		小學	和	貳	小學　内篇・外篇	1866	漢学	漢学	
35	漢文書之部		傍訓　五經	和	拾一	×			注釈	
36	漢文書之部	室鳩巣	赤穂義人錄	和	貳	赤穂義人録　乾・坤	1868	実録	実録	
37	漢文書之部		大學	和	貳	新刻改正　大学　後藤點全	複数あり	漢学	漢学	M25目録の本と同様か不明
38	漢文書之部		大學或問	和	貳	大学或問　上	1788	政治	漢学	上のみあり
39	漢文書之部		論語	和	八	不明	複数あり	漢学	漢学	題に論語の入る本が61冊ある
40	漢文書之部		孟子	和	九	不明	複数あり	漢学	漢学	題に孟子の入る本が36冊ある
41	漢文書之部		中庸	和	參	新刻改正　中庸　後藤點全 同じ本2冊あり 新刻改正　中庸　再刻後藤點	不明	漢学	漢学	
42	漢文書之部		中庸或問	和	貳	×			漢学	

43	漢文書之部		中庸輯略	和	四	×			漢学	
44	漢文書之部		中庸章句	和	壹	×			漢学	
45	漢文書之部		孟子集註	和	四	孟子集註　再刻　一～四	1864	漢学	漢学	
46	漢文書之部		孟子俚諺□	和	九	×			漢学	
47	漢文書之部		四書白文	和	壹	×			漢籍	
48	漢文書之部	山崎闇斎	易經	和	貳	×			漢学	
49	漢文書之部		詩経	和	貳	改正音訓　詩経　再刻 後藤點　上 上が二冊ある	不明	漢学	漢学	
50	漢文書之部		禮記	和	四	不明	複数あり	漢学	漢学	四冊セットの『礼記』が三組ある
51	漢文書之部		古文真寶合解評林	和	貳	×			漢詩文	『古文真宝字引』という本がある
52	文集之部	安藤太郎	文章軌範　纂評	和	六	文章軌範纂評　一～三 続文章軌範纂評　一～三	1878	漢学	漢学	包装に「宗家　□□家　之蔵」の書き込みあり
53	文集之部	吉田長祥	明治大家文鈔	和	四	明治大家文鈔　一～四	1880	不明	×	
54	文集之部	岸上操	名家尺牘文集	洋	壹	×			×	
55	文集之部	河村墨稼	十體千字文	洋	壱	×			書道	
56	文集之部	塚杙茅□	近松著作一斑	洋	壱	×			×	
57	文集之部	内山□□	旅之友	洋	壱	×			便覧	
58	字書之部	毛利貞齋	増續大廣益會玉篇大全	和	拾貳	増続　會玉篇大全　全 12 冊	1877	辞書	辞書	
59	字書之部		廣益正字通	咏	壹	×			辞書	
60	字書之部		字典節用集	和	壹	字典節用集	1817	辞書　節用集	辞書　節用集	
61	字書之部	湯浅忠良	廣益熟字典	和	壹	×			辞書	
62	字書之部	櫻井茂衛	増補元明史略字解	和	貳	増補元明史略字解　上・下	1879	辞書	×	
63	字書之部	土橋莊	國史略字解大全	和	參	×			×	
64	字書之部		地理小志字引	和	貳	新撰　地理小志字引 十二、三十四	1883	辞書	×	
65	字書之部	花房柳條	以呂波節用明治辞典	和	一	以呂波節用　明治辞典	1894	辞書	×	
66	字書之部		□□字典	和	一		不明	不明	不明	
67	字書之部	駒谷散人横郁	増補　合類大節用集	和	十三	増補　合類大節用集　乾坤一　再版 一～十　全 13 冊	1766	辞書　節用集	辞書　節用集	
68	字書之部		草書淵海	和	貳	草書淵海　上・下	1675	書道　辞書	書道 辞書	
69	字書之部	山田貞豊	皇朝史略字類大全	和	三	標註圖解　続皇朝史略字類大全　上・中・下	1883	通史　辞書	×	
70	雑書之部	本木正榮	海岸砲術　備要	和	五	×			海防	
71	雑書之部	福澤諭吉	民情一新	洋	壹	×			×	
72	雑書之部	福澤諭吉	分權論	洋	壹	×			×	
73	雑書之部	福澤諭吉	民間經濟錄	和	壹	×			経済	
74	雑書之部	福澤諭吉	學問ノスヽメ	和	四	×			不明	
75	雑書之部	高木周次	現衍			×			×	
76	雑書之部	服部誠一	世界追歩　第二十世紀	洋	壹	×			×	
77	雑書之部	安田敬齋	上等記事論説文例	和	貳	×			×	
78	雑書之部	伊藤博文	帝國憲法　皇室典範　義解	洋	壹	×			×	
79	雑書之部	江守敬□	衛生要談	洋	壹	×			×	
80	雑書之部	吉田香雨	西洋日本支那禮貪法	洋	壹	×			×	
81	雑書之部	小柳津親雄	明治新話　抱腹奇談	洋	壹	×			×	
82	雑書之部	林包明	社會哲学	洋	壹	×			×	
83	雑書之部	末廣重恭	貳拾參年未来記	洋	壹	×			×	
84	雑書之部		汗血千里駒	洋	壹	×			×	
85	雑書之部	彈舜平	大日本帝國　議員必携	洋	壹	×			×	
86	雑書之部	齋藤拙堂	月瀬記勝	和	貳	月瀬記勝　天・地	1881	漢詩文	漢詩文	

87	雑書之部	國友館	國民之友第一集	洋	壹	×			×	
88	雑書之部	陳奮翰	寐惚先生文集	和	壹	寝惚先生文集　全	1881	狂詩　狂文	狂詩　狂文	
89	雑書之部	藤井美橘	改良百々逸□集	洋	壹	×			×	
90	雑書之部	大舘利一	紙入日用便	和	壹	×			×	
91	雑書之部	大村勵	日本帝国　大勢要談	洋	壹	×			×	
92	雑書之部		博公書院改正□錄	和	壹	×			×	
93	雑書之部	青木恒三郎	世界旅行　萬國名所圖繪	洋		×			×	
94	雑書之部		新約全書	洋	壹	×			×	
95	雑書之部		新約聖書馬太傳	和	壹	×			×	
96	雑書之部		新約聖書馬可傳	和	壹	×			×	
97	雑書之部		柘木ヲ拜□ノ害	洋	壹	×			×	
98	雑書之部	大久保常吉	魯帝弑逆記	洋	壹	×			×	
99	雑書之部	忍峡稜威兄	通俗　日本國會新論	洋	壹	×			×	
100	雑書之部	内田尚長	近世美事叢談	洋	壹	×			×	
101	雑書之部	思誠堂	望月誠　活計論	洋	壹	×			×	
102	雑書之部	砂山藤三郎	戒□　大演説會傍聽筆記	洋	貳	×			×	
103	雑書之部	加藤富三郎	當時悪口	洋	壹	×			×	
104	雑書之部	小山憲榮	道德ノスヽメ	洋	壹	×			×	
105	雑書之部	善積順蔵	日本財政困難救治策	洋	壹	×			×	
106	雑書之部	戸田十畝	闇夜之借金	洋	壹	×			×	
107	雑書之部	清水益次郎	板垣君歐米漫遊錄	洋	貳	×			×	
108	雑書之部	内藤久人	福嶌事件高等法院　傍聽筆記	洋	壹	×			×	
109	雑書之部	月田會輔	遊覧シオリ	洋	壹	×			×	
110	雑書之部	中嶌秀勲	□面国勸業　博覧會一覧	洋	壹	×			×	
111	雑書之部	東京電燈會社	電気燈案内	洋	壹	×			×	
112	雑書之部	河内覺三郎	和字功過自知録	洋	壹	×			教訓	
113	雑書之部	竹内善次郎	火災保険盗難防禦金庫表	洋	壹	×			×	
114	雑書之部	竹中卓郎	種苗定価表	洋	貳	×			×	
115	雑書之部	長井□太郎	東都十二景	洋	壹	×			×	
116	雑書之部	伴原平	袖珍道中膝栗毛	洋	壹	×			×	
117	雑書之部	近澤韋山	英名百雄傳	和	壹	×			絵画	
118	雑書之部	木村勘十郎	南海太朗巡□記	洋	貳	×			×	
119	雑書之部	野田興三二郎	山家之錦世鏡	洋	參	×			×	
120	雑書之部	野崎待三	通俗　東海三國誌	洋	參	×			×	
121	雑書之部	野田興三二郎	野路之花	和	六	×			不明	
122	雑書之部	野田興三次郎	對之花籠秋曙	洋	貳	×			×	
123	雑書之部	山本長之助	善悪之大蔵小	洋	貳	×			×	
124	雑書之部	國方恒太郎	前參議板垣公　武勇傳	洋	貳	×			×	
125	雑書之部	萩原喜十郎	海南水滸傳	洋	貳	×			×	
126	雑書之部	小川吉之輔	森本信行奸智驚談	洋	壹	×			×	
127	雑書之部	十返舍一九	琴平參詣膝栗毛	和	貳	×			×	厳嶋參詣膝栗毛　上・下はある
128	雑書之部	廣根至宜	朝鮮傳信錄	洋	參	×			×	
129	雑書之部	莊司晋太郎	通俗　西郷隆盛傳	洋	拾壹	×			×	
130	雑書之部	齋藤弘道	西南傳信録	和	六	×			×	
131	雑書之部	常井誠一郎	薩肥傳信録	洋	五	×			×	
132	雑書之部	清水平一郎	新撰　南画一覧	和	壹	×			×	
133	雑書之部	佐伯半鼻	播磨□八□湖路	和	壹	×			×	
134	雑書之部	四方茂苹	銅版畫入萬國往來	和	壹	銅版画入　萬國往來　完	1871	往来物	往来物	
135	雑書之部		内國各□氣車早ワカリ	洋	壹	×			×	
136	雑書之部	天賞堂	時計取扱心得	洋	壹	×			×	

137	雑書之部		唐詩撰	和	六	不明	複数あり	漢詩　書道	漢詩　書道	題に『唐詩選』の入る本が16冊ある
138	雑書之部		唐詩訓解	和	參	×			漢詩	
139	雑書之部		和歌分類	和	壹	×			歌学	
140	雑書之部		早引年歴通覧	折本	壹	×			暦	
141	雑書之部	志貴瑞芳	漢語用文章講釋	和	貳	×			×	
142	雑書之部	戸田栄治	通達仕用□状大全	和	壹	×			×	
143	雑書之部	岡本方圓齋	増補詳註用文章全	和	壹	×			×	
144	雑書之部		童兒古状揃大成	和	壹	寺子日用　童子古状揃大成　全	1850	往来物	往来物	
145	雑書之部		假名文字遣	和	壹	校訂　仮名文字遣　全	不明	語学	語学	巻末に書き込みあり。著者不明。本に挟まれた札参照
146	雑書之部		實語童子　教	和	壹	×			教訓	
147	雑書之部	北窓梅好	狂歌日本風土記			狂歌日本風土記	1831	狂歌	狂歌	表紙なし　裏表紙に「□□□□傳」の書き込みあり
148	雑書之部		頭書増補訓蒙圖彙			頭書増補訓蒙圖彙　巻之八巻之九	1848	事典	事典	題箋欠け読めず。見返しに「讃□加賀屋新□嘉永元年伐申九月　穐之月」と書き込みあり。巻末に書き込み多数。年代不明。本に挟まれた紙参照
149	雑書之部		文久二十六家　絶句			文久二十六家絶句　上	1862	漢詩	漢詩	上のみ
150	雑書之部		□訓			不明	不明	不明	不明	
151	雑書之部	淡海笠顯常	唐詩解頤			唐詩解頤	1776	漢詩	漢詩	題箋なし。年代不明。本に挟まれた札を参照し年代・著者名を記入
152	雑書之部		文晁畫譜			×			絵画	
153	雑書之部		故實茶湯奥義鈔	和	參	×			×	
154	雑書之部		和歌濵之マサ□	和	四	×			×	
155	雑書之部		杏配自在	和		×			×	
156	雑書之部	清水葵齋	永代節用□盡藏	和	壹	×			辞書　節用集	
157	雑書之部	小川愛道	算法　指南車□	和	壹	×			和算　塵劫記	
158	雑書之部	當世武勇傳	花陽樓國員	折本	壹	當世武勇傳	不明	絵画	×	早稲田大学図書館にある
159	雑書之部	泉要士德	詩語碎金	和	壹	詩語碎金　新刻　2冊	1834	漢詩	漢詩	文中・表紙に書き込みあり。見返に「吉田重治郎」の書き込みあり
160	雑書之部	成德隣伯敬 檜長裕君益	幼學詩韻	和	壹	幼学詩韻　再刻　完　2冊	1845	漢詩	漢詩	
161	雑書之部	湖月老隠	茶式湖月抄	和	拾	×			茶道	
162	雑書之部	丸山垣穂	酒醤油桶算表	洋	壹	×			×	
163	雑書之部		醤油税側付心得	和	壹	×			×	
164	雑書之部	内田鶴吉	醤油桶大量早等法	洋	壹	×			×	
165	雑書之部	小屋筆雄	國民便覧	洋	壱	×			×	
166	雑書之部	景山兀山	日本貨幣史	和	壹	日本貨幣史	1893	貨幣？	不明	写本
167	雑書之部	大淵渉	官□小僧	洋	壹	×			×	
168	雑書之部	森下岩楠 森鳥修太郎	簿記學階梯	和	貳	×			×	
169	軍記之部		繪本通俗武王軍談	洋	壹	×			×	
170	軍記之部		繪本通俗三國志	洋	貳	×			読本	
171	軍記之部		繪本通俗呉越軍談	洋	壹	×			×	
172	軍記之部		繪本通俗漢楚軍談	洋	壹	×			×	
173	軍記之部		繪本忠義水滸傳	洋	壹	×			×	
174	軍記之部		重修眞書太閤記	洋	壹	×			実録	
175	軍記之部	福井淳	繪本明治太平記	洋	壹	×			×	

176	軍記之部		残太平記	和	拾一	×			戦記	
177	軍記之部		真顕太閤記	和	九	太閤眞顕記　全 11 冊	不明	実録	実録	写本。虫害酷く題箋読めず。本開けず。本に挟まれた札参照。札に「1 巻～ 130 巻」の書き込みあり
178	軍記之部	服部宮之□	北京□□□日記	洋	一	×			×	
179	軍記之部	忍齋宮川尚古	関原記大成	和	四十四	関原軍記大成　一～四十六	1716	戦記	戦記	写本。虫害酷く本開けず。本に挟まれた札参照。巻 32 無し
180	軍記之部	參謀本部	関ヶ原後補傳　日本戦記	洋	壱	×			×	
181	學校教科書之部	文部省	小學教授書	和	壹	×			×	
182	學校教科書之部	文部省	小學讀本	和	五	×			教育	
183	學校教科書之部	那珂道高　稲垣千穎	小學　讀本	和	壹	×			教育	
184	學校教科書之部	師範學校	地理初歩	和	壹	×			×	
185	學校教科書之部	松本英忠	愛媛縣地誌畧讃岐圖	和	壹	×			×	
186	學校教科書之部	田中義□	日本地誌　畧	和	參	×			地誌	
187	學校教科書之部	師範學校	摘要　日本地誌略	和	壹	×			地誌	
188	學校教科書之部	小澤圭三郎	萬國地誌略	和	貳	×			教育	
189	學校教科書之部	大槻文彦	萬國史略	和	貳	×			歴史	
190	學校教科書之部	木村正辞	日本略□	和	貳	不明	不明	歴史	歴史	翻刻　日本略史　一～四　があるが、同様のものか不明
191	學校教科書之部	榊原芳野	小學修身讀本	和	壹	×			×	
192	學校教科書之部	師範學校　村田海石	習字臨本	和	參	×			×	
193	學校教科書之部	文部省　内田嘉市	書牘日用□	和	貳	×			書道	
194	學校教科書之部	榎辰一	動物教授書	和	壱	×			×	
195	定期刊行書之部	山本六三郎	國華		參	×			俳諧	
196	定期刊行書之部	西澤之助	國光	洋		×			×	
197	定期刊行書之部	西澤之助	女鑑	洋	貳	×			×	
198	定期刊行書之部	小澤豁郎	赤十字	洋		×			×	
199	定期刊行書之部	青木恒三郎	内外書籍　出版發兌目録	洋	壹	×			×	
200	定期刊行書之部	石上友匚	日本文學講義録	洋	壹	×			×	
201	定期刊行書之部	細谷栄五郎	香川縣公文月報	洋	壹	×			×	
202	定期刊行書之部	川澄猪之助	口カラ出マカセ	洋	壹	×			×	
203	定期刊行書之部		文之友	洋	壹	×			×	
204	定期刊行書之部	常井誠一郎	覩眠　新誌	洋	壹	×			×	
205	定期刊行書之部	矢野盛隆	法学　問答雑誌	洋	壹	×			×	
206	定期刊行書之部	天田政策	近事評論	洋	壹	×			×	
207	定期刊行書之部	大久保常吉	江湖　新報	洋	壹	×			×	
208	定期刊行書之部	藤田秀雄	國友雑誌	洋	壹	×			×	
209	定期刊行書之部	村山正孝	西京新誌	洋	壹	×			×	
210	定期刊行書之部	富士通玄	信敬雑誌	洋	壹	×			×	
211	定期刊行書之部	八塚幹之助	法律雑誌	洋	壹	×			×	
212	定期刊行書之部	渡邊依中	屋山旭影	洋	壹	×			×	
213	定期刊行書之部	東良三郎	七々雑報	洋	壹	×			×	
214	定期刊行書之部	西村藏太郎	桂林餘芳	洋	壹	×			×	
215	定期刊行書之部	稲見新一郎	庚寅新誌	洋	拾四	×			×	
216	定期刊行書之部	日野□三郎	通俗學藝志林	洋	壹	×			×	
217	定期刊行書之部	深舎知恂	自知新誌	洋	壹	×			×	
218	定期刊行書之部	中村修一	國民之友	洋	壹	×			×	
219	定期刊行書之部		シラセ	洋	壹	×			×	
220	定期刊行書之部	高橋省三	小國民	洋	壹	×			×	
221	定期刊行書之部	坪谷善四郎	日本之法律	洋	壹	×			×	

222	定期刊行書之部	坪谷善四郎	日本之警察	洋	壹	×			×	
223	定期刊行書之部	宮川鐵ニ郎	日本之商人	洋	壹	×			×	
224	定期刊行書之部	新保□太郎	日本之時事	洋	壹	×			×	
225	定期刊行書之部	須永金三郎	日本之少年	洋	壱	×			×	
226	定期刊行書之部	坂下亀太郎	幼年雑誌	洋	壹	×			×	
227	定期刊行書之部	藤井圓□	哲学館講義録	洋	壹	×			×	
228	定期刊行書之部	前川一郎	教育	洋	壹	×			×	
229	定期刊行書之部	高賀左近	日本人	洋	壹	×			×	
230	定期刊行書之部	高橋兼	東京經濟雜誌	洋	貳	×			×	
231	定期刊行書之部	古関集義	教育持論	洋	壹	×			×	
232	定期刊行書之部	千田忠平	明治之興論	洋	壹	×			×	
233	定期刊行書之部	三間清八	燈華	洋	三	×			×	
234	定期刊行書之部	大西瀧川	玉藻之カキヨセ	洋	壹	×			×	
235	定期刊行書之部	浅田眞造	愛比賣新報			×			×	
236	定期刊行書之部	浅田眞造	俳諧集			×			×	
237	定期刊行書之部	下村狐郵	抜萃新聞誌			×			×	
238	定期刊行書之部		樂善叢誌			×			×	
239	定期刊行書之部	大口六兵衛	轉愚叢談			×			×	
240	定期刊行書之部	吉田伊太郎	能弄戯珎誌			×			×	
241	定期刊行書之部	渡邊末綱	我樂多珎誌			×			×	
242	定期刊行書之部	岩崎好正	驢尾團子			×			×	
243	定期刊行書之部	米内正□	團々珎聞			×			×	
244	定期刊行書之部	堀越修一郎	穎才新誌			×			×	
245	定期刊行書之部	松野平三郎	上海新報			×			×	
246	定期刊行書之部	明石健二郎	教育報知			×			×	
247	定期刊行書之部	野口竹次郎	傳文館圖書目録	洋	二	×			×	
248	定期刊行書之部	大淵渉	百千□	洋	壹	×			×	
249	定期刊行書之部	湧井武次郎	東京商況月報	洋	壱	×			×	
250	定期刊行書之部	建部重助	醸造新報	洋		×			×	
251	定期刊行書之部	中村丈太郎	少文林	洋	壱	×			×	
252	定期刊行書之部	田中定吉	經論	洋		×			×	
253	定期刊行書之部	後藤□	日本人	洋		×			×	
254	定期刊行書之部	内山正如	日本大家論集	洋		×			×	
255	定期刊行書之部	鈴木倉之助	日本教育雑誌	洋		×			×	
256	定期刊行書之部	前野芳造	醸造世界	洋		×			×	
257	定期刊行書之部	小久保瀾尊	警察志叢	洋		×			×	
258	定期刊行書之部	齋籐孝治	法治協會雜誌	洋		×			×	
259	定期刊行書之部	西山兼吉	法學協會雜誌	洋		×			×	
260	定期刊行書之部	上村修助	醸造雑誌			×			×	
261	定期刊行書之部	河村直	日清戦争實記	洋	壱	×			×	
262	定期刊行書之部	手塚猛昌	汽車汽船　旅行案内	洋	壱	×			×	
263	定期刊行書之部	堀川柳助	征清畫談	洋	壱	×			×	
264	定期刊行書之部	□□善四郎	太陽	洋		×			×	
265	定期刊行書之部	巌吾季雄	少年世界	洋	壱	×			×	
266	定期刊行書之部	岸上操	新法令	洋	壱	×			×	
267	定期刊行書之部	博文館	知念增刊太陽	洋	壱	×			×	
268	定期刊行書之部	博文館	明治小説文庫			×			×	
269	定期刊行書之部	博文館	文藝倶部			×			×	
270	分野×1	鳥居鎬□□	鉄道航海　旅の案内	洋	一	×			×	

271	分野×1	□入隆意	日清交戦画報	和	武	日清交戦畫報　第二号～第五号	1894	絵画	×	絵入彩色有。日清戦争の絵。
272	分野×1		繪本初心柱立	和	一	×			不明	
273	分野×1	志村三□	日清後名□記録	洋	一	×			×	
274	分野×1	□□□□	中庸年□小記	洋	一	×			×	
275	分野×1		人物画譜	和	一	×			絵画	
276	分野×1		武門要鑑抄	和	一	武門要鑑抄　巻五之七一騎伝	不明	兵法	兵法	写本。題箋なし。表紙に絵あり。裏表紙に「尾道屋　茂〇八」の書き込みあり。巻末に書き込みあり。本文末に「□□□熊吉」の書き込みあり
277	分野×1	岩□□□	□言台百集	洋	一	×			×	
278	分野×1	田原伊作	改撰解題集	洋	一	×			×	
279	分野×1	石井性□	□□□□繁昌□記	洋	一	×			×	
280	分野×1	□井□雲	故事訓□	洋	一	×			×	
281	分野×1	富川文□	襍の橘	洋	一	×			×	
282	分野×1		四國御□画□事	和	一	×			×	
283	分野×1		□戸往来	和	一	江□往来	1850	往来物	往来物	
284	分野×1		消息往来	和	一	増字　消息往来	1834	往来物	往来物	
285	分野×1		婢女行	和	一	婢女行	1881	不明	不明	写本。巻末に「讃□□□傳治」の書き込みあり
286	分野×1		□七言絶句	和	一	五七言絶句	不明	漢詩	不明	写本
287	分野×1		唐□□	和	一	唐詩選	1865	書道　漢詩？	不明	写本。巻末に書き込みあり
288	分野×1	穐雲照	國民教育之方針	洋	一	×			×	
289	分野×1	竹中成憲	出征軍隊兵士之衛生	洋	一	×			×	
290	分野×1	鈴木天眼	小日本□大日本□	洋	一	×			×	
291	分野×1	小泉定介	手治物語讀本	洋	一	×			×	
292	分野×1	小泉定介	保元物語讀本	洋	一	×			×	
293	分野×1		新古今和歌集	和	以	×			歌集	
294	分野×1	久禾幹文	大鏡	和	弐	大鏡　一～二	1891	歴史物語	歴史物語	
295	分野×2	東籬亭菊人	繪本忠孝美善録	和	十	絵本忠孝美善録　前編 一～五 絵本忠孝美善録　後編 一～五	1828	読本	読本	
296	分野×2	龍見先生	大江傳記　鎌倉見聞志	和	十七	大江伝記　鎌倉見聞志 全17冊	1774	不明	不明	写本。本文頭に「芝金」の印。著者年代不明。本に挟まれた札参照。札に「10代家治将軍」の書き込み有り
297	分野×2		繪本三國妖婦傳	和	十五	絵本三国妖婦傳　一～十五	1805	読本	読本	年代不明。本に挟まれた札参照
298	分野×2		安政見聞誌	和	三	安政見聞誌　上中下	不明	実録	実録	本に挟まれた札に「一鶯齋国周画」の書き込みあり
299	分野×2		安政見聞録	和	三	安政見聞録　上中下	1856	見聞記	見聞記	
300	分野×2		義公黄門仁徳録	和	六	義公黄門仁徳録　初編 上中下 義公黄門仁徳録　後編 上中下	1854	実録	実録	写本。虫害酷く本開けず。本に挟 まれた札参照
301	分野×2	大槁新太郎	珍本全集	洋	三	×			×	
302	分野×2	三神禮次	日本武士道	洋	壱	×			×	
303	分野×2	堺利彦	家庭夜話	洋	壱	×			×	
304	分野×2	堺枯川	家庭の新風味	洋	壱	×			×	

305	分野×2	田口外吉	薬天録	洋	壱	×			×	
306	分野×2	木村匡	森先生傳	洋	壱	×			×	
307	分野×2	谷本冨	忠勇義烈　戦時讀本	洋	壱	×			×	
308	分野×2	湖山奥雲	衛生至實　食鑒	洋	壱	×			×	
309	分野×2	武田千代三郎	理論実験　競技運動	洋	壱	×			×	
310	分野×2	佐村八郎	明治聖勅集	洋	壱	×			×	
311	分野×2	福地漆一郎	長崎三百季間	洋	壱	×			×	
312	分野×2	中江篤介	一季有半	洋	壱	×			×	
313	分野×2	中江篤介	續一季有半	洋	壱	×			×	
314	分野×2	幸德秋水	兆民先生	洋	壱	×			×	
315	分野×2	宮部天民	年堅国臣	洋	壱	×			×	
316	分野×2	竹内水哉	伊藤東涯	洋	壱	×			×	
317	分野×2	得能文新海臣行	中江藤樹	洋	壱	×			×	
318	分野×2	工藤武重	柳澤吉保	洋	壱	×			×	
319	分野×3	金本椒園	樂山□詩鈔	和	弐	樂山堂詩鈔　乾坤	1869	漢詩	漢詩	
320	分野×3	青山延于	皇朝史畧	和	十	皇朝史略　一～十二　全 10 冊	1826	通史	通史	
321	分野×3	石村貞一	續續皇朝史畧	和	七	訂正　続続皇朝史略　一～七	1881	通史	通史	
322	分野×3	誠懐堂	孝經餘師	和	壱	孝経余師　全	1842	漢学	漢学	
323	分野×3	志賀理斎	三省録	和	三	三省録　一～五	1843	教訓	教訓	
324	分野×3	讃岐百年	經典餘師	和	七	経典余師　一～七	複数あり	漢学	漢学	一～七までの経典余師のセット 2 セットあり
325	分野×3	頼襄	日本政記	和	八	日本政記　一～八	不明	通史	通史	
326	分野×3	藤沢南岳	日本通史	和	十六	×			通史	
327	分野×3	寺門静軒	江戸繁昌記	和	五	江戸繁昌記　一～五	1831	地誌	地誌	
328	分野×3	春日仲淵先生	朱子　大學句讀講義	和	壱	字義詳解　朱子　大学句読講義 春日仲淵先生講義　完	1886	漢学	漢学	
329	分野×3	大塩俊素	増補孝經彙□	和	三	増補孝経彙註　上中下 増補孝経彙註　上中下	1835	漢学	漢学	裏表紙に「矢野氏」の書き込みあり
330	分野×3	醍醐寺高僧	弘法大師正傳	和	以	×			伝記	
331	分野×3	鐵崎實應	□居詩存	和	弐	謫居詩存　上下	不明	漢詩	漢詩	
332	分野×3	渡邊詩郎	啓蒙日本外史	和	十五	啓蒙日本外史　六～十	1875	通史	通史	六～十のみ
333	分野×4	十谷保太郎	子規言行録	洋	壱	×			×	
334	分野×4	十谷保太郎	子規随筆	洋	壱	×			×	
335	分野×4	十谷保太郎	子規随筆續篇	洋	壱	×			×	
336	分野×4	中川恭次郎	家庭衛生叢書	洋	壱	×			×	
337	分野×4	関本成緒	新撰支那小史	洋	壱	×			×	
338	英書及獨修書之部		英三躰伊呂波		壹	×			×	
339	英書及獨修書之部		英字早□奈飛全	和	壹	×			×	
340	英書及獨修書之部		増補英語階梯	和	參	×			外国語	
341	英書及獨修書之部		スペルリング	洋	壹	×			外国語	
342	英書及獨修書之部	生駒蕃	和譯スペルリング	洋	壹	×			×	
343	分野×5	相良國太郎	鎌倉江之嶋名所案内	和	壹	×			×	
344	分野×5	商行所	徴兵適免早分理	洋	壹	×			×	
345	分野×5	時				×			×	
346	分野×5	常盤會	命之種	和	壹	×			×	
347	分野×5		天日本官民英明籤	和	壹	×			×	
348	分野×5		新增大成無隻節用□	和	壹	×			×	
349	分野×5		諸本商賣往來	和	壹	×			往来物	

350	分野×5		庭訓往来	和	壹	庭訓往来絵鈔　全	不明	往来物	往来物	巻末書き込みあり
351	分野×5		百人一首拾穂補註	和	壹	×			和歌 注釈	
352	分野×5	岩本五市	怪談乳房榎	洋	壹	×			×	
353	分野×5	菅谷興吉	怪談稲生武勇傳	洋	壹	×			×	
354	分野×5	和田篤太郎	隠君子	洋	壹	×			俳諧	
355	分野×5	小林伊三郎	帝國貴族院議員多額納税者互選人名録	洋	壹	×			×	
356	分野×5	高木蘭山	日本史同外史　名乗字引	和	壹	×			×	
357	分野×5	樋口正三郎	伊勢參宮　印影末以利	洋	壹	×			×	
358	分野×5	足立庚吉	繪本柳荒美談　全	洋	壹	×			実録	
359	分野×5	大川鍵吉	佛蘭西小説　有罪無罪	洋	壱	×			×	
360	分野×5	大淵渉	滑□　曽呂利叢話　全	洋	壱	×			×	
361	分野×5	渡邊勝	落武者	洋	壱	×			×	
362	分野×5	森琴石	揮毫自在	和	貳	×			×	
363	分野×5	桃川如燕	木村長門守傳	洋	壱	×			×	
364	分野×5	鈴木常松	伏魔殿	洋	壱	×			×	
365	分野×5	坂木栗夫	藤澤先生講談叢録	洋	壱	×			×	
366	分野×5	中村吉松	想夫戀	洋	壱	×			×	
367	分野×5	伊藤專造	小雲大岡政談	洋	壱	×			×	
368	分野×5	廣岡□助	不動霊験筐仇討	和	壱	×			実録	
369	分野×5	桃川如燕	高櫓力士　舊猫傳	和	壱	×			×	
370	分野×5	廣岡□助	猫奇談佐賀廼夜櫻	和	貳	×			×	
371	分野×5	廣岡□助	村井長庵大岡仁政録	和	壱	×			実録	
372	分野×5	蓑峨野瑜太郎	敵討天下茶屋	和	壱	×			合巻	
373	分野×5	蓑峨野瑜太郎	天一坊實記	和	壱	×			×	
374	分野×5	蓑峨野瑜太郎	慶安太平記	和	貳	×			実録	
375	分野×5	紅葉山人	風流京人形	洋	壱	×			×	
376	分野×5	中島知子	日本の裁縫と女禮	和	貳	×			×	
377	分野×5	石塚猪男蔵	國歌	洋	壱	×			×	
378	分野×5	栗田信太郎	西洋各國　現今政治事情	洋	壱	×			×	
379	分野×5	前野嗽石	明治□文演説	洋	壱	×			×	
380	分野×5	西村天囚	雑新豪傑談	洋	壱	×			×	
381	分野×5	櫻痴居士	素人芝居	洋	壱	×			演劇	
382	分野×5	中西午四郎	停會何故呼	洋	一	×			×	
383	分野×5	西村時□	大衝突論	洋	一	×			×	
384	分野×5	高橋自特	内地雑居論	洋	一	×			×	
385	分野×5	正司南馭	家職要道	洋	壱	×			×	
386	分野×5	中澤道二	心學先哲道話	洋	壱	×			×	
387	分野×5	佐伯有義	教の園	洋	二	×			×	
388	分野×5	太刀川文書	大石良雄幼稚傳 伊賀越後日仇討	洋	壱	×			×	
389	分野×5	小宮山綏介	□世豪傑譚	洋	壱	×			×	
390	分野×5	菅谷興□	四天王鬼賊退治實傳	和	壱	×			×	
391	分野×5	中竹邦太郎	千代田秣噂白浪	和	一	×			×	
392	分野×6		西谷名目	和	壹	×			天台	
393	分野×6		女孝経	和	壹	×			往来物	
394	分野×6		女論語	和	壹	×			教育	
395	分野×6		女誡	和	壹	×			不明	
396	分野×6		内訓	和	壹	×			不明	
397	分野×6		諷	和	六	×			不明	

398	分野×6		謳	和		×			不明	
399	分野×6		浄瑠璃	和		×			浄瑠璃	古典籍総合目録にある本と同じか不明
400	分野×6	千利休	七荘茶湯書	和	五	七荘　利休茶湯書 一二三四六	1680	茶道	茶道	五巻なし
401	分野×6	庸田政度	女教千代友	和	一	×			往来物	
402	分野×6	六樹園飯盛	狂歌五十人一首	和	一	狂歌五十人一首　完	1819	狂歌	狂歌	
403	分野×6	淵海□	四十二□人物画圖	和	一	×			不明	『四十二国人物図説』ではないか
404	分野×7	工藤武重	柳澤吉保	洋	一	×			×	
405	分野×7		金貨本位はやわかり	洋	壱	×			×	
406	分野×7	大塚磨	資産を造る新案	洋	壱	×			×	
407	分野×7	杉浦茂男	財産増殖の良法	洋	壱	×			×	
408	分野×7	井上棋逝	囲棋初學全書	和	壱	×			×	
409	分野×7	田辺□□	小學　孝道訓	和	壱	不明	複数あり	漢学	漢学	題に小学の入る本が24冊ある
410	分野×7	□寄実鷹	弘法大師複代行状記	和	壱	×			伝記	
411	分野×7	□野富之助	剣道達人　武□実記	洋	壱	×			×	
412	分野×7	芝辻貞	大日本繁昌懐中便覧	和	貳	×			×	
413	分野×7	芝山居士	近古慷□家列傳	洋	壱	×			×	
414	分野×7		薄田隼人	洋	壱	×			×	
415	分野×7	前原想	帝国新立志編	洋	壱	×			×	
416	分野×7	斯邁尓斯	西國立志編	洋	壱	×			教訓	
417	分野×7	斯邁尓斯	実事譚	洋	貳	×			×	
418	分野×7	野□左父 □本□陰	日本名勝地誌八	洋	壱	×			×	
419	分野×7		高松栗林公園真景	洋	壱	×			×	
420	分野×7	清水光憲	京都名町独案内	洋	壱	×			×	
421	分野×7		演劇脚本　侠客春雨傘	和	壱	×			×	
422	分野×7	大□文左□	書法自至	洋	壱	×			×	
423	分野×7	大□文左□	日常行為法則	洋	壱	×			×	
424	分野×7	米□アーサー エチ、スミス（読み取れず）	支那人気質	洋	壱	×			×	
425	分野×7	福原清	北條早雲	洋	壱	×			×	
426	分野×7	磯野於莵介	道乃□集	洋	□	×			×	
427	分野×7	福羽美静	人事百話	洋	壱	×			×	
428	分野×7	理□志賀□	三省録	和	五	三省録　一～五	1843	教訓	教訓	
429	分野×7	美竹斎主人	好□□支本　教師三昧			×			×	
430	分野×7	小野□敬	赤穂義士真実談	洋	壱	×			×	
431	分野×7	上島長久	釋元恭	洋	壱	×			×	
432	分野×7	稲□正女	伽羅少年	洋	壱	×			×	
433	分野×7	□田敬□	記筆論館文例	和	弐	×			×	
434	分野×7	尾嘉□□□	男ごころ	洋	壱	×			×	
435	分野×7	涙香小史	涙香集	洋	壱	×			×	
436	分野×7	風雅道人	風流ざふし	洋	壱	×			×	
437	分野×7	□京博文舘	旅行案内	洋	一	×			×	
438	分野×7	江見水除	かまわぬ坿	洋	一	×			×	
439	分野×7	村井弦二□	血乃なみた	洋	一	×			×	
440	分野×7	山本雀龍	福島中佐遠征紀要	洋	一	×			×	
441	分野×7	□□□□□	ロビンソンクルーソー絶島漂流記	洋	一	×			×	
442	分野×7	岩本十綱	三國探檢實記	洋	一	×			×	

443	分野×7	山中鹿之助	山陰麒麟	洋	一	×			×	
444	分野×7	乙洄生	若菜籠	洋	一	×			俳諧	
445	分野×7	岡本半□	名將武邊一夕話	洋	一	×			×	
446	分野×7	丼上勤譯	空中旅行	洋	一	×			×	
447	分野×7	年廣鐵腹居士	雪中梅	洋	一	×			×	
448	分野×7	尾崎紅葉	きやろ物語	洋	一	×			×	
449	分野×7	南新二戯	鎌倉武士	和	一	×			×	
450	分野×7	渋柿園	條約改正	洋	一	×			×	
451	分野×7	□生實榮	聖空海	洋	一	×			×	
452	分野×7	□□少史	悪黨紳士	洋	一	×			×	
453	分野×7	偉人史	由比正雪	洋	一	×			×	
454	分野×7	櫻癡	□しや□低	洋	一	×			×	
455	分野×8	柏木覺深中□撰	本命的煞精義	和	三	×			占卜	
456	分野×8	横川茄	運命独案内	洋	一	×			×	
457	分野×8	白井鳥賀	除陽方位便覧	和	二	×			占卜	
458	分野×8	柗浦琴鶴	方監和侍集	洋	一	×			×	
459	分野×8	川田□莖	家相方位早和かり	和	一	×			×	
460	分野×8	摂陽天民居士	九星判断独案内	洋	一	×			×	
461	分野×8	芳野兵作	座右の銘	洋	一	×			×	
462	分野×8	モーリス	日落戦争未来記	洋	一	×			×	
463	分野×8	三味□人	うつら姫	和	一	×			×	
464	分野×8		三日月	洋	一	×			×	
465	分野×8		指環	洋	一	×			×	
466	分野×8	太事山人	新太郎少將	洋	一	×			書簡	
467	分野×8	吉擇富太郎	み乃しほり	洋	一	×			×	
468	分野×8	同	み之かけはし	洋	一	×			×	
469	分野×8		園碁濁稽古	洋	一	×			×	
470	分野×8		壮士必吟	洋	一	×			×	
471	分野×8		花柳仙郷	洋	一	×			×	
472	分野×8	法木徳兵	みやび乃友	洋	一	×			×	
473	分野×8	松本三五	花柳春□	洋	一	×			×	
474	分野×8	瀧川三代太郎	新領地嘉彎嶋	洋	一	×			×	
475	分野×8	鈴木喜三郎	戸籍□詳解	洋	一	×			×	
476	分野×8	黒木安雄	讃岐史要	洋	一	×			×	
477	分野×8	朋裏了	和語除驚録	洋	一	×			教訓	
478	分野×8	松本順	通俗民間治療法	洋	一	×			×	
479	分野×8		佛教新演説	洋	一	×			×	
480	分野×8	井上頼文	徒然草講義	洋	一	×			×	
481	分野×8	永島今四郎	千代田城大奥	洋	二	×			×	
482	分野×8		手鑑	洋	一	×			不明	古典籍総合目録に『手鑑』と付く本多数あり、どの本が同様のものか不明
483	分野×8		哥ひいなかた	和	二	哥ひいなかた　2冊	1688	不明	×	表紙の題がくずし字のため本に挟まれた札参照。札に書かれた作者は柏□軒。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学で検索を行ったが×。
484	分野×8		百人種	洋	一	×			×	
485	分野×8	青木輔清	五百名家真蹟集	洋	五	×			×	
486	分野×8	上田晴治	二体習字本	和	六	×			×	

487	分野×8	邦田梅石	習字單語	和	二	習字単語　村田海石書　2冊	1875	書道	×	
488	分野×8	同	四体千字文	和	二	×			不明	
489	分野×8	同	行書世話千字文	和	一	行書世話千字文　完	1883	書道	×	
490	分野×8		八分千文	和	一	八分千文	不明	不明	×	国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学で検索を行ったが×
491	分野×8		四書集註	和	一	林家正本再刻　四書集註	不明	漢学	漢学	裏表紙に「西谷斎右衛門」の書き込みあり
492	分野×8	岩代惠	平民ノ友	洋	六	×			×	
493	分野×8	吉田宥英	教玉	洋	四	×			×	
494	分野×8		伊蘇普物語	和	一	×			不明	
495	分野×8		明治小説文庫	洋	四	×			×	
496	分野×8		南海道名所圖會	和	六	×			不明	東海道名所圖會　一～六はあるがこちらの事か
497	分野×8		紀伊国名所圖會	和	十二	紀伊國名所圖會　12冊	1838	地誌	地誌	見返に「明治三十三年三月求之　□□傳治」と書き込みあり。巻末に「本家松尾金尾屋　斤原町」と印あり
498	分野×8		繪本忠孝美善録	和	十	絵本忠孝美善録　前編　一～五 絵本忠孝美善録　後編　一～五	1828	読本	読本	
499	分野×8	中村正直	西国立志編	洋	一	×			教訓	
500	分野×8	内藤□	中学會講義	洋	一	×			×	
501	分野×8	同	□世話法	洋	一	×			×	
502	分野×8		高野教報	洋	十七	×			×	
503	分野×8		難破戰記	和	一	×			×	
504	分野×8	高塚東太郎	日光安案記	洋	一	×			×	
505	分野×8		東京新繁昌記	和	一	服部誠一著述　東京新繁昌記　初編　二　四	1874	地誌	不明	3冊ある
506	分野×8	久留島武	海軍一斑	洋	一	×			×	
507	分野×8	彦	陸軍一斑	洋	一	×			×	
508	分野×8		中庸	和	一	新刻改正　中庸　後藤點　全　2冊 新刻改正　中庸　再刻後藤點　全	複数あり	漢学	漢学	
509	分野×8		論語	和	一	不明	複数あり	漢学	漢学	題に論語の入る本が61冊ある
510	分野×8		大学	和	一	新刻改正　大学　後藤點　全 同じ本2冊あり	複数あり	漢学	漢学	M25目録の本と同様か不明
511	分野×8	少松明觀	人□ふる道隨行	洋	一	×			×	
512	分野×8	中宮山綏介	德川太平記	洋	一	×			×	
513	分野×8	長島□島太郎	□訴□法講義	洋	一	×			×	
514	分野×8	松原岩土郎	女学世界	洋	一	×			×	
515	分野×8	大淵渉	當洋日記	洋	一	×			×	
516	分野×8	廣井汲	讃岐名所地誌	洋	一	×			×	
517	分野×8	内山正如	文藝倶楽部	洋	一	×			×	
518	分野×8		ZOO VUES	洋	一	×			×	
519	分野×8		万国歴史	洋	一	×			不明	
520	分野×8	岡本行敏	獨学全書	洋	一	×			×	
521	分野×8	西村寅治郎	奇事聚報	洋	一	×			×	

522	分野×8	福原有因	作文大全	和	二	雅俗要文　作文大全　上下	1877	往来物	往来物	
523	分野×8		唐詩選講義	洋	一	×			漢詩	
524	分野×8		訓蒙故事要言	和	六	×			教訓	
525	分野×8		四言教講義	和	一	四言教講義	1727	漢学	漢学	
526	分野×8		日本　諸願届書式	洋	一	×			×	
527	分野×8		あほら法	洋	一	×			×	
528	分野×8		郵便貯金條例反同施行細則	洋	一	×			×	
529	分野×8		約翰傳	洋	一	×			×	
530	分野×8	渡常三郎	幻燈替話	洋	一	×			×	
531	分野×8		漢語字引	洋	一	いろは漢語字引	1880	辞書	×	M25 目録の本と同様か不明
532	分野×8		世界外国大戰誌	洋	一	×			×	
533	分野×8		文久武鑑	和	一	新板改正　文久武鑑　西御丸附 巻之四	不明	名鑑　武鑑	名鑑　武鑑	
534	分野×8	森口永太	明治幼学便覧	洋	一	明治幼学便覧　全	1884	漢詩	×	表紙に朱筆で書き込み
535	分野×8		狂歌題林抄	和	一	狂歌題林抄　上	1805	狂歌	狂歌	
536	分野×8		大岡政談	洋	一	×			実録	
537	分野×8	田中治事	輿地誌略	洋	一	×			外国地誌	
538	分野×8	三井	夏衣	洋	一	×			俳諧	
539	分野×8	柴野栗山	石□□	折	一	不明	不明	不明	不明	
540	分野×8	平村壮	□ノ□	折	一	不明	不明	不明	不明	
541	分野×8		日本状態	折	一	×			×	
542	分野×8	大口八十一	日本名勝□	折	一	×			×	
543	分野×8	千葉繁	造代□□	洋	一	×			×	
544	分野×8	宮□天武	平野國臣	洋	一	×			×	
545	分野×8	石□□□	真□□言葉	洋	一	×			×	
546	分野×8	岩□□□□	會言□集	洋	一	×			×	
547	分野×8	大橋乙羽	累卵の東洋	洋	一	×			×	
548	分野×8	大橋□□	明治節用大全	洋	一	×			×	
549	分野×8		□□五十三次	洋	一	×			×	
550	分野×8	小泉□太郎	加藤□臣	洋	一	×			×	
551	分野×8	町田□□	地租増□□	洋	二	×			×	
552	分野×8	河野康二郎	東京□□□録	洋	一	×			×	
553	分野×8	頼雲□	佛教大原□	洋	一	×			×	
554	分野×8	三島通良	母のつとめ	洋	一	×			×	
555	分野×8	黒川□□	□□園□□記	和	二	×			×	
556	分野×9	小泉松卓	循環暦	和	三	授時歴註　循環暦　巻之二、三、三	1712	暦	暦	
557	分野×9	流斎百二	友故□	和	壱	×			×	
558	分野×9	観世太夫	謡曲外之部	和	二十	×			×	
559	分野×9	観世左近太夫	謡曲内之部	和	二十	×			×	
560	分野×9	大和田建柑	謡曲通解	和	二	×			×	
561	分野×9	大和田建柑	謡曲通解	洋	壱	×			×	
562	分野×9	大和田建柑	狂言評註	洋	壱	×			×	
563	分野×9	大和田建柑	謡と能	洋	壱	×			×	
564	分野×9		囃諷大成	和	壱	囃諷大成	1783	謡曲	謡曲	裏表紙に書き込み
565	分野×9	泉寿堂	鑒定便覧	和	七	×			金工	
566	分野×10	中島桧隠	都繁昌記	和	壱	都繁昌記	1867	地誌	地誌	
567	分野×10	服部誠一	東京新繁昌記	和	壱	服部誠一著述　東京新繁昌記　初編・二篇・四篇	1874	地誌	不明	分野を地誌にしてよいか不明
568	分野×10	宮崎師範学校	宮崎縣地誌提要	和	壱	×			×	

569	分野×10	青霞□志友	紀伊國名所會圖	和	十二	紀伊國名所圖會　全12冊	1838	地誌	地誌	見返に「明治三十三年三月求之　□□傳治」と書き込みあり。巻末に「本家松尾金尾屋　斤原町」と印あり。M25目録に紀伊國名所會圖が2セット表記されている。明治33に購入されたのはどちらか
570	分野×10		東海道名所會圖	和	六	東海道名所圖會　一～六	1797	地誌	地誌	見返しに「明治三十三年三月求之　□□傳治」の書き込みあり。巻末に「本家松尾金尾屋　斤原町」と印あり。巻末に「西讃多度郡五岳山麓善通寺郷　和楽室所蔵」と書き込みあり。
571	分野×10	半井悟菴	愛媛の面影	和	五	×			×	
572	分野×10	文園器用啓 梅居野口道直	尾張名所圖會	和	七	尾張名所図会　前編　一～七	1844	地誌	地誌	
573	分野×10		象の山ふるみ	和	壱	×			×	
574	分野×10		熱海乃草むすひ	和	弐	鎌倉江の島紀行　熱海乃草むら　上・下	不明	不明	×	写本。国立国会図書館・西尾市岩瀬文庫・早稲田大学で検索を行ったが×
575	分野×10	□女□	明治卅二年当用日記	洋	一	×			×	
576	分野×10	□女□	明治三十二年懐中日記	洋	一	×			×	

A Library of Intellectual and Graciousness by the Modern Local Merchant

TAKEDA Honami

Abstract

In this paper, the author researched a library built up by Denji the local merchant in Kagawa province, and considered the cultural enrichment of the modern local merchant and its background. Denji Library has its catalog made in Meiji 25（1892）. The author made library catalog in Heisei 23（2011）at this time. The comparison two catalogs made clear as follows:

Denji library were built up for learning of the culture of Chinese classics and graciousness. Denji was both a local merchant and an intellectual person. His library had many Chinese classics and some Chinese poem, game of go, tea ceremony, seventeen-syllable verve and so on. He also subscribed the magazines on politics and economics for his interests. The culture of Chinese classics studies and graciousness had spread through out the nation poor and rich alike in early modern Japan. Denji built up his library for learning under the foregoing cultural infrastructure.

The education of Confucianism was active in Kagawa province where Denji was born and lived. Denji's intellectual curiosity was influenced by intelligent environment like this. In Meiji Era, Confucian culture increased its force and Denji keenly learned it.

The character of Denji library gave suggestions how the local merchant adapt to the modernization.